

---

部品としての俺 『I as parts』 series 2nd story.

ほーらい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

部品としての俺 『I a s p a r t s』 s e r i e s 2  
n d s t o r y .

### 【Nコード】

N3150J

### 【作者名】

ほーらい

### 【あらすじ】

オートマータによって崩壊させられた研究所。

そこで彼は少女と出会う。そのことが彼の後の人生を大きく変えた。日常が崩壊するとき、彼は何を思うだろうか。

部品シリーズ第二作、『部品としての俺』ここに登場！

完結しました。次回から第三部が始まります。

第一部の『部品としての僕』『I a s p a r t s』 s e r i e  
s 1 s t s t o r y . はこちら<http://ncode>.

s  
y  
o  
s  
e  
t  
u  
.  
c  
o  
m  
/  
n  
6  
8  
9  
3  
i  
/

第零話 Killing (前書き)

この作品は、ところどころバイオレンスな表現があります。  
血飛沫などが苦手な方はご注意ください。

## 第零話 Killing

Unlimited Slaughter

21XX年、12月

『何が起こっているんだ!?!』

「ぐあああッ!」

『鎮静ガスを使用しろ! 研究員を巻き込んでもいい! とにかくヤツを止めるんだ!』

真っ赤な液体が白い花を濡らす。それは、可憐な白百合の花。真っ白な蕾の真っ白な花。

鉄のナイフが真っ赤な百合を散らす。花弁は引きちぎられ、無残にも飛び散って消えていく。

惨苦と叫喚に満ちた花畑を一人の少女が駆ける。

彼女の手には血濡れのナイフ。真っ赤になって刀身が見えなくなっても、なお彼女はそれを振るい続ける。

「鎮静ガス、効きません! ATP精製機関の効果で呼吸をする必要がないためかと……!」

『それなら麻酔銃を撃て! ヤツを止めるんだ!』

「あ、当てられるわけがありません! こ、ここは地獄です! あ、あの化けも……ぎゃあああああああッ!」

通信機を持った男が無残にも撥ね飛ばされる。彼の腕は通信機を掴んだまま宙を舞い、その化け物に踏み砕かれる。

少女は一通り獲物を狩り終わると、一度立ち止まって辺りの様子を窺う。

風もないのに花畑が揺れる。百合の花がさわさわと、何かが触れたかのように揺れる。

「……生命反応、感知」

すぐさま彼女の体が跳ねる。それは一瞬でその頭上に飛ぶと、ま  
つすぐに左胸を腕が貫く。

その白衣の男は悲鳴を出す間もなく地へ墮ちる。赤い噴水を噴き出  
しながら、赤い百合の花に埋もれる。

「……」

彼女は黙ったまま立ちつくす。もはやそこには狩るべき対象は存在  
しなかった。

手に持った血濡れのナイフから血の滴が垂れ落ちる。それは血だら  
けの土壤に吸い込まれ、そして消えていく。

次の瞬間、そこには彼女の姿はなかった。

## 第零話 Killing (後書き)

倒壊した研究所で彼は少女と出会う。

「お前は……誰だ？」

「答える！ 所属と名前、住民登録番号を言え！」

少女は震えながら辛うじて自分の名を告げる。

「わ、わたしは……」

次回、第一話 Finding

## 第一話 Finding

### 第一話

砕けた窓から月の光が降り注ぐ。

少年は銃を携え、少女へと突き付ける。月光に照らされた銃口は黒く、そして鈍く光る。

少女はまっすぐに少年を見つめる。その視線に敵意はない。疑問、恐怖、そして不安。それだけが眼指しに込められていた。

「お前は……誰だ？」

その問いに答えはなく、少女はなおも少年を注視する。

少年は銃を構える手に力を込める。

「答える！ 所属と名前、住民登録番号を言え！」

その大声にびくりとした様子で縮こまる。そして、恐る恐る口を開いた。

「わ、わたしは……」

彼の名は光間サトル（こうまさとる）。日本国正規軍ジュニアチームに所属する兵士である。

ジュニアチームとは齡20歳未満の戦災孤児を支援する組織の一つとして組まれた軍で、行き場を失った子供達を受け入れ、主に後方支援を行う軍隊である。

……というのは表向きの姿で、その真の姿は対オートマータ局地戦闘部隊である。

オートマータとはロベミライアが作り出した生体部品を用いたAI搭載型戦闘機械で、高い戦闘能力、自己修復能力、そして学習能力を持った強力な戦闘兵器である。

ジュニアチームの一部の部隊（三個小隊）はそれぞれ チーム、



チーム、チームと名付けられ、日本軍の主戦力の一つとして日夜訓練を続けている。

彼はその中でも、チームの隊長という栄誉ある地位に付き、いくつもの任務をこなしてきた。

二丁拳銃を得意とし、中でも彼が自分でチューニングした清羽と巨獣イモスの不格好な二丁拳銃を用いて戦う。

清羽は軽さを重視した銃で、速射砲と呼ばれる火器に分類される。

弾丸の軽さを極限まで軽くし、銃を撃った際の衝撃を可能な限り小さくすることによって精密かつ迅速な射撃を可能とする武器である。一発の威力は軽いものの、通常の銃器の数倍の弾速および連射速度を持つ。

巨獣は清羽とは対象的に、重火器と呼ぶに相応しい銃である。特殊な榴弾を使用し、散弾の飛び散る弾を榴弾にしたような弾丸、超炸メカバーストバレット弾を発射することが可能である（ただし、爆発力は一般的な榴弾の数倍）。

また格闘も得意としており、下手な鈍器よりも高い攻撃力を誇る。

打撃はもちろん、投げ、絞めなども得意としており、武装したオートマータ相手にも十分渡り合うことができるほどの実力を持つ。

特殊な体質で、生まれつき全身の臓器が左右反転している。

……そして雪舞う12月の某日、今日も彼は一つの任務を受けていた。

フォールスミッション（見せ掛けの任務）と呼ばれる任務で、その名の通り世間一般にジュニアチームが後方支援部隊であることをアピールする気楽なミッションである。

戦闘を一切伴わず、そして任務そのものも簡単かつ楽な任務な作戦で、チームの面々は特に緊張することもなく臨む。

今回の作戦は国籍不明の部隊に襲撃された研究所を搜索し、生き残っている研究員を救出したり、いくつかの指示を受けた物品の回収が主な任務だった。

「隊長、なに武器のチェックなんてしてるんすか。今回はお気楽ミッションっすよ」

部隊副隊長……近藤ヒロキが不思議そうにサトルの様子を見つめる。

「一応な。半壊したオートマータが残ってたりすると面倒だ」  
サトルはマガジンへと一つずつ弾丸を込めながら答えた。

辺りでは部隊の面々が楽しげに談話をしたり、カードゲームを楽しんでいる。

「そんな武器のチェックばかりしてないで、たまには女の子のチェックでもするべきっすよ。補給部隊のアミちゃんとかどうっすか？ 結構可愛いし、性格もいいっすよ」

「そんなこと言っても無駄よ」

一人の少女の声が響く。どこからか二人の少女が二人の元へと向かっていく。

「サトルの恋人は銃だもん。そんなこと言ってたって無駄よ無駄」

「11時32分、72度」

隣に並んだ少女がそう呟くとほぼ同タイミングでヒロキは銃を抜き、遠慮せずに引き金を絞る。

しかし、まるでその射撃を見越していたかのように少女は回避すると、きやははと笑う。

「ありがと、ヒメ。それにしてもそのすぐ抜く癖をどうにかしないと昇進できないわよ」

「問題ない、抜くべき時と場合くらい弁えている」

未だ銃口から白煙を上げる銃を収めながらサトルは…… 部隊隊長、篠川リンをにらみつける。

彼女は何事もなかったかのようにサトルの隣へ座る。相変わらず銃の調整を続けるサトルの射撃を正確に“予言”してみせた少女……  
烏丸ヒメは黙ったまま三人の様子を見下ろす。

相変わらず同じように談笑する少年達だったが、顔を寄せ合って話し始める。

「さすが隊長は化け物だよな……」

「いきなり銃を抜くサトル隊長も、それを避けてみせるリン隊長も

……まさに人外だよ」

「その二人と付き合える副隊長たちもな……」

その耳元を銃弾が駆け抜ける。

「聞こえてるぞ?」

「あ、す、すみません!?!」

サトルは再び銃口を拭い、ホルスターへと収めた。

「ホントに抜き時わかってるの?」

「任務には影響ない」

「そういう問題じゃないっすよ……」

再び銃を弄り始めるサトル。そんな様子に飽き果てるリン。結局自分も銃の整備を始めるヒロキ。相変わらず黙って立ちつくすヒメ。こんな四人の様子は、この部隊では日常茶飯事であった。四人がこうしているとき、それは平和を象徴するもので、逆にこれ以外の状況は平和な状況ではないと言えるわけである。

サトルの腕時計が音を出して鳴り始める。それを聞いて、銃を片づけ始めるサトル。

「時間だ」

彼は手早く整備用の道具を片付けると、武器の類をホルスターやケースに収め、軽く準備体操を始める。

ヒロキも慌てて整備していたライフルを片付けると、今回の任務で携帯する短銃やナイフを装備する。

リサとヒメは既に準備を終えていたのか、特にすることもなく立ち上がる。

「行くぞ」

「ま、今回も大したことないんでしょうけどね」

「それでも行くっすよ」

「……」

彼女の名前は篠川リン。数少ない女性隊員で、それと同時に チーム隊長を務める。

特殊な体質の持ち主で生まれつき筋肉の組成が特殊なため、重いものを持つたり、強い力を出したりすることができない。その半面素早い動きを得意とし、体を非常に早く動かすことができる。

そのため、反動の大きい銃器や、力の必要なブレードなどの武器を用いず、速さを最大限に生かせるナイフを得意とする。

彼女の持つ高周波ナイフ、シルバーハウンド銀狼は超高速で振動するヴィブロナイフである。高速で振動することによって高い切削能力を持つ。

「ヒメ、そつちはどう?」

「……ない」

リンは棚を漁りながらため息を付く。

「それにしても酷いわね。これだけ血だらけだと気持ちが悪くなるわ」

歩くたびに靴の裏が粘つくような感触。リンはその不快な気分をはぐらかすために思い切り血の塊を蹴り上げる。

それはべったりと壁に張り付き、奇怪な模様を描き出す。

「ひーめー! この任務、ホントやる意味あるの?」

「……」

ヒメは黙ったまま書棚に収められた本のタイトルを調べる。そこには彼女の探している物はなかったのか、次の書棚へと彼女は移る。

「ねえヒメ、聞いてる?」

「……私達は与えられたことをすればいい」

そう、ヒメは静かに答える。リンは血の染み付いたソファにどかりと腰を落とすと、手に持った書籍のページをめくる。

「そうね。任務に意味があるうとなかろうと、あたし達は黙ってそ

れをこなせばいいのよね」

しばらくの間、二人は黙って本のページをめくり続ける。

「ねえヒメ、ATPって何？」

「……アデノシン三リン酸。生体内化学反応のエネルギー伝達物質。解糖やクエン酸回路でADP（アデノシン二リン酸）から作られ、生体内の物質合成、吸収、成長、運動などの……」

「あー、ヒメに聞いたあたしが馬鹿だったわ」

パターンと本を閉じ、血糊を払いながらリンは立ち上がった。

「さ、次行くわよ。この部屋にはもう私達が探しているものもないみたいだしね」

ヒメは黙って頷いて本を書棚に戻す。

二人は一度後片付けを済ませると、書庫を後にした。

彼の名は近藤ヒロキ。チーム副隊長を務め、化け物揃いの隊長副隊長の中では比較的普通の部類に入る。

非常に目が良く、視力検査では測定不能（視力20・0以上）という値を弾き出すほど。

近接戦闘において特に並外れた技能を持っているわけではないが、彼の真の実力が生かされるのは遠距離からの援護に入ったときである。

非常に精密な射撃を行うことができ、夜間でも星の光さえあれば照明なしで数百メートル離れた対象でも狙撃してみせる。

そんな彼の得意武器は当然のことながらライフル。弾芯にタングステンを使用した通常弾と劣化ウランを使用した劣化ウラン弾を使い分ける。彼の愛銃、シルフィード精霊は強力なスコープを搭載した超長距離射撃用のライフル。一般の兵にはとても使いこなせるようなものではないが、彼が扱えば数キロ離れたピンの穴でさえ正確に狙撃することが可能である。

「たいちよ……この研究所って何を研究してた研究所なんすか？」

「新型の兵器を開発していたそうだ。どんな兵器までかは知らんがな」

サトルは本のページをめくりながら答える。彼が目を通している本は遺伝子工学の本。

「ここ、なんでこんなに人間に関する本が多いんすか？」

そう言いながら、ヒロキはミトコンドリアについて記述された本を放り投げる。

「さあな」

大体の本の内容を頭に収めたのか、サトルは本を本棚に戻す。そして次の本を取り出し、再びページをめくり始めた。

ヒロキは本をめくることに飽きたのか、椅子に腰かけたまま背伸びをする。

「それに、運び出されるように言われた本はどれも百合について記述された本全て……。兵器と百合って、何の関連があるんすか」

「知らん」

本の中に百合についての記述が見当たらないことを確認すると、サトルは本棚へ本を戻した。

「お前もサボっていないで探せ」

「じゃあ、俺は向こうの部屋を調べるっす。この部屋は隊長に任せらるっすよ」

そう言っつて、研究室から去ろうとするヒロキの襟元をサトルはがちり掴む。

「待て。そっちはラウンジだろう？」

「だからラウンジの方に何かないかと……」

「それなら、隣の書庫を探せ、な？」

そう言っつて、サトルは隣の書庫へと繋がるドアを指さす。

「う……わかつたっす……。探せばいいんすよね、探せば」

そう、彼は不服そうに言いながら隣の部屋へと歩いていった。

彼女の名は烏丸ヒメ。チームの副隊長を務める寡黙な少女である。身体能力や、扱う武器は並みの兵士と何ら変わらない。むしろ低いと言った方が正しいだろう。

そんな彼女が副隊長を務めている理由は他にある。

彼女の眼は三秒先の世界を見ることが出来る。つまりはプレコグニション（予知能力）を扱うことができるのだ。

前述したように、彼女が見ることが出来るのは三秒先まで。つまり、素早い判断力と優れた知能を必要とする能力である。

もちろん、彼女にこの二つは備わっている。その頭脳も副隊長に任命された要因の一つだと言えるだろう。

「……………」

彼女は黙ったまま、本のページをめくり続ける。リンなど飽きてしまつて勝手に紅茶を飲んでいる。

「ヒメー！　一緒に紅茶飲もうよー！」

「駄目……。まだ終わってない」

彼女はそうぼそりと呟くと、再び本へと目を落とす。

リンは退屈そうに紅茶を飲む。何か菓子でもあれば完璧なのだが、残念なことにそういった類のものは準備されていないようだ。

「ひーめー！　いいじゃん調査なんてさー。どうせフォールスミッシヨンなんだからさあ」

ヒメは名前を呼ばれても完全に無視を決め込み、黙々と本を読み続ける。

「ちえ、せつかくヒメの紅茶も入れたのに……………」

ようやくヒメもリンのしつこい勧誘に折れたのか、本を持ったままリンの前に座る。

「ささ、熱いうちにぐーってさー！」

言われた通り、ヒメは冷める前に一口飲む。

「……………ぬるい」

紅茶の入れ方が、それとも紅茶の温度か。どちらかは不明だが、彼

女は本を置いて簡易給湯室となつてゐる書庫の一角へと立つ。

「どうせあたしは紅茶入れるの下手ですよー」

口をとがらせてくれるリン。ヒメは黙つてポットへとお湯を移し、一度捨ててからもう一度お湯をポットへ入れた。そして、茶葉をポットへ入れると、ゆっくりと浸出させる。

それを二つの新しいカップに注ぎいれるとテーブルへ戻り、リンに差し出す。

「うん、ありがと」

そう言つてリンはカップを受け取る。もう一つは自分の前に置き、本を読みながらゆっくり香りを楽しみながら口に含む。

「紅茶は95 以上でないと言葉が開かない」

「そうは言つても、面倒なんだもん。それにあたしみたいな馬鹿には紅茶の味の違いなんてわからないし」

そう言つて、熱い紅茶をゆっくり飲む。

本を読み終わったのかヒメは本を一度書棚に戻すと、次の本を持って席へと戻る。

「こつやつていつまでもずっと紅茶を飲んでいられたらいいのにね」  
「……」

リンの言葉に対しての答えはなかったが、確かにヒメは首を縦に振つた。

そして時が経ち、夜へと近付きつつあった。

長い時間本ばかり読んでいたためかサトルは首を振つて肩を鳴らす。ごきごきと小気味のいい音が鳴った。

「少し休むか」

サトルは本を本棚へ戻すと、隣の部屋にあるというラウンジへと向かう。

おそらく研究員用だと思われる無料の自動販売機のボタンをプッシュする。紙コップが落ちてきて、こぼこぼとコーヒーが注がれる。



熱いコーヒーを少し口に含ませ、彼は顔を歪めた。

「不味い……」

彼にとつて苦味も酸味も甘味も中途半端。どれもこれもが中途半端過ぎて、一つの形に成りきれていないとでも表現すればよいのだろうか。

「飲むにも値しないな」

そう言つて彼はその中身を流し台にぶちまけると、コップを潰してごみ箱へと放る。

「……ふう」

かつては大きな窓がはまつていたであろう窓枠は無残にも歪められ、それを破壊した存在がいかに強力な力を持つていたかを物語っている。

彼は窓枠に張りついている窓を軽く叩いた。床へとまっすぐ落ちていったガラスの欠片は、堅いリノリウムの床にぶつかり、粉々に砕け散った。

「ッ!?」

サトルはとつさに物影へと隠れる。ガラスが砕け散った瞬間、確かに何者かがはつという風に息を吸い込む音を聞いたのだった。

彼の視界の範囲内には誰一人いなかった、にも関わらず呼吸の音が聞こえたということは誰かが隠れているということである。

獣の呼吸音ではない。人と獣のそれでは明らかに違いがありすぎる。ゆえに、彼が聞いた音は誰か隠れている者のものだと断定できる。

「誰だッ!」

彼が大きな声で怒鳴ると、またしても息を吸う音を耳にする。それと同時に、がちがちという、何か硬いものががこすれあうような音も聞こえてくる。

彼はゆっくりと体を出すと、身を屈ませたまま音の発生源へと忍び寄る。腰に差されていた自動小銃はすでに彼の手のの中にあつた。

月光が……白い頬を照らす。

両手を口でふさぎ、目に一杯の涙をため込み、がたがたと震えなが

ら蒼白な表情を浮かべる一人の少女がそこにはいた。

純白の長髪。羽毛のように柔らかで、まさしく天使の羽を髣髴させるそれを携えた少女は、同様に真っ白な肌、そして装束を身にまとっていた。だが、それはもはや血が染み込んでおり、とてもではないが着れたものではなかった。

手には銀のブレスレット、ほかにはアクセサリらしいものは見当たらない。

「お前は……誰だ？」

肩をびくりと震わせて彼女はすぐみ上がる。月光は彼女の悲壮な表情を明るく照らす、それを見ても彼は語尾を強めて尋ねる。

「答える！ 所属と名前、住民登録番号を言え！」

ぼろぼろと大粒の涙を流し始める少女。サトルはやれやれという表情を浮かべ、まっすぐに構えていた自動小銃を床に置き、両手を頭の上に回した。

「俺はお前に危害を加えにきたわけではない。任務でここを訪れただけだ。研究員を見つけた場合の対処については聞いていないが、おそらく保護するよう言われるだろう」

その様子を見て少女はようやく、それでも恐々と口を開く。

「わ、わたしは……わたしはユリ……ユリです……」

「名字は？」

彼女はぶるぶると首を横に振る。

「わ、わかりません……」

「所属は？ 登録番号は？」

同じように首を横に振る少女。サトルは大きなため息をついた。

腰に差された通信機を手にとると、彼はそれに向かって喋り始める。

「一階ラウンジにて所属不明の少女を保護」

しばらくすると、クリアな音声が通信機から流れてくる。

『少女？ まさか生き残り？』

「かもしれない。ともかく指示を」

しばらくの空白の後、返答が帰ってくる。

『あなたはその子を連れて戻ってらっしゃい。あなたの部隊はヒロキにまとめてもらって。それから、リンちゃんかヒメちゃんを連れてきてちょうだい。女の子が一人必要になるでしょうから』

「了解」

サトルは通信機と床に置いた銃を腰に戻すと、少女の方へと手を差し伸べる。

「立てるか？」

「は、はい……」

少女は彼の手を握ると、ゆっくり立ち上がった。

「怪我はないか？」

「あ……えと……いたた……」

少女はふらふらと揺れながら近くの机に手をついた。サトルは慌てて駆け寄ると、彼女の体を支えた。

「足が……少し……」

足にはどこでつけたのか、軽い切り傷があった。サトルは腰のバツクパックから消毒液やガーゼを取り出すと、消毒液をガーゼに染み込ませた。

「少し染みるぞ」

「え、あ、そんな、いいですよ！」

サトルは彼女の言葉も聞かずに足の傷を手当する。当の少女は顔を真っ赤に染めてうつつむく。

最後に止血判を当てて包帯を巻くと、彼は立ち上がる。

「終わったぞ」

「あう……えつと……その……」

少女は赤面しながらも、何かの言葉を紡ぎ出そうと必死に言葉を探す。

やがてその言葉を探し出したのか、小さな声で少女は呟いた。

「あり……がとう……ございま……す……」

「礼には及ばん。これも職務の内だからな」

彼女はそっと歩こうとする。どうやら、歩くには問題ないようだ。

「さつきはいきなり銃を向けて悪かったな」

サトルは腰のホルスターに銃をしまいながら言った。少女はふるふると首を横に振る。

「こ、こつちこそいきなり怖がつてすみません……」

「銃を向けられれば恐ろしいのは当然だ。俺でもメンテナンス以外では銃口を覗きたくない」

「あ、怖かったのは銃の方じゃなくて……えと……その……」

少女はサトルの方をちらちらと見ながら答えに詰まる。

「サトルだ。俺の名は光間サトル。ジュニアチーム チームの隊長だ」

「えっと、サトルさんの声が怖くて……すみません」

少女はぺこりと頭を下げる。そんな律義さにサトルは面食らう。

「おいおい、謝るようなことじゃないだろう。大声を張り上げたのは俺の方だ。俺こそ怖がらせてすまなかった」

サトルも少女に頭を下げる。

少女はやがて顔を上げる。サトルもほぼ同時に顔を上げた。それからしばらくして、少女は笑い始めた。

「あははは、二人で頭下げるなんて……」

「何かおかしいか？」

「いえ、でもあんなに怖かった人がこんなに面白い人だなんて……サトルには少女にとって何が面白いかを理解することができず、しばらくの間考え込む。そんな彼の様子を見て、少女は再び声を出して笑った。

「あはは、笑いすぎですね、わたし」

「む、俺には何が面白いのか理解できん」

「面白いんじゃないんです。でも、なんかおかしくって……」

少女はしばらくの間、笑い続ける。サトルは机に腰かけて腕を組んで真面目に考え込んでいた。



## 第一話 Finding (後書き)

任務を終えた彼らは帰宅の路につく。

シャワー室でヒメは血だらけの少女の髪を洗ってやっていた。

「あの……その……」

ユリはヒメの手を止めようとするが、ヒメは頑として髪を洗う手を止めない。

「駄目、命令だから」

髪を洗い終えたユリはヒメに連れられて一つの部屋へ向かう。

そこにはサトルと彼の師匠でもあり、育ての親でもある芝中ミサトが待っていた。

## 第二話 Shopping

### 第二話

彼女の名前はユリ。研究所で保護された、唯一の生き残りである。研究所襲撃の際に記憶を失っており（何かしらの強い衝撃を受けたものと思われる。精神的なもの？）、自身の名前さえも、ようやくユリ、という部分のみを思い出すだけで名字も所属も住民登録番号も思い出すことができない。

サトルの上司でもあり、師でもあり、そしてジュニアチームの責任者でもある芝中ミサト少将の調査によると、彼女の顔も名前も研究者のリストに載っていないことから被験者だろうと推測されている。“上層部”の協議の結果、彼女は一時的にジュニアチーム（実戦部隊 チームではなく後援部隊）に所属することとなった。

温かいシャワーが降り落ちる。

白髪の少女の横で、彼女の体や頭にこびり付いた血を落としてやっているのはヒメだった。

排水溝は瞬く間に朱に染まり、紅へと変化するも、すぐに透明な水が流れ始める。

「あの……その……」

ヒメに何か話し掛けようとする少女……ユリだったが、ヒメは黙って彼女の体を洗う。

静寂がシャワー室を包み込む。

ヒメはタオルにくるんだ石鹸でこしこしと泡立てると、丁寧に、それでいて迅速に体を洗う。

体に染み込んでいた鉄の臭いもいくらか落ち、石鹸の香りがほんのりと鼻をくすぐる。

シャンプーを両手で包むと、彼女は目や耳に入らないよう髪の毛を洗ってやる。

「あう……………じ、自分で……………」

「駄目、命令だから」

そう言っただけでヒメは自分で彼女の白髪を洗ってやる。血糊はすっかり落ち、気分のいい芳香があたりに漂う。

「あ……………ありが……………とう……………」

「どういたしまして」

ヒメは短くそう言うと、先にシャワー室を後にする。ユリも慌てて彼女を後を追ってシャワー室から飛び出す。

ヒメが手渡したタオルを受け取ると、ユリは濡れた体を丁寧に拭いた。

ユリは渡された下着と肌着、そして服を着る。

「サトル、終わった」

「わざわざ呼び出してすまないな」

「……………」

ヒメは黙って頷いた。

「ユリ、こっちに来い」

彼女はやや心配そうな表情を浮かべてヒメを見つめる。

「大丈夫」

ヒメは小さな声でそう言うと、きびすを返して歩き始める。

ユリは不安げな表情を浮かべたまま、先を歩くサトルの後を付いて歩く。

やがて、一つの大きな扉が現れる。サトルは二度ノックをすると、失礼しますと言って扉を開いた。

中には一人の女性が待ち構えていた。黒の長髪を腰まで垂らし、表情の柔和な女性だった。しかし、彼女の腰にも一丁の拳銃が差し込まれている。

「サトル、いらっしやい」

「命令通りシャワーを浴びせさせてから来た。これでいくらか血の



臭いがましになった」

「そうね。でも、まだかすかに残っているわね。まあ、すぐに取れるでしょう」

彼女は二人に座るよう指示する。サトルとユリは用意された椅子に腰かけた。

「えーと、軍の“上層部”、つまりは“お偉い様”の協議の結果、彼女はしばらくの間ウチで預かることになったわ」

「彼女も軍務を？」

「いえ、後方支援の方ね。つまりは何もしなくていいってこと」

後方支援とは名ばかりの、ジュニアチームの中でも雑用しか命じられない者達がいる部隊だ。特に何かをしたりするわけではなく、軍が戦災孤児支援をしていますよというアピールをするための部隊である。

「でさ、部屋なんだけどね。空き部屋がないのよ」

「どういうことだ？」

しばらくの間ミサトは唖っていたが、やがて口を開き始める。

「女子寮が全室満室なのよ。去年多く取りすぎちゃったから、今年は減らしたんだけど、それでもまだまだ多くてねえ。全部屋二人入って満室状態。かといってほかの部署には回せないし、でも住むところは必要よね」

彼女はそこで手をぼんとたたくと、まっすぐにサトルを指さす。

「そ・こ・で、女の子に一番手を出さなそうあなたと相部屋になつてもらえる？」

「……意味が良く理解できないのだが」

「男子寮もいっぱいと言えばいっぱいなんだけど、何人かは一人で部屋使ってるのよね。でも、だからといってその子達と一緒にして襲われたら困るでしょうし、それにいきなり入居者が増えたら困るでしょうから、あなたにお願いすることにしたの」

「……俺もいきなり入居者が増えたら困るんだが」

「いいじゃない。どうせ部屋は綺麗にしてるんでしょ？」

「ま……まあ比較的整頓されているな、外見的には」

「じゃあ決まりじゃない。それに、あなたって奥手だから襲わないでしょ？ だから安心よ」

肩をぽんと叩いて、ミサトはサトルの目を見つめる。

「もし、嫌だと言ったら……？」

「命令違反で軍法会議にかけるわよ？」

「……わかりました」

彼は額に手を当てて深くため息をつく。こんな上司がいてもよいものだろうか、激しく嘆く。それはもう、暗くじめりとした森のように嘆く。

「あの……その……」

「そうだ、本人の意思はどうなんだ!？」

そう言つて、ぐるりと90度旋回してユリへ詰め寄るサトル。

「わたしは……わたしはそれでも……いいです」

再びがつくりと膝をつくサトル。それを面白そうに笑つミサト。

「あはは、じゃ今日は先が上がっていいわよ。そろそろ部隊の子達も戻ってきてもらう予定だったし」

腰の通信機に向かって喋り始めるミサト。資料の運搬を終えたらそのまま流れ解散だと告げると、彼女は通信機を置いた。

「こんな適当な軍隊があつてもよいのだろうか……」

「あ、ヒメー！ あなたも上がつてもいいわよー!」

「面倒だな……」

寮への帰り道、彼が駆るバイクは明るい夜道を走り続ける。

道の両サイドには数多くの街頭が立ち並び、並立するビルの群れはいずれも光々と輝いていた。

ユリはしっかりとサトルにしがみついて体重を彼に預ける。

「あの……迷惑だったでしょうか……？」

「いや、気にするな。だが、普通にベッドで寝られるようにするに

「はちよつと問題があつてな」

信号機が赤に変わる。彼は一度バイクを止めて振り返った。

「当分は俺のベッドを使うといい」

「それじゃあ、サトルさんは？」

「俺は床に寝る」

信号が青く灯る。サトルは一気にスピードを上げて走り出す。飛ぶように夜景が流れ去っていく。

「だ、だめですよ！ そんな床で寝るなんて……」

「問題ない。地面で寝ることも時にはある。屋根のある場所で寝られるんだ。文句はない」

サトルは徐々にスピードを下げる。Ｔ字路で曲がり、またすぐに曲がって脇道へ入ると、男子寮はすぐである。

「到着だ」

一度地下駐車場へと降りる。何台かの車と、多数のバイクが止められている。

サトルはその列の中へバイクをねじ込むと、ヘルメットを外した。

「こつちだ」

自動ドアをくぐると、カードキータイプのロックされたドアが二人を出迎える。

サトルは財布からカードを一枚取り出すと、機械へ通す。

「さ、こつちだ」

エレベーターを上がり、やがて一つの部屋の前へと到着する。彼はもう一度カードを通すと、がちゃりと錠が開く音が鳴る。

彼はドアを開き、ユリを中へと招き入れる。

「お邪魔します」

ユリは丁寧に靴を揃えて部屋へ上がる。

入ってすぐ左側にバスルーム、そしてまっすぐ進むとリビングがあった。その奥にはベッドが二つ、部屋の両サイドに置かれている。

キッチンリビングの手前側にあり、中は綺麗に片づけられている。リビングには小さなテーブルと椅子が一つ置かれていた。テーブル

の上には何も無い。

一言で表すならば殺風景。まさに何も無い部屋だった。

「ベッド、二つありますね」

「一つは使えない。ちよつと訳ありでな」

彼はベッド脇に座り込むと、マットレスの端にかけられていた留め金を外す。

マットレスが大きく飛び上がり、ベッドが二つに割れてトランクケースのように開いた。

「凄い……」

「趣味で集めていたんだが、保管場所に困ってな。仕方なくベッドを改造して突っ込んである」

そこに収められていたのは、黒い銃身の光る火器類。

「これは……リボルバー式の銃ですか？」

「骨董品さ。今じゃほとんどがオートマチックだからな」

「触ってもいいですか？」

「弾は抜いてある。好きにするといい」

ユリは一丁の重い銃を持ち上げる。丸い弾倉には当然ながら弾丸は入っていない。

「銃に興味あるのか？」

「少しだけ……こっちはもつと古いですね」

「アメリカの西部劇時代の銃さ」

「ウインチェスターライフルですね」

サトルは驚いたような表情を浮かべて、ライフルを弄るユリを見つめる。

「良く知っているな」

「一昔前までは同じタイプの銃がスポーツに使われていたと思います」

「クレー射撃だな。最近はめつきり減ったがな」

今の時代、銃は戦争の象徴である。平和目的のスポーツとはいえ、敬遠するものが多かった。同様の理由で、狩猟も減っている。

「戦争がない時代の遊びさ。いまでは銃を禁止する法律が厳しくなつて、軍人以外が銃に触れる機会も減った」

量産された銃器は戦争へと投入されると同時に、厳しい規制の対象ともなる。一般の民間人が銃を携帯するのは特別な場合を除いて許可されない。これは日本だけでなく、ほかの多くの国もそうであった。

「銃は恐ろしい武器ではあるが、それと同時に深い歴史を刻んだ歴史書でもある。その時代の用途に応じて作られ、様々な発展を遂げてきた」

「少し前では娯楽のため、今では戦うため、ということですね」

「そういうことだ」

彼は腰のホルスターを外すと、ベッドの脇の棚へしまいこみ、施錠する。今の法律では、銃器はきちんと施錠して保管しなければならぬと義務付けられている。言わば毒物と同じ扱いだ。

「さあ、もう遅い。ユリも疲れているだろう？ 早く休んだ方がいい」

サトルはベッドを閉じると、きちんと施錠する。もつとも、銃器がこんな場所に保存されていると思うものもほとんどいないだろう。

「シャワーを浴びてきたはずだが、風呂も入るか？」

サトルは上着をハンガーにかけてクローゼットへしまった。

「いえ、遠慮しておきます」

「そうか。ベッドは使つて構わない。俺は風呂に入ってから寝る」  
そう言つて、サトルは寝室を後にした。

後に残されたユリもやや戸惑いながらベッドに横になる。

枕元のスイッチを弄ると電気が消える。部屋は闇に満たされ、窓から飛び込んでくるわずかな光だけが部屋の中を照らす。

ユリは目を閉じてからいろいろなことを考える。

気付くと無機質な部屋の隅でうずくまっていた自分。理由はわからないが、心臓は激しく動悸し、恐怖が身を包みこんでいた。

やがて、窓ガラスが砕ける音。そして、先ほどまで話していた少年

の大声。

意味がわからず、ただ恐怖だけが体を満たす。銃を構えられ、そして引き金に指がかかる。

彼女には、それが命を奪う道具だとすぐにわかってしまった。恐怖は倍增され、歯ががちがちとなったのを覚えていた。

だが、少年は銃を床に置くと、手を差し伸べてくれた。

その手を見たとき、不思議と震えは収まり、恐怖は何処かへと去っていった。

彼は優しく話し掛けてくれた。その温かさに触れて、彼女は少しだけほっとした。

それから矢のように時が過ぎる。自分の体を洗ってくれた少女との出会い。優しくそんな女性と少年の話。少年の乗るバイク。そしてつい数分前の銃器のコレクション。

記憶がないことは悲しかったが、ともかく今生きていることは確かである。ならば、なぜ記憶を失ったのか、どんな記憶を持っていたかわかるまで、自分は生きなければならぬだろう。

そう思うと、今の状況もそう迷わずに受け入れることができそうだった。

明日はどんなことが待ち受けているのだろうかと考えると、恐怖や悲壮感よりも期待が勝る。

また、あの少女には会えるのだろうか。会うことができれば、きちんと礼を言いたいと彼女は思った。

夜が明け、サトルはカーテンのすき間から降り落ちる光と、聞き慣れない音で目を覚ます。

「ん……」

体がごきごきと鳴る。やはり堅い床で寝るのは体に堪える。特に任務で一日動いた後は酷い。

彼は伸びをすると、聞き慣れない音の源を探す。軽快なリズム感を

持って鳴る硬い音と、ゆつくりとしたメロディー。それはキッチンから聞こえるようであった。

「おはようございます」

「おはよう……どうしたんだ？」

サトルがキッチンへ向かうと、ユリはすでに起きていて料理をしていた。

軽快なリズムは包丁がまな板を叩く音で、ゆつくりとしたメロディーは彼女の鼻歌であった。

「朝ご飯を作っているんです。その……迷惑でしたか？」

「いや、構わない。きちんとした朝食をとるのは久しぶりだな。むしろ歓迎するくらいだ」

普段の朝食は固形栄養剤か、栄養ドリンクの類である。最後に朝食らしい朝食をとったのはいつだろうかと記憶の底をあさるが、思い出すことはできなかった。

「もうすぐできますから、待っていてくださいね」

「何か手伝うことはあるか？」

「じゃあ、食器の準備をお願いします」

サトルは言われた通り、碗と茶碗、そして皿を用意する。

ユリはすぐに料理を完成させ、温かな湯気を上げる味噌汁と、ほかほかのご飯、香ばしい匂いを放つ焼魚を用意する。

「ふむ、なかなか上手だな」

「こつというのは得意だったみたいです」

二人は向かい合うように席に座る。二人の前には出来たての焼魚定食。

「いただきます」

サトルは箸を持つと、まず一番に味噌汁をすすった。

細かく刻まれたネギが入られたそれは、体だけでなく心までも温める優しさが込められていた。

「美味しい」

「気に入ってくれたみたいでよかったです」

焼魚は絶妙の焼き加減で、箸を入れると脂がにじみ出る。それを冷めないうちにほぐしながら身をつまむ。

「魚の焼き加減もいいし、味噌汁の味噌の量も的確だ。ご飯の水加減も丁度いい。満点だな」

「そこまで褒められると照れちゃいます」

ユリは嬉しそうに笑った。食べる者が喜んでくれる料理ほど作り甲斐のあるものはない。

二人は朝食を済ませると、今度はサトルが食器を片付ける。

ユリも手伝つと申し出たが、サトルは美味い朝食を作ってくれたのだから、片付けは自分でやると言つて一人で片付けを進める。

しばらくの間キッチンに立ってサトルが皿を洗う様子を眺めていたユリだったが、やがてテーブルへ戻つてサトルが皿を洗い終えるのを待った。

「終わったぞ」

サトルは新聞を片手に現れる。新聞は毎朝届けられると、自動的に部屋まで送られる仕組みとなつていた。

「おつかれさまです」

「大した手間じゃない」

そう言つて彼は椅子に座ると、新聞を広げて読み始める。

しばらくの間新聞を読み終えるのを待とうと思つていたユリだったが、やがて我慢しきれなくなったのか、新聞を読んでいるサトルへ尋ねた。

「あの、サトルさん。今日はどうするんですか？」

「今日は非番だ。だから買い物に出かけるつもりだ」

「買い物ですか？」

「ユリの服や日用品を買う。そのための金は師匠から預かってきた」  
そう言つて、サトルは封筒をテーブルの上へ放り投げる。封筒の中には一万円札がぎっしりと詰まつていた。

「慎重に選ぶように、と言われている。だが俺には女の日用品などわからん。だから同僚を連れていくつもりだ」



「それって……」

「一人は昨日会ったと思うがヒメだ。もう一人は俺と同じ隊長をやっているリンってヤツだ。すでに昨晚のうちにメールを打った。しばらくすれば来るだろう」

「もう来てるわよ」

ユリは驚いて顔を上げる。サトルはそこに二人がいるということがさも当然だというように新聞を読み続ける。

「毎度毎度言っても無駄だとは思うが、勝手に鍵を開けるんじゃない。なんのための鍵だと思っている？」

「いいじゃない。これもヒメの技術向上の手助けだと思えばお易い御用でしょ？」

ヒメは黙って偽造カードキーを放る。サトルはため息をついてカードを折った。

「また新しい鍵を付けないとならないだろうが」

「いいじゃない。お金なんていくらでもあるんだし」

「面倒だ」

そう言っつてサトルは新聞を閉じると、テーブルの上へ放った。

「一応紹介しておく、昨日話したユリだ」

「は、はじめまして」

ユリはぺこりと頭を下げる。

「よろしくね。それにしても……まったく、師匠もムチャクチャよね。男と同じ部屋に女の子を泊めるなんて」

「師匠には男とか女とかって概念がない。だからどうでもいいことなんだろう」

「あー納得。絶対自分のこと女だと思っつてないよね……」  
ヒメも黙って頷く。

「さ、行くわよ」

「あの、行くつてのは……」

「決まってるでしょ。ショッピングモールよ」

一台の黒いワゴン車が車道を走る。他に走っている車は見当たらない。平日の真昼間ともなると、通行量の多い国道を除くとほとんど車が走ることはない。

五人はやや騒ぎながらドライブを楽しむ。

「にしても、なんで毎回毎回オイラが駆り出されるんすか？」

「お前しか車を持っていないからだ」

「だってバイクの方が手軽だもん」

「……」

四人の中で唯一自分用の車を所持しているというだけで、このグループが出かける際は毎度毎度足にされているヒロキが不平を言う。しかし、それは他の三人によってあつという間に潰される。

「まあ、オイラも楽しいからいいんすけどね」

ちなみに、四人とも一通りの乗り物の免許は取得している。原付、自動車、さらにはトラックや重機、ヒメに至っては航空機や船舶をも自在に操る資格を持つ。

「でしょ？ だから別にいいのよ」

リンはふんぞり返つてさも当然だというように言う。ユリはそんな四人の様子を微笑ましく見守る。

「そういえば、ユリちゃんは今隊長のトコに住んでるんすよね？」

「あ、はい、そうです」

ユリは突然会話を振られ、やや戸惑うも返答を返す。

「はあ、こんな美人と一緒に住めるなんて……隊長が羨しいっす」

「え、え！？ わ、わたしが美人！？」

真っ白な頬を真っ赤に染めながらユリは驚きふためく。

「あら、ユリは十分美人よ」

「……」

リンの言葉にヒメもうんうんと頷く。

「そのうち、隊長も手を出しちゃうんじゃないすか？」

サトルはため息をついて拳銃を取り出す。

「じよ、冗談つす！ 嘘つす嘘嘘！ 隊長に限ってそんなことがあるわけないつす！」

サトルはもう一度大きなため息をついて拳銃をしまう。ユリが乾いた笑いを浮かべる。

だが、他の二人には日常茶飯事なのか、やれやれといった様子でヒロキの座る運転席を蹴り上げる。

「り、リン隊長！？ 痛いっす！ 痛い痛い痛い！」

「いい加減学習したら？」

「……馬鹿」

運転中にとんでもない悪ふざけをする四人だが、ユリには四人がこのやりとりを楽しんでいるように感じられた。

ヒロキも学習していないのではなく、こつやってふざけあうのが楽しいからサトルをからかっているのだろう。

ユリは、こんな楽しい四人の中に混ざることができてとても楽しく思う。

「さ、着いたつす」

背中を蹴られながらも、ヒロキは安全運転で駐車場に車を止める。

「具体的には何買うの？」

「まずは衣類だな。今着ている一着しか持っていないはずだ。あとは歯ブラシなんかの日用品だな」

「了解！ 予算は？」

「百万円」

そう言っつて、サトルは万札がぎっしりとつまった封筒を手渡す。

「師匠が全部使いきつてもいいと言っていた。ただし、一応領収書は付けるとのことだ」

「わかつたわ。じゃ、あんたら用済みだからゲーセンでも行つたら？」

「そうさせてもらつす！」

サトル達男子陣と、リン達女子陣はショッピングモールに入つてす

ぐに二手に分かれた。

「終わったらそっちに行くわ。いつもの店でしょ？」

「ああ、そのつもりだ」

「じゃあ、また後でね」

サトル達はゲームセンターへ、リン達は衣料品店へと向かった。

サトルとヒロキは行き慣れたゲームセンターへと足を進める。

「サトル様、ヒロキ様、ようこそいらっしやいました」

店員が恭しく挨拶する。二人はゲームセンターの常連客であるとともに、ゲームセンターにとっての上客でもあった。

「両替してくれ」

そう言つて、サトルとヒロキは一万円札を十枚ずつ差し出す。彼らは普段から軍務についているため、一人暮らしをするには十分すぎるほどの収入を得ていた。

「はい、わかりました」

軍人はそこにいるだけで警察のように治安を高める効果を持つ。警察以上に軍人は恐ろしいからだ。それゆえに、ゲームセンターは彼らを厚遇するのである。

それと同時に、市街地でもテロ事件が発生することが多々ある。それゆえに市民はあまり外出したからない。それゆえに、普通の学生なども気軽に訪れることはない。ゲームセンターとしては、数少ない客であると同時に、治安維持効果を持つ最上の客なのだ。

もっとも、テロを恐れぬ廃人ゲーマーや、不良学生などは相変わらず訪れる。彼らが存在するからこそ、ゲームセンターも営業を続けることができるのであった。

サトルとヒロキはさっそくガンシューティングゲームの機械に紙幣を投入する。平日の昼間ということもあって、客はわずかであった。

「隊長、目標スコアはどれくらいすすか？」

「100万だな」

二人は慣れた手付きで銃型のコントローラーを構える。実際に普段から銃を扱う者にとっては軽すぎるが、それでも彼らは狙いを外すことなく正確にターゲットの頭を撃ち抜く。

一般的に彼らがプレイするゲームの平均スコアは20万点ほどである。100万ものスコアを叩き出す為には、コンボ、狙いの正確さ、時間、そしてシークレット要素を完璧にこなす必要がある。

可能な限り高速で敵を全滅させ、無駄弾を減らすことが高スコアへの道である。

最初のステージが終わり、二人のスコアが表示される。

「隊長、ちよつとスコア低くないっすか？」

「これなら足りる。問題ない」

当然ながら二人の命中率は100パーセント。スコアもそれに準ずる高さであった。

一方、買い物に出かけたリン達は、ユリを着せ換え人形のようにして遊んでいた。

「それも可愛いし……こつちもいいなあ……」

「あの……リンさん？」

次々といういろいろな服を着ることができて最初は楽しんでたユリだったが、積み上げられる服を見て言葉を失う。

ユリはヒメへとリンを止めるように視線を送る。しかし、ヒメは相変わらず黙ったまま二人の様子を見ていた。

「り、リンさん……あんまり試着ばかりしているとお店に迷惑が……」

「大丈夫。あなたに着せた服は全部買ったから」

ユリの表情から血の気が失せる。すでに数十着という数の服を試着しているのだ。どれもそこそこ値が張るものばかりで、決して安物ではない。

「ひ、ヒメさん……助けて……」

ユリはヒメへ助けてくれるよう懇願するが、冬物の黒いセーターと、茶色のスカートを身にまとった彼女を見て、ぼそりと呟いた。

「……可愛い」

ユリは今という状況を打破するあらゆる方法を諦める。店員が次々と服を扱う上客を止めるはずもなく、リンもまたやめそうな雰囲気がない。この場で唯一冷静に見えるヒメもしつかりと楽しんでいる。「大丈夫大丈夫、買い過ぎたら私とヒメがもらってあげるから、ね？」

「そういう問題じゃないような気がします……」

しかし、もはやユリは抵抗する気力もなかった。その場の空気に流されるまま、ただひたすらリンが飽きてくれるのを待ち続けた。

そろそろ試着した服の数が50にも届きそうになったとき、ぴたりとリンの動きが止まる。

「うーん……そろそろ日用品も買わないといけないわね……」

ようやく希望の光が見えたと、ユリは嬉々とする。しかし、その希望も即座に打ち砕かれることとなる。

「まあいつか。どうせ私も使いきれないくらいお金あるし、私財を使ってもう少し楽しむことにするわ」

ユリは再びうんざりとしながら、様々な服を着せられるハメとなったのだった。

ガンシューティングのスコアは宣言通り100万点を超え、観客が現れるほどだった。

しかし、スタッフロールを迎えてしまうと、観客たちは残念そうに散っていく。

「次は何するんすか？」

「久しぶりに対戦、やるか？」

「望むところっすー！」

サトルの言う対戦とは、アクションゲームの対戦である。

アクションゲームといっても、キャラクターをレバーやボタンで操作するアクションゲームではない。

体にセンサーを取り付け、その動きを直にゲームへと反映させるダイレクトフィードバックシステムを採用した最新鋭の格闘ゲームである。

ダメージポイントは体に取り付けられる拘束具の重さによって変化する。ダメージが増えれば増えるほど体が重くなるのである。

二人はドーム内へと入ると、体にセンサーを取り付ける。紙幣を投入すると、周りの機械が動き始め、二人の体を拘束する。頭の位置にヘルメットが降りてきて、中に取り付けられたモニターが灯った。ゲームのルールは、定められた一定エリア内に落ちているアイテムを拾いながら、敵を数多く倒した者の勝利である。基本ルールは二対二のチーム戦であり、相方のプレイヤーはネットワーク経由で全国で同時刻ゲームをプレイしている別のプレイヤーが担当することとなる。

店内のプレイヤー同士が対戦する場合、相方のプレイヤーは店内から募られる。同時期にゲームを始めようとしたプレイヤーに参加を呼び掛け、それに応じた者が相方となるのである。

しばらくの間、二人は相方のプレイヤーが入ってくるのを待ち続ける。このゲームは人気が高いため、相方待ちの場合、すぐに相方が入ることが多い。

今回もすぐに相方のプレイヤーが決まり、ゲームスタートの合図と同時にゲームが始まる。

サトルはマイクへ向かって語りかける。

「今回は逃げに徹した方が身の為だ」

「よろし……え？」

それだけ短く告げると、彼はステージ内を疾走する。

ダイレクトフィードバックタイプのゲームは少なからずプレイヤーの身体能力が反映される。それはもちろん、このゲームも例外ではない。

故に、軍隊式の鍛え方を受けたサトルに一般人のプレイヤーが適うはずがないのである。

サトルは素早くヴィブロブレードを拾うと、敵プレイヤーを探して走り始める。

やがて、視界の中に銃を持った敵プレイヤーが映る。サトルは足元の石を拾うと、敵へ向かって投げつけた。

投石に気付いたのか、慌てるように銃の乱射を始める敵のプレイヤー。その動きから、そのプレイヤーはヒロキではないと判断する。

サトルは素早く物影から身を翻すと、敵の銃弾を回避しながら一気に距離を詰める。

相手が慌てふためいている様子がよくわかる。マシンガンを乱射しているにも関わらず、一発も被弾することなく迫る敵がいれば誰でも恐怖を感じる。

一気に距離を詰めたサトルだったが、不意に立ちどまり、バックステップで下がる。その直後、彼が居た場所を一発の銃弾が駆け抜ける。

ヒロキの狙撃である。仲間のプレイヤーを囷にする戦略に嫌気を感じながら、狙撃を回避して敵プレイヤーを斬り伏せる。

素早く武器を奪い取り、トドメを刺すとサトルは物影に隠れた。

不意に左腕が重くなるのをサトルは感じる。左腕に被弾したようだった。

「回復アイテムはあるか？」

「あ、えつと……キユアーパッドならありますけど……」

「今そっちに行くから、その辺りに投げておいてくれ。一発被弾した」

サトルはリーダーを見ながら味方のプレイヤーのいる場所へと向かう。

「投げま……ッ!?」

味方のプレイヤーの反応が消滅する。回復アイテムを渡される前に、ヒロキが狙撃したようだった。



「ちっ！」

サトルは短く舌打ちをすると、二度の狙撃からヒロキの位置を予想する。

彼の戦術から言って、視野の広い狙撃に適した高台にいることは間違いないかった。

「となると……あそこだけか」

そのステージ内でもっとも狙撃に適したポイント……物見台である。上へ上がる方法は地上から上がることができる梯子のみで、それを上げるのにも時間がかかる。

普通のプレイヤーならば、逃げ場のない、あらゆる場所から狙い撃ちできる死にスポットとしてそこへ近付く者はいないが、逆に常軌を逸したスナイパーならば、そこは最高の狙撃ポイントとなる。

更に熟練したプレイヤーであれば、そこへ至る道の途中にトラップを仕掛けることを忘れない。恐らく、物見台の周囲には数多くのトラップが仕掛けられていることは間違いないだろう。

迂闊に近付くことはできず、かといってこのまま時間が経過すれば一発被弾しているサトルの判定負けである。

狙撃銃を使用して狙撃しようにも、相手は常に銃を構え続けている。確実にヒロキの方が早いことは間違いない。

しかし、サトルは諦めなかった。この圧倒的不利な状況でも、逆転の一手を叩き込む。

サトルは持っていた武器を全て捨てた。重量の関係で、幾分か体の動きが軽くなる。

「さて……うまく行くか……」

彼は大きく息を吸い込むと、地面を強く蹴った。

ようやくリンの気分が済んだのか、服を買い終わった三人は日用品を選んでいった。

「シャンプーにリンスにボディソープは必要よね」

「……洗顔料も」

「ああ、忘れるところだったわ」

次々と洗面用具の類をカートへ移すリン。その後をユリは不安そうに付いて歩く。

「あの……染料は何に使うんですか……？」

「あら、白い髪なんて流行らないわよ？」

そう言っつて、リンは染色剤のボトルをカートへ入れる。

「えっと……わたし、白いままでいいです」

「あら、そう？」

リンは残念そうにボトルを棚へと戻した。

「白い髪っつて、綺麗じゃないですか？」

「うーん、まあ雪みたいで素敵だとは思っつけど、なんだか脱色したみたいでね……」

しばらくの間ユリはうつむいていたが、やがて口を開いた。

「……わたし、百合が好きなんです」

「えっと……自分が好きっつてこと？」

「……花」

ヒメが小さく囁く。ユリはその言葉にうんうんと頷いた。

「白い……百合の花が好きなんです」

「それで、白い髪がいいの？」

「はい」

ユリの記憶は定かではなかったが、どういっわけだか百合の花が好きであることだけは確かだった。

彼女にも、それがなぜだかはわからなかったが、事ある毎に頭の中に可憐で美しい白い花が現れた。

それを思い出すとなぜか心が温まり、気分が晴れ晴れとする。彼女にも理由はわからなかったが、ともかく白い百合の花が大好きだった。

「まあ……名前と同じ花だしね。好きなのもまあよくあるよっつな話だと思っつけどね」

「はい、もしかすると名前が同じだから好きなのかもかもしれません」  
「……………」

ユリは思い浮かべる。自分の名前と同じ花に囲まれる自分の姿を。もし一面の百合畑を訪れることができれば、どんなに素敵なことだろうか。

「でもね……………今時花なんて花屋でしか見られないからね……………」  
優れた文明は人々の生活を栄えさせた半面、地球上から自然の姿を減らしていった。

今では保護された一部の地区や、山奥などに入らなければ野に咲く花を見ることが出来る場所はない。

「……………植物園」

「ああ、そういえばそんなものがあつたわね！」

「郊外の植物園なら、百合畑もある」

百合畑という言葉にユリの目が輝く。

「ホントですか！」

ヒメはこくこくと頷く。ユリは嬉しそうにヒメの手を取ると、嬉しそうにぶんぶんと振った。

「こ、今度連れてってください！」

あまりの喜び様に驚きを浮かべるヒメ。思わずその勢いにこくこくと頷く。

「ありがとうございます！」

嬉しそうな笑いを浮かべると、ヒメに思い切り抱き付いた。

ヒメは女の子の中でもかなり体の小さい部類に入る。そんなヒメに思い切り抱き付けば、当然ヒメの体は倒れる。そして、当然のことながら周囲の棚へとよりかかる。

「あ……………」

リンがそう声を上げたときにはすでに時遅し。かなりの勢いで飛びつき、その勢いのまま棚によりかかったためか、棚はゆっくりと傾き始め、ドミノ倒しのようにばったんばったんと棚が倒れていく。至る所で悲鳴が上がり、慌てて棚から離れる客や、それを止めよう

とする店員、そしてその様子を茫然と見つめる三人。

ガラスが砕け散る音や、いろいろなものが床へとぶちまけられる音、それから物が壊れる音がそこら中で鳴り響く。

それらが全て止んだ時、店の中は酷い惨状となっていた。

「えっと……その……ごめんなさい」

「……許す」

静寂に包まれた店内で、二人のやりとりだけがやけに響く。

「お客様！ な、なんてことをしてくださるんです！」

血相を変えた店主が店の奥から飛び出してくる。しかし、ヒメは落ち着いて立ち上がると、胸元からメモ帳のようなものを取り出し、サラサラと何かを書き込む。

「……弁償」

「弁償って子供の小遣いで弁償できる額じゃあ……」

店主は差し出された紙を見て、目の色を変える。

「……次回からはこういうことのないようになさってください」

店主はその紙を受け取ると、今まで怒鳴っていたのが嘘だったかのように落ち着いて答える。

「……謝る」

そう言っ頭を下げると、何事もなかったかのようにカートを押し始めるヒメ。

「えっと……その……ヒメさん、何を渡したんですか……？」

「一千万円の小切手」

その言葉に、一瞬で血の気を失うユリ。

「あら、そんな少額？」

逆に意外そうな表情で尋ねるリン。

「ひ、ヒメさん！ すみませんすみません！」

ひたすら謝り続けるユリ。ヒメは無表情のままユリに顔を上げるように言う。

「大した額じゃない」

「だ、だって一千万円ですよ！？」と、とんでもない額じゃあ……」

「記憶はないのに金銭感覚は庶民級なのね」

リンが呆れたように言う。ユリは不思議そうな表情を浮かべてリンを見つめた。

「あたし達は命張る仕事してるのよ？ 実際に死んでる知り合いもいるわ。そんな仕事をしている私たちの収入が普通だと思っているの？」

「えっと……どのくらいなんですか……？」

「一応税金だから、大きな声では言えないけどね。ヒメの年収は……」

「ごによごによとユリの耳元で呟くリン。瞬間、ユリの顔から表情が消え失せる。」

「……それを聞いたら、国民は怒りませんか？」

「あたし達はこれでも国の軍の主戦力の一つよ。日本国内でもっとも命の危険に晒されている公務員なの。これくらい貰わないと割に合わないわ」

さも当然という様子で答えるリン。戦時中の軍人ともなれば、確かにもっとも危険な職業だと言えるだろう。

彼女は言わなかったが、ジュニアチームは日本軍の誇る最強の戦力の一つである。

幼少の頃から厳しい訓練を受け、鍛えられた彼らは今こそそのほほんとしているが、これほどの余裕ある身分になるまでかなりの苦勞をしてきている。隊長格ともなれば、その苦勞は並みの隊員以上である。それは金で買えるような代物ではない。

「さ、行きましょ。さっさと買い物を終えて私もゲームしたいわ！ 楽しそうにそう語る彼女の表情に、ユリは楽しみ以外の別の感情を感じた。

自分はいつ死ぬかわからない。だから今を楽しもうという達観の情。それは、この年の頃の少女が持つべきものではない。

ユリはヒメの表情を窺う。彼女は相変わらず無表情だったが、その仮面の裏にはやはり達観したものがあろうか。

「……何？」

「いえ……なんでもないです」

ユリはそう言って寂しげに笑う。最初は彼女らの中に自分も混じることができるとは思わなかった。彼女が思っていた。だが、それはどうやら間違っていたようだった。彼女達の仲間になることはできない。

日々に対する覚悟が違うのだから。

彼女達は精いっぱい今を楽しもうとしている。それは未来が保証されていないからだ。

ユリも精いっぱい今を楽しもうとする。けれども、彼女には保証された明日がある。自分はただの文民なのだから。だから日々に対する覚悟が違う。

リン達は、楽しむためなら危険なことでも平気でするだろう。それが楽しいものなら、自分の身を顧みずに思い切り楽しもうとするだろう。

しかし……ユリはそうすることができないだろう。保証された明日を守るために、身の安全を図って楽しみから離れようとするだろう。彼女はそれが少し寂しかった。仲間であると思えたのは……ただの錯覚だったのだ。

ユリはそのことに淋しさを感じつつ、ただ黙って二人の後を付いて歩いた。

リン達がゲームセンターに着いたとき、ゲームセンターは異様な盛り上がりで包まれていた。

「あーあ、またいっぱい観客作っちゃって……」

三人は一つのモニターの前へと進む。目の前で繰り広げられるゲーム画面には、ステージ全体を真上から見た図と、二人のプレイヤーの視点から見た映像が映っていた。

「これってもしかして……」

「あいつらよ。まったく、本気になって熱くなっちゃって……」

モニターの画面の中では、片方のプレイヤーは高台から辺りを見回して敵を探し、もう一人のプレイヤーは物影に隠れて様子を窺っていた。

「珍しくサトルの方が不利ね……」

「えっと……高いところにいる人がヒロキさんで、隠れているのがサトルさんですか？」

「……」

ヒメがこくこくと頷く。画面の外側にはダメージポイントが表記され、サトルがダメージを負っているということを示していた。

「サトルさん、左腕に怪我してます……」

「一発かすつたんでしょうね。ヒロキが外すなんて珍しいわね」

「……サトルは強い」

三人はじつとモニターを見つめる。だが、サトルの突然の行動に会場は一気に盛り下がる。

「武装解除してるぞ……」

「なんだよ……降参かよ……」

不満そうな声がそこから中で湧き上がる。

「サトルさん、負けなんですか？」

「まさか。あの負けず嫌いのサトルが負けを認めるわけないでしょう？」

何人かの観客がモニター前から離れていく。しかし、リン達は最後まで勝負の行方を見守る。リンの言葉を聞いて、ユリにはサトルが何か考えているのではないかと思ったのだった。

そのとき、会場の全員が驚くようなことが起こった。サトルが物影から飛び出し、ヒロキの視界の中へと飛び込んでいったのだった。

「自殺かよ……」

しかし、観客たちはサトルの動きに驚く。あらかじめトラップが仕掛けられている箇所にはマーカーが表示されているのだが、そこへとサトルが突っ込んでいったのだった。

「あー……終わりか……」

観客たちはゲーム終了だと、つまらなそうに散っていく。だが、リン達だけはサトルに何か策があるのだと信じていた。

「あっ！」

ユリが大きな声を上げる。そのただならぬ様子に観客たちの視線は再びモニターへと集まる。

「な、馬鹿な!？」

「裏技か!？」

観客達全員の視線がサトルの動きに釘付けになっていた。トラップが次々と爆発を起こしているにも関わらず、サトルが無傷でトラップ地帯を通り過ぎていたのだった。

「あー……そういうことね。ま、ゲームだからできる技だけど、現実じゃあ無理ね」

「あの……何が起こっているんですか……?」

突然の事態にわけもわからずユリが尋ねる。

「……デイレイ」

「そういうことね」

そのワードに、観客の何人かが反応し、そしてありえないという言葉葉を連呼する。

「あのゲーム、ありとあらゆる行動にデイレイってのがあるのよ」

「……でいいい……ですか?」

リンがユリに説明を始める。

たとえば、銃の撃つのに何秒かかるだろうか。銃を撃つためには、スナイパーが狙いを定め、標準を固定し、そして引き金を絞るといふ動作が必要だ。この個々の動作には当然ながら大なり小なり時間がかかる。どんなに細かく一瞬で済む行動でも、必ず時間がかかる。さて、スナイパーが標準を固定し、引き金を絞るまでの間に対象が移動すればどうなるだろうか。当然ながら、銃から放たれた弾丸は標的には当たらない。

そして、このゲームにはその“間”が忠実に再現されている。ありとあらゆる動作に“間”が設定され、どんな些細な行動をする場合



でもこの“間”の時間の間だけはどんな行動も取ることはいできない。これを、プレイヤーたちはデレイと呼ぶ。

銃の弾を撃つのにデレイは存在するが、当然ながらトラップが発動するまでの間にもデレイは存在する。

では、もしトラップを踏んだ後、そのトラップが発動するまでのデレイの間にトラップの上を駆け抜ければどうなるだろうか。当然ながら、トラップのダメージを受けることはない。

だが、それはあくまでも理論上の話である。デレイタイムは0.1秒未満。普通のプレイヤーがトラップの上をどんなに速い速度駆け抜けてもトラップのダメージを受けることは必須だ。

だが、もしプレイヤーが普通ではなかったらどうなるだろうか。たとえば、百メートルを8秒で駆け抜けるようなプレイヤーが仮に居たとしたらどうなるだろうか。

トラップの範囲は見た目の演出の割に範囲が狭い。それは、範囲を広く取る必要がないからだ。逆に範囲を広くしすぎると、密集して配置させた際に誘爆を起こしてしまう。それでは、防衛のために大量にトラップを設置しても、投石などでトラップを発動させれば、そのトラップ密集地帯を無力化することができるということを目指す。そして、現在ゲームをプレイしているプレイヤーは、特殊な筋肉強化トレーニングと薬物投与を受けて一般人の範疇の外の域にまで達した少年である。身体能力が大きく反映されるこのゲームでは、それが大きなアドバンテージとして働く。

ヒロキもトラップを過信していたのか、慌てて銃を構える。しかし、トラップの爆発によってもうもうと爆煙が舞い上がり、サトルの姿を掴むことができないでいた。

モニターの画面内ではサトルの位置を表すマーカーが一気にヒロキとの距離を詰める。やがて、そのマーカーはヒロキの足元にまで移動する。

『演出派手過ぎっす!』

ヒロキの悲しそうな叫びが響く。プレイヤーの口元に付けられたマ

イクに向けて話された言葉は外には大音声で響く仕掛けとなつて  
いる。その悲痛な叫びに何人かの観客たちが笑い声を上げる。

そして、勝負は一瞬で付いた。高台へと上りきつたサトルは懐から  
ナイフを取り出すと、ヒロキへと攻撃を仕掛ける。狙撃を得意とす  
るヒロキだが、接近戦においてはサトルに分があつた。

ゲームセットの文字が画面いっぱいになり、戦績が表示される。  
会場内は歓声に包まれる。見事なまでの逆転劇にゲームセンター内  
は大盛り上がりだつた。

ドームの中から悔しそうな表情を浮かべたヒロキと、満足そうな表  
情を浮かべたサトルが現れる。

「やっぱり隊長は化け物つすよ……」

「だが、今回は俺も危なかつた。いい勝負だつたな」

二人は観客に囲まれ、勝者も敗者も担ぎ上げられる。

「坊主！ お前強いな！」

「負けちまつたけど、大奮戦だつたぞ！」

そんな大盛り上がりの様子を見て、ユリは笑顔を浮かべる。

「凄いですね。二人とも本当に……」

「ホント楽しそうだつたわね。あいつらの相方になつたヤツらが可  
愛そうよ。一瞬でゲームから除外されたでしょうに」

そこで、リンがパンと手を叩く。

「ヒメ、行きましょっか」

「……」

リンの呼び掛けにこくりと頷くヒメ。ユリは二人が彼らのもとに駆  
け寄るものだと思い、一緒に行きますと言おうとした。

だが、リンの次の言葉は、ゲームセンター内の空気を急変させるほ  
どのとんでもない一言だつた。

「はい！ あたし達、二人に挑戦しまーす！」

「ええ！？」

その突然の申し出に、ユリは驚いたような表情を浮かべる。それは  
彼女だけではなく、観客の全員でもある。

今日の前で超人的なプレイを見せつけた二人組に、女の子の二人組が挑戦するという掛け声があれば、驚くのも当然である。

静寂に包まれたモニター前を突っ切り、リンとヒメはドームの中に入ってセツティングする。

『はーやーくー!』

『……………』 (こくこく)

その呼び掛けに、再び会場が盛り上がる。

「こてんぱんにしてやれ!」

「はは、無茶にもほどがあるじゃねえか!」

「行け行けー!」

観客の後押しを受けて、二人はドームの中へと入っていった。

黒いワゴンが空いた道の中を軽快に走る。だが、車内の様子は軽快とは言えなかった。

わいわいと盛り上がる女子陣。どんよりと沈み込む男子陣。微妙な表情を浮かべるユリ。

「あはは、さいっこうに気分よかったわあ!」

「……………」

「ヒメちゃんズルイっすよ……………」

「最悪だ……………」

「あははは……………」

快活に笑うリン。こくこくと頷くヒメ。どんよりと落ち込みながら運転をするヒロキ。つまらなそうに車外を眺めるサトル。乾いた笑いを浮かべるユリ。

あの後に行われた戦いは観客達の予想を思い切りぶっちぎるような結果となった。

リンとヒメは常に二人で動き続けた。そして、フィールド内に半端ではない数のトラップを仕掛け続けた。

もちろん、サトルとヒロキも黙ってそれを見過ごしていたわけでは

ない。トラップの設置を阻止するために、幾度となく奇襲を仕掛けたものの、全ての攻撃をまるで見透かしているかのように予測するヒメの前に、二人は為す術がなかったのだ。

最終手段としてヒロキは高台へと上がり狙撃でリン達の動きを制限し、サトルは大量の火器を装備して一斉攻撃を仕掛けた。しかし、それらをすべて予知し、回避し続けるヒメと、その言葉を聞いて回避をするリンの二人に一切のダメージを与えることはできなかった。結局、仕掛けられたトラップによって与えたほんのわずかなダメージで、結局女子二人組が判定勝ちとなったのだった。

「観客の驚く顔つたらなかつたわ。なんであの弾幕の嵐を全て回避できたんだ、だって！ あははははは！」

「だからヒメちゃんがズル過ぎるんすよ……」

「……ゲームでも本気」

彼女は表情を変えずにそう呟く。  
やがて、視界に男子寮が入る。ヒロキは駐車場に入ると、所定の位置にワゴン車を止めた。

「着いたっす」

五人は車から降りると、入り口から外に出る。

太陽が傾き、林立するビルの影から赤い光を投げかける。

「また明日から仕事っすね」

ヒロキは真っ赤な太陽を見つめながらそう呟く。

「そうね……」

「それが俺達の責務だからな」

「……」

明日の仕事へと向かう彼らを見て、彼女は再び思う。  
やはり、彼らは自分とは離れた世界にいるのだ、と。

「……お仕事、頑張ってくださいね」

それでも、ユリは声をかける。せめて、励ましの言葉くらいかけることができるのではないか。それくらいしかできないけれども……  
することはできないか、と彼女は考えた。

四人が微笑を浮かべる。それは励ましに対する喜びか、それとも……。  
再び四人は太陽へと顔を向ける。背中に責務に対する強い意思と、今という瞬間を享受できる喜びを背負って……。

夕闇に沈みつつある街の中、二人の少女は並んで歩く。

二人の間に会話は無い。静寂に満ち溢れた黄昏を二人は寂しいとは感じない。

空には真円の月が上りつつある。東の空で輝くそれは、優しい月光で二人を明るく照らしていた。

「ねえ……」

ふと、リンが口を開く。ヒメは無表情のままその言葉を受け止めた。

「なんで避けなかったの？」

彼女はショッピングモールでの出来事のことを聞いているのだろう。確かに、ヒメの能力を持ってすれば飛びついてくる彼女を避けることくらい造作もないだろう。だが、彼女はそれをしなかった。

「避けても同じ」

「ふーん」

ヒメの言う通りである。たとえユリを避けても、彼女はそのままの勢いで柵へ突っ込み、結局は惨状となっていただろう。

「それに、避けると危険」

それどころか硬い柵へ飛び込むのだから、ユリの身にヒメに飛びついた場合以上の危険が降りかかる恐れがある。ヒメはそれを見越して彼女を避けるのではなく、受け止めることにしたのだろう。

「じゃあ、止められなかったの？」

「……ユリは強い」

「一応訓練を受けているあなたより？」

「……」

ヒメはこくこくと頷く。体が小さいとはいえ、一応は訓練を受けている身である。身体能力はそこの少女よりも遥かに高い。その分だけ力もある。

「ふーん……私より？」

「……」

ヒメは再び頷いた。

しばらくの間リンは黙って考え込んでいたが、やがてやれやれというように肩を下す。

「ま、あたしより力があるのは当然ね」

「リンは体質。仕方がない」

「ありがとう」

そうリンは呟くと、再び黙って歩き始める。

「……リン」

ヒメは彼女の名を呼ぶ。リンは振り返ると、何かと問う。

「ユリの素性を洗う。リンも手伝って」

「やっぱり気になるわよね。あの子はちょっと普通じゃないもの」「やれやれというようにリンはため息を付くと、微笑みを浮かべてヒメを見つめた。

「じゃ、任務ついでにやるとしますか」

「……」

ヒメはリンの言葉に頷いた。

二人は闇に沈みゆく街中を、どこまでもどこまでも歩いていった。

## 第二話 Shopping (後書き)

彼らはいつものように任務に出かける。

任務といつても特にすることもない、ただ毎日のトレーニングの積み重ねである。

「今日はお弁当作っちゃいました」

そう言ってユリが差し出すは一つの弁当箱。

それが波乱を巻き起こすとは誰もが思っていなかった。

次話、第三話 Fighting

## 第三話 F i g h t i n g

### 第三話

数日が経過した。

穏やかで肌寒い空気に包まれた街は今日も朝を迎えていた。至る所で目覚める者があり、そして時たま眠りにつく者もあった。そんな人々の営みの中で、またごく普通の朝を迎える世界がそこにあった。包丁がまな板を叩く音が鳴り響き、鍋の蓋がかたかたと鳴る。少女は鼻歌を歌いながら色の濃いほうれん草を刻み、味噌汁の鍋へと落としていく。

「おはよう」

「おはようございます!」

少女はお玉を片手に朝の挨拶を済ませる。対する少年はやや眠気まなこだったが、鼻をくすぐる味噌汁の匂いに思考が徐々にクリアになっていく。

「今日も朝食を?」

「はい! 毎朝作りますよ!」

彼女は嬉しそうに味噌汁の鍋へと歩み寄ると、お玉で少しだけすくって口に含ませる。そして、ユリはにっこりと笑った。味加減はちよほど良いようだ。

「今日は任務でしたよね!」

「よく覚えてるな……」

サトルはぼりぼりと頭をかきながら、歯ブラシを手に取る。

「実はですね……じゃーん!」

洗面所から出てきたサトルに向かって、ユリは四角い箱を突き出した。

その箱は丁度サトルのどこを強襲するかのように打ちのめし、ほんの一瞬サトルの意識を彼方へと吹き飛ばす。



「ぐおっ」

黒い箱に墜落されたサトルは少しずつ墮ちていき、歯ブラシをくわえたまま床に倒れ伏す。

「なーんとお弁当を作っちゃいました！ ユリさん手作り弁当なんです！ 朝からゆっくり煮込んだハンバーグは頬が落ちそうなほどとろとろになっていますし、逆にミートボールはぷりっと身が引き締まっています！ それからそれから……」

サトルを撃破したことに気が付かず、弁当の解説を始めるユリ。サトルの意識も徐々に回復し、痛そうに顔をしかめながら立ち上がった。

「いつつつ……おい、ユリ」

「さらにピーマンの肉詰めは素早く火を通して美味しさをぎゅっと……はい？」

「弁当を渡すときもう少し穏やかに渡してくれ」

サトルは弁当を受け取ると、それを無造作にカバンの中へと放り込んだ。

「もう少し丁寧に扱ってください！ それにお礼もないんですか？」  
「礼は後です。食ってみないと美味いかどうかわからないからな」  
そう言つて、歯を磨きながら新聞を広げるサトル。そんなサトルの不愛想な様子にユリは頬を膨らませる。

「まったく、礼をきちんと言っておけばよかつたって後悔しますよ？」

「ああ、そうかもな。でも、昼飯よりもまずは朝飯からだ」

サトルは新聞を折りたたむと、歯ブラシを片付ける。

ユリはサトルの言葉を聞いて、自分が手掛けた朝食を並べ始める。肉じゃが、ほうれん草の味噌汁、そして湯気を上げるご飯。典型的な和食型朝食だった。

「今日も美味そうに出来てるな」

並べられた朝食を見て、サトルは少し嬉しそうに言う。時間はあっても、面倒さ故にほとんど料理をしないサトルだったが、こうして

温かな朝食を見ていくらか心が和んだのだろう。

「実際に美味しいですよ」

二人は席に着いて手を合わせる。

「いただきます」

まず最初に味噌汁へと手を伸ばすサトル。ほうれん草を箸でつまみ、そして味噌汁を口の中を含む。

「美味しい」

サトルは顔を上げてまず一番に言った。やや不機嫌だったユリの表情も、その一言でいくらか和らいだ。

次に、サトルは肉じゃがへと箸を伸ばす。牛肉とジャガイモ、白滝、ニンジンをしつくり煮込んだ品で、ほくほくと白い湯気が上っている。

「美味しいな。この分だと弁当も期待できそうだ」

「ありがとうございます！」

先ほどのまでの不機嫌顔はどこへ行ったのか、彼女の表情は満面の笑みに満ちていた。

サトルはそんなユリの表情をまじまじと見つめる。何事かと、ユリは不思議そうな表情を浮かべて尋ねた。

「あの……わたしの顔に何か付いてますか？」

「いや……怒ったり、笑ったりと忙しいなと思ってな」

それを聞いて、彼女はにっこりと笑う。

「だって、嬉しいんです。サトルさんに美味しいって言ってもらえて……」

「美味しいものを美味しいといって何が悪い」

サトルは味噌汁をすする。優しい味が口の中へ広がっていき、そして後味を残しながら消えていく。

「それにしても……会った頃と比べて明るくなったな」

「うーん、こっちが地の性格なんじゃないですか？ この前まではまだ本調子じゃなかったってことです」

「ま、そういうことなんだろうな」

ユリの言葉に納得しながらサトルはうんうんと頷いた。それにしても……とサトルは考える。

ユリの正体は何者だろうか。料理が上手で、明るくて元気。端から見ればどこにでもいる普通の女の子だ。

だが、それゆえに彼は怪しいと考える。普通の女の子がどうして血濡れで研究所にいたのだろうか。

まるで全身に血を被ったかのように赤く染まっていた彼女は、今日の前で嬉しそうに朝食を食べる白髪の少女とは似ても似つかない。

あの時の彼女は何かを恐れるかのようにがたがたと震えていた。もちろん、恐れる対象は自分も含まれていたのだろうが、それだけを恐れていたとは考えにくい。

そして、銃に関する知識。今時ウィンチエスターライフルなどという名前を知る者はそう多くはない。相当の銃マニアか、今では珍しいクレー射撃を楽しむ者だけだろう。

それらを統合して考えられるのは、彼女がメカニックだったという可能性だ。それならば、銃に詳しいことに説明がつくし、研究所を襲撃した連中の使用していた武器の恐ろしさを骨の髄まで知っている。

けれども……と彼は思う。人は見た目で判断を付けるべきではないとは言うが、この白髪の少女が小難しい機械を修理する姿を彼は想像できなかつた。

「サトルさん？」

ユリが心配そうな表情を浮かべる。

「どうかしたんですか？ 難しそうな顔をして……」

「……いや、なんでもない」

そう言うと、彼は残りの朝食をかつこみ、席を立つ。

「出かける準備をしてくる。ユリも早めに済ませるように」

「え、私もですか？」

何をいまさら、というような表情をしてサトルは呆れる。

「当然だろう。ユリもウチの部隊の隊員だ。仕事がなくても出るに

決まっているだろう」

そう言つて、サトルは部屋の向こうへと消えていく。ユリはしばらくの間ぼかんとしていたが、やがて我に帰ると急いで朝食を食べ始めた。

仕事、と言つても彼らの部隊はすることがない。

基礎訓練も基本的に自分でするように義務付けられている。他人に強制されてやったところで意味はないからだ。

全体での訓練も月に一度程度である。幼い頃から共に暮らしてきた彼らに、息を合わせるための特殊な訓練は必要ない。

実際の任務の方だが、そう多忙なわけではない。多くて週一度程度、襲撃された地域の後片付けをするだけである。

そもそも日本は戦争に対して非協力的な国だ。日本自体は戦地ではなく、海外へと派遣されている軍も戦地派遣ではなく、難民キャンプの救済や非戦地域の警護などである。

それでも、ロベミライアは世界中へと容赦なく攻撃を行う。転移装置を利用したオートマトン転送によつて、場所関係なく攻撃を仕掛ける。それはもちろん日本も標的の一つである。

彼らはそういうときに出動する。まず、日本軍の主力部隊、そして補助にジュニアチーム。といつても、ほとんどの戦闘を主力部隊が行うが、時たまジュニアチームが戦闘を行うこともある。

彼らはそういうとき、確実に高い戦績を上げる。だからこそ、最強の部隊の一つとして数えられるのだ。

今日もトレーニングルームには意識の高い少年兵達が通っていた。といつても、ダンベルを上げて体を鍛えるわけではない。

この時代における体力の強化とは、主に電気刺激筋強化と、薬物投与という二つの方法が取られる。

前者は電気刺激により筋力を爆発的に強化するトレーニング方法で、薬物投与と合わさつて高い効果を上げる。

後者は筋肉を組成するアミノ酸や、その吸収を助ける物質などを投与して、筋肉の増強を手助けする。電気刺激筋強化の効果を数倍に高める効果を持っているのだ。

反復運動による筋強化など、時間が掛かるだけで誰も行おうとはしない。誰もが楽な方法で筋力を強化する方法を取ろうとするのは当然だった。

だが……今日も旧トレーニングルーム……ダンベルなどが置かれた部屋に通う者がいた。

サトルは汗を流しながらダンベルを上下する。リンは壁に駆けられたダーツを楽しみ、ヒロキはサトルのものよりかなり軽いダンベルを担ぎ、ヒメは静かに本を読んでいた。

「リンたちもたまにはどうだ？」

「あたしはパス。どうせ筋力付かないし」

「オイラはやってるっす」

「……」

思い思いの返事が返ってくる。サトルは自分の持っていたダンベルを置き、ヒロキの持っていたダンベルの重量を増やす。

「な、なんでオイラだけ……」

「お前のダンベルは軽過ぎる。その状態であと一時間そうしている」と言うのと、サトルは再び自分のダンベルでトレーニングを再開する。

ユリはそんな四人を見ながら部屋の一角に座っていた。目の前で繰り広げられる様子は、彼女が想像していた恐ろしい訓練とはかけ離れたものだった。

「あのー……リンさんとかは訓練しないんですか？」

「話さなかったっけ？ 私って特殊な体質で、重いものを持ったり、強い力を発揮したりするのに適していないの。なんていうか、俊発力だけの筋肉って感じ？ 早い動きはできるんだけどね」

そう言っリンはナイフを投げる。それはど真ん中にターゲットを貫き、後ろの壁にまで突き刺さる。

「なるほど……ヒメさんは？」

「……体重がない」

力とは体重が大きく関係する。それゆえに、体重がなければどんなに筋力があっても大きな力は生まれぬ。

「たくさん食べたりとかは……？」

「一週間レーションだけで生活した。けれども体重は300グラムしか変わらない」

レーションとは超高カロリーの軍用携帯食糧である。一口で数千カロリーに達するため、軍用非常用食糧として主に用いられる。味はあまりよろしくないとの評判で、好んで食べる者は少ない。

「私だつたら絶対にしないわね。あんな不味いのだけでよく一週間も耐えられたと思うわ」

やれやれと肩をすくめながらリンは言う。またしても彼女が放ったナイフはど真ん中へと刺さる。

「た、隊長……オイラスナイパーっすよ？ 筋力トレーニングは……」

「黙ってやれ」

サトルは黙々とダンベルを動かす。ダンベルによるトレーニングによつて得られる筋力は、科学的なトレーニングに比べれば少ないが、彼は師の教えを守つて忠実に続ける。

“科学的なトレーニングはお手軽に筋力がついて確かに便利よ。けれども、そんな方法で鍛えても精神力までは身につかないわ。ただ延々とダンベルを上げ下げするだけでも、強い意思を持つて続けることができれば確実に精神力は鍛えられるわ”

全てはその言葉に従つた結果だつた。もちろん、彼も科学的なトレーニングは受けている。それだけではなく、彼はこうして地道にトレーニングを続けていた。だから、彼には今の地位があると言つても過言ではない。

「……ふう」

一度サトルは休憩を取る。アミノ酸や電解質などが配合された特殊

なスポーツドリンクを一気に流し込む。水分及び電解質補給は反復トレーニングにおける鋼の規則だ。これは守らなければ、逆に体を痛める原因となる。

「そういえば隊長、ユリちゃんとはどうなんすか？」

ヒロキは勝手に休憩を取ってサトルへ尋ねる。

……瞬間、空気が凍りつく。

リンが放ったナイフは中心から2ミリほどずれ、ヒメは本をめくる手を止める。

「お前が考えているような不純な関係はない。ただの同居人として、寝食を共にするだけの関係だ」

「ベッドは……」

「お前も知つての通り、ベッドは片方は使えない。だから俺が床に寝ている。ユリは俺がかつて使っていたベッドを使用している。もちろんシーツなどは交換した」

……場に再び空気が流れ出す。

放たれたナイフはまっすぐに真ん中を貫き、ヒメは再びページをめくる。

「今日はお弁当作っちゃいました」

しかし、その一言で場の空気が一気に氷点下まで下がる。

「弁当!？」

一番に食いついたのはヒロキだった……が、目の前を振動するナイフが通過して沈黙させられる。

「どういうこと、サトル……?」

「ユリが弁当を作ってくれた。ただそれだけだ」

「それだけ……?」

次にユリへと視線が突き刺さる。ユリはまるで影を縫い取られたかのように微動することもできなくなる。

「ユリ、どういうことか説明してちょうだい」

例えるなら、ナイフ。鋭く研ぎ澄まされた氷のような刃。

その視線は向けられるだけで体が動かなくなり、刃に触れようもの

ならば凍り付いてしまいそうなその斬っ先をユリはまっすぐに向けられる。

「ど、どういふことって……た、ただお昼ご飯を作っただけです……」

「出しなさい」

リンの命令で弁当箱が強制的に引きずり出される。それは正午を待つことなく開かれ、その中身を人の目に晒す。

ハンバーグ、ミートボール、ピーマンの肉詰めなどといった肉ベースのおかずは体を動かすサトルのことを配慮したものだろうか。ご飯は山盛りに盛られ、とても食べ応えがありそうだ。

リンは特にハンバーグを注視する。そのハンバーグには……トマトケチャップでハートマークが描かれていた。

「……ハート」

いつの間にか本を閉じたヒメもまっすぐにハンバーグを指さして指摘する。ハートが意味するモノは愛情、慈愛などといったものである。それはすなわち、乙女心を具象化させた存在とも言える。

「それは……ただ可愛くしたかったから……」

「……ハート」

そうヒメが言っただびにリンの額に浮かぶ青筋の数が少しずつ増えていく。

「やっぱりサトルと同じ部屋ってのが間違いだっつのよ……」

今度は本当にナイフの斬っ先を向けてリンは言う。

「私と部屋を交換しなさい。あなたにサトルを任せられないわ」

「ちよ、リンたいちよ……」

音もなくヒロキの前髪が数本落ちる。それを見て彼は声にならない悲鳴を上げる。

「そんな、ムチャクチャです！ わたしは断固拒否します！」

「ゆ、ユリちゃ……」

今度はユリの視線に射抜かれる。例えるならば、猛々しさを込めた白虎。ナイフのようなユリのそれと違って粗削りではあるが、それ



でもヒロキを黙らせるには十分だった。

「ふーん、拒否……ね」

一歩ずつユリへと迫るリン。二人は視線をぶつけ合って激しく火花を飛び散らせる。

「騒々しい。大人気ないぞ、リン。子供か？」

ついにサトルはため息をついてスポーツドリンクのボトルを置いた。

「これ以上ややこしくなるのは御免だ。現状でいい」

そう言って再びトレーニングを始める。

「さ、サトル！？」

その言葉に悲しそうな表情を浮かべるリン。徐々に目が潤っていき、瞳が揺れる。

「うぐう……サトルの馬鹿あ！」

そう言ってリンは部屋から飛び出していく。

「……」

ヒメは黙ってため息を付くと、リンの後を追って部屋を出る。

「隊長……超が九つ付くくらいの鈍か……」

銃声が耳の横を通り抜け、彼は慌てて言葉をつぐんだ。

「サトルさん……」

ユリは複雑そうな表情を浮かべたまま、広げられた弁当を見つめて静かに座っていた。

リンは屋上に出て、一人寒風に吹かれていた。

いや、傍には影のように寄り添うヒメの姿。彼女は親友のことが心配になって追いかけたのだった。

「なによなによなによ、新参の癖に新参の癖に〜っ！」

「……」

リンはぶんぶんといびき振り回す。そのたびに空気が裂ける音が響き、端から見ればかなり危険であること間違いなしである。

ヒメはそんなこともお構いなしに本のページをめくる。

「サトルもサトルよ！ あんな女のどこがいいのよ！」

「……リン、ユリのことが少しわかった」

ヒメの言葉に鋭く反応するリン。身を乗り出してヒメへと迫る。

「何なの！？ あの女は結局なんなの！？」

「……私たちと同じ」

「……それって、ジュニアチームってこと？」

ヒメはこくこくと頷く。それを見てリンは残念そうな表情を浮かべる。

「そんなことわかってるわよ。ユリは私たちの後援部隊に入ったんでしょ」

「……それよりも日付は古い。ジュニアチームに所属した日は今から12年前」

「12年前！？ ちょっと、それどういうこと！？」

リンはヒメの胸元を掴んでゆっさゆっさ揺らす。

ヒメは少し迷惑そうな表情を浮かべてリンを振り払うと話し始めた。

「ジュニアチーム、F部隊元所属。数日前、後援部隊に異動」

「F部隊……？ 何それ？」

ヒメはふるふると首を横に振る。そこまでは彼女もわからなかった、という意味である。

「非正規部隊……？」

「戦闘部隊かも、補給部隊かも、後援部隊かもわからない」

リンは腕を組んで考え始める。彼女は未だかつてユリの姿を部隊内で見た記憶がない。あんなにも透き通るような白髪の少女である。

一度見ていれば忘れるはずがない。

「記録にはLiily-2316と書かれていた」

「百合……か。2316というのは何かの通し番号……？」

ヒメは再び首を横に振る。

「……ちなみにバスト89、ウエスト55、ヒップ84」

「な、私より大きい！？」

突然、リンは自分の胸に手を当てる。ヒメは無駄だということをつたのか、自分の胸を見ようとしてもしない。

「……ますます怪しい女ね……」

「……」

再びヒメはこくこくと頷く。いくらなんでも情報が少なすぎた。これだけの情報では、ユリの正体を掴むどころではない。

「さっき料理を見た限りでは、結構上手にできていたわ。ということとは……補給部隊の食事担当？」

裏方の方となれば、一度も姿を見たことがないのも納得である。だが、ジュニアチームにそんな部隊が存在するなどという話は今まで一度も聞いたことがなかった。

「……食堂はパート・アルバイトの仕事」

「任務のときにお弁当を作ってくれるのも食堂のおばちゃん達よね

……」

リンはFの付く言葉を思い浮かべる。

「Find（搜索）、Fight（戦闘）、Factory（工場）

、Fake（偽）……」

「……Flower（花）」

そう、小さな声でヒメが呟く。

「Lilyは百合の花。ユリの名前も百合の花」

「……いくらなんでも、それだけでそう決めつけるのは早計だと思っ  
うわ」

一陣の風が吹きすさぶ。冬という季節にはなんと不似合いな言葉だろうか。

「……戻りましょう。こんなとこに長いこと居ても風邪を引くだけ  
だわ」

そう言って、リンは体を震わせる。仮にも季節は12月。あまり長いこと外に居たくないのは至極当然といえよう。

「……」

ヒメはしばらくの間考え込んでいたが、やがてリンの言葉に頷くと

部屋の中へと戻っていった。

そして時間は過ぎていき、時刻は正午となった。

食堂にはたくさんの子供達が集まり、それぞれの食事を取る。固形栄養剤や栄養ドリンクで済ませる者、食堂で注文する者、弁当を持ってきている者など多種多様である。

サトルはユリと並んで弁当箱を開ける。その隣にヒロキが座り、正面にリン、リンの隣にヒメが座る。

ちよつとしたいざこざがあっても、この四人はすぐに元に戻る。ちよつとした子供同士の喧嘩のようなもので、すぐに仲直りするのである。今までもこういうことは幾度かあったが、すぐに四人は集まっつてこうして食事を取るのである。

「あーあ、隊長羨しいつす。女の子の手作り弁当なんて……」  
そう愚痴りながら、ヒロキは量産型食堂のおばちゃん手作りうどんをすすする。

「あら、女の子の手作り弁当を食べられないのはあんなだけなのね」  
「……」

リンとヒメの昼食はヒメが一人で準備する。これが二人のいつもの昼食の風景だった。

今日も可愛いらしい弁当箱が二つ並べられ、仲良く同じ中身の弁当を並べていた。

「昨日までは隊長も仲間だったんすけど……」

「そんなに言うなら食つか？」

そう言っつてサトルはヒロキに弁当箱を差し出す。

「じゃあ、ありがたく……」

瞬間、恐ろしいまでの殺気を感じる。

眼は獅子。まとう気迫は伝説の神兽、白虎。

可愛い少女とは思えないほどの鋭い視線がヒロキを射抜く。

彼は突き出しかけた箸をそろそろと引っ込める。

「やっぱ、いいっす」

「そうか？」

サトルは隣で発せられる殺気に気付かないのか、弁当箱を引っ込める。

「じゃあ、あたしがもらおうかしら」

そう言つて、リンが箸を躍らせる。

ピーマンの肉詰めをかつさらった箸はすぐさま持ち主の元へと舞い戻り、獲物を彼女へ運ぶ。

「うーん、美味しいわね。味付けも絶妙だし、火の通り加減もばっちりね。なかなかやるわね、ユリ」

そう、仮面のような笑顔でリンは言う。ユリも仮面の笑顔を張り付けてそれに対峙する。

「じゃあ、俺ももらうぞ」

そう言つて、サトルはリンの弁当箱からエビフライをさらう。

突然の不意打ちにリンは反応することもできなかったが、誰よりも大きな衝撃を受けたのはユリだった。

リンはユリにだけわかるようにニヤリと笑う。ユリとしては屈辱である。リンが弁当を作ったわけではないが、サトルの一番箸を奪い取られただけでなく、自分の弁当に一番に箸を付けられたのだ。

「あ、やったな!？」

それだけに留まらず、リンは一個しか入っていない煮込みハンバーグ（ハートマーク付き）を強奪する。

「一個しかないハンバーグを!？」

それどころか、ヒメまでもがサトルの弁当箱からおかずを搾取する。

「ヒメ!？」

「……美味」

こうして弁当大戦争が始まった。

もはや自分の弁当ではなく、他人の弁当を奪い取る血で血を洗うような戦いが始まった。

各人はもはや自分の弁当に手を付けるのも忘れて相手の弁当を奪い取る。

ユリが作った弁当は見るも無残に奪い取られ、もはや白米しか残ってはいなかった。

リンとヒメの弁当も、半分くらいずつはなくなっている。

「くく……もう俺には奪われるものはない」

「あら、まだ白いご飯が残っているじゃない」

「……撤退」

リンはまだ戦意喪失してはいないのか、白米相手に箸を構える。ヒメはまだ自分のおかずが残っているうちに早々撤退を決め込む。

「はあ……お弁当戦争に参加できないオイラ、なんだかさびしいです……」

ヒロキは自分が弁当を持って来ていないことを嘆きながらうどんをずるずると食べる。

「あの……」

そのとき、彼の元へと弁当箱が差し出される。

「少し食べちゃいましたけど、よかったら食べてください」

四分の三ほど残っている弁当箱をユリが差し出す。ヒロキは目を輝かせながらユリを見つめる。

「い、いいですか!？」

「ええ、あと、ちょっとお手洗いに行つてきます」

そう言つてユリは席を立つ。

「さあ、覚悟なさい」

「覚悟するのはお前だ……」

戦争を繰り広げる二人はユリが立ったことにも気付かずに戦いを続ける。

「……」

特大のため息をついたヒメは、自分の弁当箱を黙ってヒロキの方へと差し出した。

「ヒメちゃん？」

「食べて。追ってくる」  
そう言つて、ヒメは席を立つ。そして、トイレとは別の方向へとむかったユリの後を追いかけた。

ユリは黙つて階段を上つていく。ヒメは気付かれないように音を立  
てずに彼女の後を追いかける。

しばらく行くと、彼女はそのまま屋上へと出ていった。ヒメも屋上  
へと繋がる扉に身を滑りこませる。

彼女はフェンス脇へと歩いていく。冷たい風が屋上を駆け抜け、雪  
のように白い髪の毛がぱらぱらと舞い上がる。

「……………」

ユリは特大のため息をついた。そして、何をするわけでもなくぼー  
っと虚空の彼方を見つめる。

「……………」

ヒメはゆっくりと彼女の隣に立つ。ユリは驚いたような表情でヒメ  
を見つめる。

「心配」

「……………」

ユリはすぐに穏やかな表情を浮かべて、曇った冬の寒空を見上げる。  
空の一角は黒く濁り、今にも雨か雪が降ってきてそうな天気だった。

「どう思ってるの？」

「え……………」

突然、ヒメがユリへと尋ねる。

「サトル」

「ああ、サトルさんですか……………」

ようやく先程の言葉の意味を理解したユリは、目を瞑つてゆっくり  
と喋り始める。

「凄く、カッコいいと思います」

「それだけ？」

「ちょっと怖いけど、優しくて、寡黙だけど、本当はお喋りで……  
凄く惹かれます」

ヒメは黙ってユリの言葉を聞く。

「朝ご飯を作ったとき、凄く嬉しそうに笑ってくれたんです。今日の弁当を作ったときも笑ってくれました。結局ほとんど口に入りませんでしたけど……」

「……ユリの料理、優しい味がした」

ヒメは素直に料理の感想を述べる。

その言葉に目を丸くして驚くユリ。目の前の、同室で暮らす少年よりももっと寡黙な少女の口からそんな言葉が飛び出すとは思ってもしなかったのだった。

「温もりがあった。とても優しい……」

そこで、彼女は突然言葉を切る。まるで空気の匂いを感じ取ろうとしているかのように視線が鋭くなり、表情が険しくなる。

「来る」

「え……？」

ヒメはユリへ覆い被さるように飛びついた。

その瞬間、空気が歪む。

空が……裂ける。

つい三秒前までユリが立っていた場所を銃弾が通過する。

脅しではなく、真正銘彼女を狙った正確な射撃。もしヒメがいなければ、間違いなく弾丸はユリのいた場所を貫いていただろう。

空の裂け目から姿を表す異形の怪物。人とも機械とも見えるその化け物は、金属製の目を通して獲物を視認する。

「逃げて」

ヒメは懐からマシンピストルを抜くと一気に引き金を引く。軽い振動とともに弾丸が吐き出され、雲間に揺れる怪物を迎え撃つ。

「サトル達を呼んできて」

「は、はい……」

急いで走り出すユリ。



それを見送る間もなくヒメはマシンピストルを撃つ。

空中に浮かぶ金属の人形……ロベミライア軍の主力兵器である自立機動型制圧兵器、その名はオートマータ。

それが雲の切れ間から続々と生まれていく。空を覆いつくそうかというほどの勢いで増殖していくそれは、まさしく機械の大隊と表現するに値するモノだった。

ロベミライア軍が開発した次世代移動手段、転移とは世界の狭間である亜空間を通して一定の地点から別の離れた地点へと物質を移動させる手段である。それは主に機械兵器の敵地への派遣に用いられ、こうして日本に限らず世界各地を襲う。

国連軍も転移の技術を入手するも、失敗すれば転移させられた物質は次元の狭間に取り残されるか、変異して吹き飛ぶという性質上、人間兵を主力とする国連軍にはさほど意味のない技術だった。

元は小国でありながら、ここまで勢力を拡大できたのは、偏にこの質が高く、それでいて数の多い機械兵と転移技術のおかげだと言える。どこを攻撃されるかわからない以上、拠点防衛に兵力を割かざる得ない。故に、ロベミライア本国への攻撃へ回す人員が不足することとなる。これだけの物的優位性を持っていながら、国連軍がロベミライアを制圧することができない理由がそこにあった。

そして、今も日本軍の中でも急所とも言えるジュニアチーム訓練所への攻撃が始まろうとしていた。

確かにジュニアチームは日本最強の部隊の一つである。だが、後援部隊を含めるとそうはいかない。

、の三チームのみが戦闘能力を持っている。後援部隊はいわばお荷物である。訓練所には、その主力三部隊とともに、お荷物の後援部隊も集まっている。後援部隊の隊員達を襲う混乱は、確実に主力三部隊へも影響を与えることとなる。

ヒメはゆっくりと後退する。多勢に無勢、いかに三秒先の未来を見通すことができる能力を持っているといえど、これだけの数のオートマータの相手をするのは不可能だった。

だが、彼女は安心する。三秒先の未来を見たからこそ、後退する歩みを止めた。

突如、機械の大隊の中心で爆炎が上がる。

「ヒメちゃん、お待たせっす！」

ライフルを構えるヒロキ。その手には彼の愛銃、精霊が握られていた。劣化ウラン弾を撃ち出したのだらう。

劣化ウラン弾は対象に命中すると同時に炎を上げて燃焼する特性を持っている。また、弾そのものが重いため、通常のタングステン弾よりも速度が出る。故に、本来ならば戦車をも射抜くことができる弾丸なのである。

「他の後援部隊は全員、地下へと避難させた」

「ここからはあたし達の出番だね！」

両手に大小二丁の銃を持つサトル、二本のナイフを構えるリンが言う。

「来るっす！」

機械人形の部隊はしばらくの間滞空していたが、やがて高速で降下していく。

両腕に当たる部分からは白刃が飛び出し、獲物を切り刻もうとももの凄く速度で回転する。

「無駄だ」

清羽が閃光を吹く。瞬間にオートマータの特殊軽金装甲を歪ませる。そこへ狙ったかのように巨獣が撃ち込まれる。オートマータは大爆発を起こして上下に裂けた。サトルは回転するブレードを回避しながら、すれ違いざまに次々と弾丸の嵐を叩き込む。

「遅い遅い遅ーいッ！」

俊敏なオートマータを遙かに上回る速度でリングが飛ぶ。回転するブレードは停止しているかの如く根元から切り取られ、次々と動きを止める。

他の隊員たちも次々にオートマータを撃破する。そこにはもはや、ぐーたら少年部隊の姿など微塵もなかった。

始めは空の一角を占めるほどの数だったオートマータも徐々に数を減らし、もう残りわずかとなっていた。

「これで終わりだ！」

最後のオートマータへと巨獣が食らい付く。機械の体を食いちぎられた機械人形は断末魔を上げながら爆散する。ぱらぱらと散っていくオートマータの欠片を踏み散らしながら、サトルは両手の銃を収めた。

仲間の少年兵達の歓声が轟く。彼らは戦いに勝利したのだ。

「ヒメ、一人でよくやったな」

サトルはヒメの頭をぐりぐりと撫でてやる。ヒメはややくすぐったそうな表情を浮かべつつも微笑を浮かべる。彼女がいなければ、ユリは間違いなく命を落としていただろう。

「ヒメさん！」

戦闘が終わり、安全になったのを確認するや否や、ユリがヒメへと駆け寄り、飛びついた。

今度は半歩ほど後ろへ下がるも、なんとかユリの体を受け止める。

「もっと優しく」

「あ、ご、ごめんさない！ つい嬉しくて……」

ぽりぽりと頬をかきながら、ユリは白い頬を朱に染める。

「助けてもらってありがとうございます」

「……ユリは仲間」

その言葉を聞いて、一時ぽかんとするユリ。だが、すぐに満面の笑顔浮かべて彼女は大きく頷いて、はい！と答えた。

### 第三話 F i g h t i n g (後書き)

今日は資料の移動というフォールスミッションがあった。

そのお疲れ様会でサトル達はビールを注文する。

「そうだ！ ユリちゃんお酒強いのー？」

仲間にあおられ、一気飲みをして目を回すユリ。

サトルは彼女を連れて酔い覚ましに冷たい風に当たらせる。

「サトルさんって……どんな人なんですか？」

ふと、ユリは疑問に思ったことを尋ねてみる。彼の過去を彼女は知りたかった。

「……つまらない話になるぞ？」

そう言っつて、彼は自分の過去を語り始める。

次話、第四話 I n v e s t i g a t i n g

## 第四話 Investigating

### 第四話

「今日の任務を説明する」

オートマータの襲撃から四日が経過した。

ユリは部隊に馴染みつつあり、サトル達もユリを仲間として迎えていた。

彼女自身に戦う力はない。だが、それでも彼女はサトル達と一緒に体を動かし、戦うことはなくとも訓練に励んでいた。

さて、彼女が所属する後援部隊だが、主戦力ではないとはいえ、一応は任務がある。それがフォールスミッションである。

主力三部隊ももちろん任務には参加する。だが書類の整理や、資料の回収などでは人手が多い方が迅速に任務が進む。そういう場面では後援部隊も当然の如く任務に駆り出されるのである。

今回の任務もフォールスミッション。すなわち、サトル達とユリは一緒に任務に参加するのである。ユリにとっては初の任務だった。

「先日の訓練所へのオートマータ襲撃と同日、別の研究所への襲撃も発生した」

転移による襲撃は同時に違う場所へ攻撃をすることによって、防衛側の戦力を分散させることが常識であった。サトル達の訓練所への襲撃があつたということは、同時に別の場所が襲撃されていてもそれが普通であつた。

「軍の到着が早かつたため襲撃による被害は最小限に留まつたが、建物が使いものにならなくなってしまった。そのため、第二研究所の東棟へと移動することになった。今回の任務は研究所の移転作業の手伝いだ」

概要を説明すると、研究所が使えなくなったため、現在では使用されていない国立第二研究所の東棟へと設備を移動させ、復興するま

での間そこで研究を行うこととなった。今回の任務はその設備や資料の移転作業の荷物運びである。

こういう戦闘を伴わない任務は、少年兵を働かせる軍務としては最適である。何よりも外見がいたため、いかにも戦災孤児を支援していますというアピールを行うことができる。

「詳しい内容は指令書に目を通すように。では、12時より任務を開始する。所定の位置について待機するように」

サトル達は崩落した第一国立研究所を訪れていた。襲撃から四日が経過し、完全に調査などが済ませられてようやく荷物を運び出せる準備が整ったのであった。

今回移動させる資料は、地下書庫に収められた大量の研究資料及び蔵書の類である。この研究所は様々な生体部品に関する研究を行っていた研究所だ。生体部品とはその名の通り、有機物を部品として用いる技術のことであり、無機物の金属などと違って再生能力を持たせることができるので、関心の高い分野の一つだった。

サトルとヒロキの二人は山積みになされた本を抱えて段ボール箱へと移していく。今回は中身を確かめる必要がないので、前回の任務よりも素早く片付けることができそうだった。

二人は黙々と本の山を移動させる。前回もそうだったが、今回もかなり難しい内容の本が並べられており、二人は本を読もうという気も起きなかった。

「隊長……今回はわざわざ確認の必要がなくてよかったですね」

「そうだな、前は一回一回確認していたから膨大な時間がかかってしまった。それに、俺達が本の中身を理解したところで意味がないからな」

並べられた本のタイトルはいずれもアミノ酸やタンパク質などに関する本ばかりで、サトル達の興味を引きそうな本はなかった。

「生体部品って、腕とか足とかも作れるんすよね？」

「そうだな。だが、ES細胞に関する研究が完成しつつある今、そういう用途は意味がないだろうがな」

ES細胞とはあらゆる臓器へと分化する可能性がある細胞群である。この細胞からはあらゆる臓器を作り出すことができ、例えば心臓、肺などの一人の人間に一つしかない臓器などを作って移植手術に際に用いることも可能である。もちろん、事故などによって失われた手足を作り出し、移植することも可能なので、この研究が完成すれば義体はまったく不要となるのである。

「それよりも、戦車や戦闘機の装甲の自動修復、それからオートマータの自己再生能力などの用途の方が有望だろうな」

「う……撃つても撃つても再生するオートマータとか勘弁つす……」

「まあ、そう簡単にはいかないだろうな。自己再生といってもそこまで高速で再生できるわけではあるまい。現状でせいぜい一般的な動物の再生能力程度。即軍用に使えるような技術でもあるまい」

サトルは本を段ボール箱へと移しながら答える。

もし、ヒロキの言うように高速で再生するオートマータが完成すればそれは連合国側にとって脅威となることは違いない。この研究はロベミライアがそのようなオートマータを作って使用した場合の対策を立てるための研究でもあるのだ。

「もつとも、有機物で鋼鉄に並ぶほどの物質を作れるかどうかは甚だ疑問だがな」

サトルは手元の本のページをぺらぺらとめくってみる。そこには体細胞分裂に関する細かい記述が丁寧に書き込まれていた。

「体細胞分裂はDNAに書き込まれた塩基配列に従ってアミノ酸を精製し、それを結合させてタンパク質を合成するそうだ。つまり、どんなにあがいてもタンパク質によって作られたモノしか体細胞分裂の原理では作れないらしい」

「タンパク質って、熱せられると性質が変化するんすよね？」

「そうだ。卵焼きの原理だな」

卵は通常の状態だと液状の物質だが、熱せられるとタンパク質が固まり、固形化する。その温度は60 前後だと言われている。つまり、60度以上に熱せられると性質が変化してしまうため、耐熱装甲などには用いることができないということだ。

「タンパク質を戦車の装甲に使って、焼痕弾でもぶち込まれてみる」  
「……焼き肉戦車っすね……」

ヒロキは敵兵にむしゃむしゃと食べられていく戦車を想像する。そのあまりのおかしさに思わず大きな声で笑ってしまう。

「リンならもつと大笑いしただろうな」

「リン隊長は笑いの沸点低いっすからね」

「つくしゅー！」

「……風邪？」

「違うわ。そこまで軟じゃないわよ」

リンたちも別の書庫で本を運び出す作業を行っていた。この研究所は本が分野別に分けられて別室に置かれている。

彼女らが作業を行っている部屋は生体部品の用途などについて記述されている部屋だった。

「それにしても、ホントこんな本ばかりよく読むわよね……」  
「……」

ヒメは片付けもせずに黙って本のページを進める。タイトルは『部品としての命』。部品交換技術について書かれた学術書である。

「ヒメえ、本ばかり読んでないで手伝ってよ」  
「……」

ヒメは黙ってページをめくり続ける。その様子に呆れて、リンはヒメが読んでいる本を覗きこんだ。

「そんなに面白い？」

「……」

彼女は本の一部を指さす。リンはその部分を読んでみた。



「なにになに……？ オキシデリボ社ではクローンを利用した部品交換技術が研究されていた。クローンのドナーを用いることによって、高い成功率を誇る脳移植を可能としていたのだ。だが、21XX年7月、5人のドナーが脱走を図り、この研究が世間に露見し、非人道的な研究を行っていたとして、絶対的だった社会的地位が大きく低下した……これがどうかしたの？」

「その後」

ヒメは更に読み進めるようにリンへと促す。その続きは、誰かが書き足したような殴り書きの文字だった。

「このように人の命を弄ぶような研究は断固行うべきではない。だが、我々はF部隊のような研究を行っている。これは彼らと同類の研究ではないだろうか……って、F部隊!?!」

「ユリの部隊もF部隊」

リンは腕を組んで考え始める。

「人の命を弄ぶような研究……?」

「部品交換技術、クローン、DNA操作、他にもいくらでも思いつく」

「どんな研究が行われていたかまでは書いてないわよね……」

リンはヒメから本を奪い取ってページをめくる。ところどころ殴り書きのメモは残されていたものの、F部隊に関する記述をほかに見つけることはできなかった。

「他の本も同じ」

別の本を手に取りうとしたリンにそう言葉をかける。少なくとも、今までヒメが確認した本の中にはF部隊に関する記述はなかったということである。

「ちっ!」

リンは舌打ちを打つ。

ヒメは落ち着いて次の本を手にとる。

「リンは片付けを。植物の本とか、関係のないものから」

「何かわかったら教えなさいよ」

そう言って、リンは植物図鑑の整理を始めた。

一方ユリは、後援部隊の二人の隊員とともに片付けの作業を行っていた。

「これで給料もらえるんだから楽だわ」

一人の女性隊員……高山ノブヨがそう言いながら段ボールに本を詰める。

「図書館司書みたいなものだよね」

もう一人の女性隊員……清水ユウコは本棚から本を引っ張り出していた。ユリもその作業を手伝う。

「ところで、ユリちゃんはどうして突然こんな時期にジュニアに来たの？」

突然話題を振られてユリは口籠る。

「あ、言いたくないなら言わなくていいわよ。どうせ皆訳有りなんだからさ。人に言えないような秘密もいっぱい持ってるわよ」

「そうだね。ま、私は普通に言っちゃうけどな」

そう言って、彼女は話し始める。

「私の両親、私が5歳のときに死んじゃったの。オートマータの襲撃に巻き込まれてね。私一人が家で留守番してたから助かったけど、それを聞いたときはショックだったな」

少女の齢は16か17くらいだろうか。となると、十年以上も前の出来事である。

「私のと似てるわね。私は小学校行ってる間だったわ。パパとママは研究員やってたんだけど、やっぱりオートマータの襲撃に巻き込まれたわ。それで、身寄りがなかった私を国が引き取って養ってくれたのよ」

二人はそうやって自分の過去を話して聞かせる。

今こそ気丈に振舞う二人だが、当時はどうだったのかと想像してみる。

もし、自分が何もわからないような子供だったら……と、そこまで考えて自分に子供だったころの記憶がないことを思い出す。

ユリはそのことを悲しく思う。他人の身になって考えることすらできないのだ。

「私……実は記憶がないんです」

そこで、ユリは口を開いた。相手だけに喋らせて自分が喋らないのはアンフェアである。

「一週間くらいから前の記憶が少しも……ないんです」

二人はその言葉を聞いて絶句する。

「それで……一週間前にジュニアチームの皆さんが襲撃された研究所を捜索しているとき、私がそこにいたのが発見されたんです」

「……ごめんね。私たち、そんなつもりじゃ……」

「ユリちゃんは最近来た子だから、普通の生活してたのかと思って……その話を聞きたかったの」

口々に謝罪の言葉を口にする二人に、ユリは首を振る。

「いいんですよ。記憶がなくても、今を楽しめるんですからね。こうやって、お二人と話をするのも楽しいですよ！」

そう言つて、ユリは次々に本を運ぶ。二人も今まで止めていた手を動かし始める。

「それに私、料理が得意だつてわかつたんです。サトルさんのために料理を作つて、美味しいって言ってもらえるのが嬉しいですよ」

「……サトル隊長“の”ために……?」

二人はその言葉に食らいつく。そして、ニヤニヤとした笑いを浮かべる。

そこで、ユリは自ら地雷を踏んでしまったことに気付いた。

「サトル隊長とどんな関係なの!？」

「どこまで進んでるの!？」

「料理つてことはまさか同棲!？」

「それじゃああんなことやそんなことや……」

きやあきやあとあることないことを騒ぎながらわめき始める二人。

ユリはもう、自分の力では収めることができないことをそのとき知った。

「ほら、答えなさいよー！」

「ほれほれ、吐いた方がお主の身のためでっせ？」

もはや口調までが怪しくなってきた二人。ユリは全てを覚悟して、ゆっくり話し始める。

「えっと……その……一応……一緒に住んでいます。でもそれは……」

「きゃー同棲だわー！」

「凄い！ まさかユリちゃんがそんな大胆な子だなんて……」

もはや理由を説明する間も与えずに騒ぎ立てる二人。ユリの表情が徐々に青くなっていく。

「その理由があつて……」

「で、どこまでやつちやつたの？ キス？ それともベツド!？」

「きゃあー！ そんなの私のユリちゃんのイメージじゃないわっ！」  
妄想が加速していく二人。もはや理由を聞く気もない二人をユリには止める術はなく、ただなされるがままとなつていった。

任務を無事に終えた彼らは、行き付けの居酒屋へとやってきた。

成年となる年齢を引き下げよう法律に変更があつたため、この国では20歳を迎えずに酒を飲むことができるようになったのだった。  
「で……なんでこいつらがついてきてるんだ？」

いつものメンバーの後ろについて来たのは、普段はたまに会話を交わす程度の仲のノブヨとウウコの姿があつた。

「あはは、たまにはいいじゃないですか、隊長！」

「ユリちゃんとすっかり仲良しになっちゃったんだよねー」

「え、ええ、まあ……」

二人はにこやかに笑ってユリを囲むように立つ。だが、間に挟まれた彼女の表情はやや引きつっていた。

そんなユリの様子には構わず、それどころか女性メンバーが増えて

上機嫌なヒロキはやや興奮した様子で口を動かす。

「それどころかべっぴんさんが増えて歓迎っすよ!」

「さすがヒロキ副隊長! 話がわかってるね」

「心が広くないとモテませんよ、たいちよ!」

やがてビールのジョッキがテーブルへと運ばれてくる。どれも白い泡を山盛りにしてはちばちと弾けさせている。

いの一番にヒロキがジョッキに飛びつき、高く掲げた。

「ではー、この不肖ながら私、近藤ヒロキが乾杯の音頭を取らせていただきます!」

7人は自分にあてがわれたジョッキを手にとる。威勢よく掲げる者、一応掲げてやっている者など、その様子は様々であるが、ともかく全員がジョッキを手にとっていた。

「かんぱーい!」

「かんぱーい!」

「乾杯」

「乾杯です」

「……」

ヒロキが元気よくジョッキを掲げる。それにリンやノブヨ、ユウコはジョッキを砕きかねない勢いでジョッキを叩きつける。サトルやヒメは静かにちよこつとだけジョッキを掲げ、ユリは遠慮がちにサトル達のジョッキに自分のジョッキをぶつけた。

まず一番にジョッキを傾けたのはヒロキだ。急性アルコール中毒などこ吹く風で一気にジョッキの中身を飲み干した。

「かーっ! やっぱビールは最高っす!」

「きゃー! さすが副隊長!」

「む、負けられないわね!」

それに負けじとリンは杯を傾ける。黄金色のそれは瞬く間に喉を流れ落ち、次の瞬間にはジョッキは空となっていた。

「リン隊長も凄いわ!」

「リン隊長もなかなかやるっすね……」

「じゃあ、次私行きまーす！」

そういつて、ユウコがビールを煽る。二人と同じように一気に飲み干し、満面の笑みを浮かべてジョッキを置いた。

「ユウコ、そんなお酒強かったっけ……？」

「らいじょうぶー！」

ノブヨが心配そうに声をかけるが、ユウコはやや怪しげな口調で答える。それを見て、苦笑を浮かべるユリ。

「ユリちゃんはどうなのよっ」

「そうだ！ ユリちゃんお酒強いのー？」

ノブヨとユウコに迫られ、ユリは苦笑いを浮かべる。

「わ、わかりません……お酒、記憶があるうちは飲んだことないですから……」

ジョッキの中身は未だわずかも減ってはいない。少なくとも、臭いを嗅いだ程度で赤くなるほど弱くはないようだ。

「乗る必要はないぞ」

いつの間にかジョッキの半分を空にしたサトルが言う。それに対して反論するようにノブヨ達は言った。

「折角なんですから盛り上がりましょうよー！」

「ほら、ユリちゃん！」

最初は戸惑っていたユリだったが、やがて意を決したのか、ビールのジョッキを抱え上げた。

「そ、その調子！」

そして、他の面々がしたように一気に傾ける。

「おお！ いい飲みっぷり！」

「ユリちゃん頑張れー！」

そして、彼女はそのままジョッキの中身を飲み干した。

「ふあ……目が……まはる……」

ユリはそのまま、口の端に泡を付けたままぶっ倒れてしまった。

「あちゃー……あんまり強くなかったかー……」

「こりゃ失敗だわ……」

目をくるくると回して倒れたユリを見かねて、サトルは残っていたビールを一気に傾けた。

「おい、大丈夫か？」

「あうー……頭が……」

どうやら意識はあるようだ。サトルは特大のため息を付くと、ユリに肩を貸した。

「外の風に当たりに行くぞ」

「はうー……すびばせん……」

ユリの肩を担ぎ上げるサトルはノブヨ達は離し立てた。

「さすが隊長！ アフターケアも欠かしませんね！」

「カツコイイ！ よつ色男！」

言葉の使い方を間違っていることに呆れながら、サトルはユリの肩を担いで店外へと足を進める。

「兄ちゃん、お酒初めての子に一気に飲みなんてやらせちゃダメだよ」店主が笑いながらサトルに言う。それにイライラしたような様子でサトルは答える。

「勝手に飲んだだけだ。それに、俺はやめると言った」

店内に笑い声が渦巻く。

口々に若いつてのはいいねえ、だとか若いうちは何でもできる、だとかそういった声が聞こえてくる。

そんな笑いの渦を背にしなから、店の裏へと出た。

「あうー……目が回ります……」

ぐったりとした様子のユリを、椅子に座らせて休ませる。この店の裏手には、悪酔いしたときに休憩するためのスペースが設けられている。もつとも、現代人は比較的酒に強くなったのか、それとも店の利用客がたまたま強いのか、そこを利用する者は少なかった。

「だから乗るなど言ったのに……」

「すみません……」

真つ青な顔をうつむかせて、ユリはサトルに謝り続ける。

サトルはそんな様子には構わず、ただユリの隣に座って胸元のポケットからタバコを取り出した。

「サトルさん、吸うんですか……？」

「たまにな。嫌いかな？」

ユリは首をふるふると横に振る。サトルは黙ってタバコを口にくわえると、電気ライターで火を付けた。最近は電池の小型化が進み、電気で火を付けるのが主流となっている。オイルライターに比べて遙かに寿命が長く、また小型化することができたのだ。

「……」

サトルは紫煙を揺らす。それは夜風に吹かれて散っていき、寒空の彼方へと消えていった。

「サトルさん」

ふと、ユリがサトルに声をかける。

「サトルさんって……どんな人なんですか？」

唐突に、唐突な質問をぶつけられて、サトルはそのまま目を細める。

「私……気付いたらサトルさんのこと、何も知りません」

サトルはふうと紫煙を吐き出す。そして不機嫌そうにタバコをくわえると、小さく口を動かした。

「知る必要があるのか？」

「知りたい……です」

再び紫煙が虚空へと消えていく。冷たい風が煙を巻き上げて、どこまでも誘うように吹き上げていく。

「自分のこともわからない私ですけど……せめて他人のことぐらいは知りたいと思ったんです……。昔のこととか……聞いてもいいですか？」

「……つまらない話になるぞ？」

サトルはタバコを地面に落とすと、靴のかかとで踏んで火を消す。

ユリはゆっくりとその言葉に頷いた。

最後に彼はため息をつく、静かな口調で語り始めた。



幼い時、彼はどこにでもいるような普通の子供だった。

普通の両親に囲まれ、普通の家庭に育ち、普通の幸せと普通の日常を享受する毎日を過ごしていた。

両親はとても優しくかった。もう一人まだ赤子の弟がいたが、それでも両親は彼に精一杯の愛情を注ぎ込んでいた。

彼にとって、毎日が楽しかった。まだ幼稚園に通っている年の頃である。友達もたくさんいたし、遊ぶ場所はそれこそいくらでもあった。

戦時中であっても、日本は決して戦争の表舞台に立つような国ではなかった。第九条こそ改正されていたが、軍事力は敵を殺すためのものではなく、味方を守るためにものとして振るわれていたのだ。

この頃の子供は大いに騒いで大いに喚く。それが普通なのである。もちろん彼もそんな普通の子供の一人だった。いや、普通よりも騒ぎすぎるくらいだった。

ともかく触れるもの全てが目新しく、どんなことに対しても喜びを見い出すことができたのだった。

だが、それが変化したのはデパートに買い物に出かけた日だった。休日ということもあって、デパートにはたくさんの人々が訪れていた。まだこの頃は戦争も始まったばかりで、民衆の心にはまさか日本が攻撃対象になるなんてことはないだろう、という認識があった。まだ無差別攻撃も始まっておらず、今回の戦争もアメリカが全て片を付けてくれるだろうと人々は信じていた。もちろん、彼の両親もそう考えていた。

「パパ、きょうはなにをかうの？」

父と母に連れられた幼い男の子はわくわくとした気持ちを落ち着かせることもできずに、はしゃぎながら父に尋ねる。デパートに連れてきてもらった日は、必ずレストランでお子様ランチを食べる決ま

りになっていた。

「今日はお前の服を買ったよ。もうすぐ小学校だろう?」

男の子は近々私立の小学校に進学することになっていた。その学校にはきちんと定められた制服があり、今日はその制服を仕立てに来たのである。

「おわったあとは、おこさまランチだよね?」

「そうよ。楽しみにしてらっしゃい」

「はい!」

赤子をベビーカーに乗せて押す母親が答える。男の子は嬉しそうに返事をした。

男の子は服屋に連れてこられると、色々な体の部位のサイズを測ってもらった。彼はお子様ランチがその後待っていることを考えながら、おとなしく我慢していた。

「いいお子さんですね」

店員はその様子を見て男の子のことを褒める。父親は誇らしそうに自慢の息子ですから、と答えた。

男の子の我慢の限界に達しようとしたそのとき、ちようど寸法を測り終える。

「この頃のお子さんははしゃぎまわって大変なんですよ。でも、お宅のお子さんはホントに楽でした」

「この子はご褒美があるとなんでもやるんです。だから、きちんと待つこともできるんですよ」

「ほう、ではこれから何か買ってあげるんですか?」

「これからね、レストランに行くの!」  
威勢よく男の子は店員の質問に答える。

「それでね、おこさまランチをたべるの!」

「それはよかったじゃないか! お父さんとお母さんにありがとうって言うんだぞ?」

店員はにこにことした表情を浮かべながら男の子の頭を撫でる。男の子はくすぐったそうに、けれども満面の笑みで頷いた。

いよいよ測量が終わり、彼らはレストラン街へと向かっていた。レストランといっても、ちょっとしたファミレスである。特別美味しいものが出るわけではないし、何か凄い飾り付けのものがでるわけではない。

でも、男の子にとってはその食事は、なによりも素晴らしい幸福なのであって、今日も至福の表情を浮かべながら店に飛び込んだ。その後を笑いながら両親が付いて歩く。

どこにでもあるような家族の光景だった。

男の子は席に座ると一番にお子様ランチと大きな声で注文する。

そんな様子に店員も笑いながら注文を受けていた。男の子の両親もすでに決めていたのか、店員に注文する。

「まだこないのー？」

「今ね、お子様ランチの野菜スープに入ってるレタスの種を植えているのよ？」

「でもって、鳥の唐揚げの鶏さんの卵を温めてるんだよ？」

「えー！ そんなにまつのー！」

談笑の声が昼のレストランに響く。そんな愉快で和やかな空気のレストランは包まれていた。

もちろん、レタスの種を植えたわけではないし、卵を温めるところから始める訳もなく、すぐにお子様ランチが運ばれてきた。

「わーい！ きょうはにっぽんだー！」

星型に盛られたチキンライスの頂上に日の丸の旗が輝く。

男の子はそれを手にとって、大事そうにポケットにしまいこんだ。

もちろん、そんなものは三日も経てばなくしてしまう。けれども、それはとても大切な三日だけの宝物だった。

「もうたべていい？」

男の子がわくわくしながら両親に尋ねる。両親は優しく笑って頷いた。

男の子は置かれていた小さなスプーンを手に取る。

「いただきますーす！」

けれども……そのスプーンはチキンライスに突き刺さることはなくて……代わりに金属の足がチキンライスに突き刺さっていた。

男の子の頭の中にクエスチョンマークが浮かぶ前にそれは起こった。金属の人型人形は大きく腕を振り払う。その瞬間、恐怖に歪んだ母親の顔が吹き飛んだ。

父親が立ち上がり、なんとか男の子は守ろうと覆い被さる。けれども、金属の人形がもう一度腕を振るったとき、決意に満ちた父親の背中が二つに割れた。

男の子はその衝撃で吹き飛ばされる。

次々とガラス窓が砕け散り、悲鳴と怒号が場を支配する。

男の子は何が起こったのかもわからず、ただただぼかんとしたままチキンライスを頭から被って座っていた。

金属の人型人形は、無味無臭の殺意を持って全てを破壊し尽くす。コシヨウの入った瓶は割れ、キャベツが山と盛られたまな板は砕け散る。

必死に包丁を持って立ち向かおうとするコックもいたが、彼はやがて機械人形に頭を掴まれると、十階の窓を突き破って外に放り出された。

まさに地獄絵図という表現が正しかった。

肉が刻まれ骨は砕け、血液は舞い命が引き裂かれる。

もはやためらいを知らない破壊と殺戮。人間の業では成し得ない惨状がそこでは繰り広げられていた。

男の子はまったくもって何が起こっているかを理解できなかったが、ともかくお子様ランチが食べられないことだけはわかった。そう考えると、男の子の胸の中に悲しみが湧き上がっていく。

「う……ひっく……」

そして、それは一気に飛散した。

「うわああああああああん！ ひっく……ぐすっ……えぐっ

……」

その慟哭に、機械人形を首をもたげる。

金属のレンズが男の子のことを捉える。ゆつくりと男の子の方へと歩み寄り、ワイヤーで組まれた腕を揺らす。

「……………えぐ……………うっ……………？」

男の子が見上げると、その目前にオートマータが立っていた。何本ものワイヤーが編み重なって組まれたその腕は、徐々に姿を変えていく。その悲しみを断ち切る一本の白刃へと変化する。

「……………」

機械人形は何も声を出さず、音も出さずに刃を振り上げる。

そして、振り……………下すことができなかった。

その瞬間、ワイヤーが何かに切断される。

そこに立っていたのは一人の壮年の女性。その右手には真っ白な刃が輝き、左手には巨大な銃が握られていた。

表情は怒りに満ち、無言で人形たちをにらみつける。

女性の姿が……………消える。

一瞬にして一体の機械人形の胴体が吹き飛ぶ。爆発を起こしながら壊れ飛ぶ機械人形はそのまま機能を止めて崩れ落ちた。

「……………お前たちは許さない」

彼女がそう呟いた瞬間、右手の刃が翻る。それと同時に機械人形の頭が飛ぶ。

「罪のない人々の命を奪い……………」

左手の巨銃が爆ぜる。それと同時に機械人形の胴体が爆散する。

「これからも続くはずだった命を終わらせた」

両手が揺れる。その瞬間、二体のオートマータが同時に吹き飛んだ。

「お前たちに……………」

両手の武器を腰のホルダーにスライドさせる。その時、多方向から同時にオートマータが襲いかかる。

「そんな権利はない！」

見事なまでの回転蹴りが繰り出され、オートマータは次々に蹴り貫かれていく。

壮年とは思えない動きで次々と徒手空拳で機械人形の軍勢を叩き伏

せていく。彼女には本来武器は必要ないのだろう。その動きはまさに洗練されていて、わずかたりとも無駄のない、それでいて最大限の威力を發揮した。

多数その場に召喚されたオートマータは徐々に数を減らしていく。「はっ！」

一際大きな掛け声とともに、最後のオートマータの胴体を拳が貫く。機械の人形は狂ったような叫び声を上げて、がくりと崩れ落ちた。腕を振るってオートマータから腕を引き抜く。今まで破壊の限りを尽くしていた異形の化け物は、確かにその時終焉を迎えた。

壮年の女性は悲しそうな表情を浮かべて腰に下げられた通信機を手取る。

「こちら十階レストラン街。全ての目標をせん滅した」

『了解。生存者は何名だ？』

「生存者はゼロめ……」

そう言いかけて、小さなすすり泣きの声を耳にする。

彼女がその声の元へと向かうと、小さな男の子がちんまりと座って泣いていた。

「大丈夫？ どこか痛いところはないかな？」

「えぐっ……ぐすっ……おこさまランチが……」

男の子は泣きながらもそう呟く。それを見て、女性は一っこりと笑った。

「生存者一名。小さな男の子よ。外傷はない模様」

『了解。生存者を至急保護されたし』

「了解」

女性は通信機を腰に収めると、男の子に手を差し伸べた。

「立てる？」

「……うん」

男の子はその女性の手を取って立ち上がる。頭からチキンライスを被っていたので、酷い格好だった。

「おこさまランチ……」

「それはおばさ……お姉さんが今度食べさせてあげるから、一緒に  
行こう。ね?」

「本当……?」

男の子は泣きながら女性に尋ねた。女性はにっこりと笑って頷いた。  
「特別に大盛りにしてあげちゃおうよ」

「やったあ!」

男の子は嬉しそうに飛び跳ねる。そんな様子に女性は微笑んだ。

「さ、行きましょう」

「でも……パパとママは?」

女性はしばらくの間黙っていたが、やがてゆっくりと絞りだすように  
呟いた。

「パパとママは……ちょっと遠いところに行っちゃったのよ」

「とおいところ……?」

女性の目頭が濡れる。頬を一筋の涙が流れ落ちる。

「だから……お姉さんと一緒に行きましょう」

「すぐかえってくる?」

彼女はしばらくの間、その言葉に答えることができなかった。

「また……きつといつか会えるわ」

「わかった。行くー!」

男の子は彼女の手をしっかりと握った。

彼女にはその様子がくすぐったくて……けれども懐かしくて、また  
目から一筋の涙を流して、そして一緒に歩いた。

しばらくの間、ユリは言葉話すこともできずにぼかんとしていた。  
「そのとき助けてくれたのが師匠だ。その師匠達に養ってもらって、  
今の俺が在るんだ」

サトルは新しいタバコを取り出し、口にくわえて火をつけた。  
やがて、ユリはゆっくりと口を開いた。

「……ごめんなさい」

「謝る必要はない。ここにいる者は皆似たような過去を持っている」  
ユリは目頭を押さえる。

「でも……あんまりです……」

「今はそう珍しくない。ロベミライアの攻撃が激化してきて、世界中各地で文人軍人関係無しに無差別殺戮が起こっている」

「そんな……酷過ぎます……」

ユリは肩を小刻みに振るわせる。

「だから言っただろう、つまらない話になると」

「全然つまります」

ユリは意味のわからないことを言いながらごしごしと目許を拭く。

「愉快だつて言うのか？」

「そういう意味じゃありません！」

少し前まで酒でふらついていたことも忘れて、腰に手を当てて立ち上がる。

「悲しい話だけど……知らないといけない話だつて思いました！」

「ふむ、何故だ？」

ユリは両手を胸に当てて語り始める。

「私は記憶がありません。だから、この世界が今どんな状態にあるかを知らないといけないんです。じゃないと……人の話を聞いても、共感することができないんです」

「別に共感してもらおうと思つて話したわけじゃない」

「でも！ 私は人の気持ちを知りたいんです！」

「知つてどうする？」

「知つて……少しでもその人のためになりたいんです……」

サトルはユリの言葉を聞いて黙りこむ。

ユリもそれ以上言葉を発することもなく、椅子に座り込んだ。

冷たい風が吹きぬける。頭上には半分に欠けた月が二人を明るく照らしていた。

「私は……どうすればいいんでしょうか……」

ユリが小さな声でぼそりと呟く。



しばらくの間、サトルは黙りこくっていたが、やがて口を開いた。

「……………知ってくれればいい。それだけで……………俺には十分だ」

紫煙が揺れる。

月まで届くことはないけれども、その煙はどこまでも、どこまでも  
ゆっくりと月を目指して昇っていった。

#### 第四話 Investigating(後書き)

今日はいつもの次回予告とは違いますよ。

最近、部品シリーズの書き溜め分を全て書き終わり、長かった部品シリーズを完結させたのですが、これから何を書こうかという疑問が生まれました。

そこで、皆さんにお尋ねしたいことがあります。

ニーズとしては、バトルアクションモノとほのぼの系の小説、どちらの方が読みたいでしょうか？

今、二作品分の構想が浮かんでいるのですが、どっちを書こうか悩んでいます。

読者の皆さんとしてはどっちの作品の方が読みたいでしょうか？

某氏に習ってアンケートトックレールでアンケートを作成しました。

<http://enq-maker.com/4S6brTj>

皆様のご投票、お待ちしております。

では、次回予告です。

なんでもない休日のある日、ユリはどうしても行ってみたい場所があった。

「今日……その、お暇ですか？」

ユリは遠慮しがちにサトルに尋ねる。

「あの……行ってみたいところがあるんですけど……付き合ってもらってもいいですか？」

いつもは動かないサトルが珍しく首を縦に振る。

「その……皆さんは無しで行きたいんですけど……」

その提案を盗み聞きしていたリンは激しく激昂する。

「ヒメ、バイクを出すわよ」

「……」

ヒメも、どうせリンが二人を妨害するようなことをすると言い出す

だろつと見越して、今日の予定を次回の休日に繰り超す算段をして  
いた。

次話、第五話 G o i n g

## 第五話 Going

### 第五話

「あの、サトルさん？」

とある休日、その呼び掛けは彼女の方からあった。

太陽は空に輝き、雲は空の端に一つか二つ。まさに、快晴と表現するに相応しい空だった。

まだ、陽は東の空で輝いている。今日という日はまだ始まったばかりである。

彼は読んで新聞から目を上げることなく、ただなんだと小さく答える。

「今日……その、お暇ですか？」

「暇だが……？」

サトルは新聞のページをめくる。新聞の第一面にはまたしても発生したオートマータの攻撃に関する記事が大きく報道されていた。

「あの……行ってみたいところがあるんですけど……付き合ってもらってもいいですか？」

彼女はそう、頬を赤く染めながら彼に尋ねた。

『あの……行ってみたいところがあるんですけど……付き合ってもらってもいいですか？』

とある休日、その呼びかけは彼女の耳へと届いた。

「行ってみたいところ……？」

一人の少女は額に皺を寄せて眉をひそめる。

「……盗聴、良くない」

「あなたがセットしてくれたんでしょ？」

少女……リンは耳にかけたヘッドセットから聞こえてくる声に注意

を向けながら返事をする。

もう一人の少女……ヒメも、ヘッドセットを耳にかけながら大きなため息をつく。

『行ってみたいところ……?』

『はい』

二人はごくりと唾を飲み込む。彼女は一体どこへ行きたいというのだろうか。

場合によっては、それを全力で阻止しなければならないとリンは考えていた。ヒメも、どうせリンが二人を妨害するようなことをすると言い出すだろうと見越して、今日の予定を次回の休日に繰り超す算段をしていた。

『植物園に行ってみたいんです』

「植物園……?」

植物園といえば現代の都心で花屋を除き、唯一まともな植物を拝むことができる場所である。今や野に咲く花を見たければ地方の山まで行かないと見ることもできないのである。

『私と同じ名前の花を見てみたいんです』

『そんなもの、花屋でもいいだろう?』

しばらくの間、ユリが口籠る。リンは心の中でガッツポーズを決める。そもそも、動物園に行こうと以前にリンが誘ったときも、動物が見たければ動物図鑑でも見ていればいいだろうと言って却下した男である。ましてや植物園など、行くわけがないだろう。

『でも……花畑を見てみたいんです』

『花畑……?』

『一面の花畑ってどんなものなんでしょうか。想像ならいくらでもできますけど……でも、実際には見ればまた違う世界が広がっているようにも思えるんです』

「うふふ、無理ね。あのサトルがOK出すはずが……」

『わかった』

リンは胸中で激しく驚く。ヒメは黙って朝のコーヒーをすすする。

『その……皆さんは無しでいきたいんですけど……』

リンは全神経を耳へと集中させる。この答え次第ではユリを絞め殺そうと決意した。

『ああ、わかった。どうせリン達は植物園なんか興味ないだろうしな』

「リン、ヘッドセットを投げないで」

「え……?」

リンは無意識にヘッドセットを手に持って構えていた。もし、彼女の一言がなければ間違いなく床へと叩きつけていただろう。

『俺がバイクを出す。どうせユリも一人でゆっくり回りたいだろう?俺は口出しはしないからな』

『はい、ありがとうございます!』

「ヒメ、バイクを出すわよ」

「……」

ヒメは黙ってコーヒーを一気に飲み干した。リンはさっそくヘルメットを取り出し、準備にいそしむ。

「リン」

ヒメはリンへと無線イヤホンを差し出した。

「これは……?」

「サトルのホルスターに仕込んだ盗聴機のイヤホン」

「ありがとう」

リンは大きなヘッドホンを外すと、耳にイヤホンを引っ掛けた。

『とても好きなんです!』

ユリの声はやや恥ずかしそうでありながら、凜としている。その言葉に、リンは一気に頬を紅潮させた。

「な、何が好きなのよ!??」

「百合の花」

ユリは落ち着いてコートを着込む。彼女のヘッドセットも既にイヤホンへと変わっていた。

「まったく……紛らわしいんだから……」

リンはぱりぱりと頭をかきながらバッグを手にとる。中には財布や携帯電話、ナイフなどが入っている。

ヒメも同様にポーチを腰に下げた。中には非常用の武器、財布、携帯電話などの携行品が入っている。

「先周り」

ヒメは一枚の地図を取り出した。そして、植物園への行き方を指で辿る。

頷きながらリンは髪をヘアバンドでまとめた。そして、ヘルメットを脇に抱えて部屋を出る。

「さあ、行きましょう!」

数百メートルというビル群が飛ぶように流れていく。

朝日はまだ上り始めたばかりである。今日という一日はまだ長い。

目的地の植物園は都心から数キロ離れた山岳地帯にあった。

山岳地帯といっても、そこは鏡のような壁面をもつ高層ビルで覆われている。そんなビル街の真ん中にその植物園は存在した。

『次のT字路を左折してください』

リンはナビゲーションの通りに左折する。その後方にヒメが付いて走る。

ナビゲーションのマップ上にはいくつかの光点が表示されている。

目的地と、自分の位置、それからサトルの位置である。

サトルの位置はサトルに無断で取り付けたGPSが情報を発信することによって感知する。そういうことをするのをヒメが得意としているのである。

「まったく、よくやるわよね」

『……………』

リンは口元のマイクに話し掛ける。会話は自動的にヒメのイヤホンへと送信されるシステムとなっている。といっても、その呟きにヒメは答えない。

『なんでオイラが狩り出されるんすか？』

「当たり前でしょ。アンタは気にならないの？」

『気になるっす』

ヒロキは即答で答えた。

二人がバイクで移動する中、サトルはさらに遠く離れた後方を車で走る。サトルの車は隠密行動をするにはやや目立ちすぎる。だから、植物園に到着するまでは彼だけ離れての行動となる。

『しっかり掴まっている』

『はい』

サトルたちの会話をイヤホンが受信する。その言葉は少なからずリンを苛立たせる。

「何が掴まっている、よ！ 女の子相手だからってデレデレしちゃつて……！」

『男』

「どうせ男なんてそんなもんよねッ！」

リンは一気にアクセルを入れる。エンジンの回転数が一気に上がり、スピードが増加する。メーターは一般道であろうがそんなことお構いなしに100キロを更新していく。

『次の十字路を右折してください』

無機質なナビゲーションのボイスが響く。リン黙ってアクセルをふかし、ただただスピードを上げて走り続けた。

一般道の常識を守った速度でバイクが走る。

およそ時速50キロ。サトルは安全運転でバイクを走らせる。

「寒くないか？」

「大丈夫です！」

風に声が流される中、ユリは声を張り上げて答える。サトルはゆっくり頷くと、少しだけスピードを上げる。

流れるように鏡の壁面が飛び去っていく。それは傾斜に入ると同



時に少しまばらになるも、相変わらずビルの林を作り出す。

植物園の開園が10時からである。このペースで行けば、ほぼ開園と同時に中に入ることができる。

「サトルさん？」

彼の後方から消え去りそうな声が聞こえてくる。

サトルは後ろを向かず、返事だけをして答える。

「私、なんだかドキドキします」

「どうした？」

「私と同じ名前の花を見ることを想像すると、なんだか嬉しくなっちゃうんです」

「百合……か」

「綺麗な花なんでしょうね……」

鏡面に二人の姿が映し出される。ユリはサトルに寄り添っている自分の姿を見て少し赤面した。

「なんだか、こうしているとカップルみたいです」

「そうかもしれない。だが、見えるだけであって実際にそういう関係なわけではない」

サトルは小さく頷く。そして、ちらりとビルの壁を見る。

「重要なのは当事者の心持だ。実際に二人にその気がなければ、たとえどのように見えてもそれは事実ではない」

「ですよ……」

ユリはやや表情を曇らせる。だが、その様子はヘルメットに遮られて窺うことはできない。

「だが……」

サトルがやや口調を変える。

「俺はユリのことを好意的に思っただけ」

その言葉に含まれているのは恥ずかしさ、だろうか。聞きなれない感情に、ユリは思わず笑顔を浮かべた。

「……はい……」

イラついているのが彼女自身でもすぐにわかった。ついついナイフを指先で弄りたくなってしまいが、さすがに衆人觀衆の中でそんなことをするほど彼女の常識は欠けていない。

耳元から聞こえてくる、練乳イチゴミルク増し増しよりも甘ツたるい会話についてナイフに指がかかるが、なんとか彼女は自分自身を制しようとする。

「リン、抑えて」

「り、リン隊長、落ち着くつす……」

「サトルどいてそいつ殺せない……」

視界の端には仲良く並んで歩く二人の姿。たまたまサトルが彼女から見て手前に来ているため、直接的に殺害することが不可能だが、もし立ち位置が逆ならば投げナイフで確実に殺る自信が彼女にはあった。

『見てください！ 椰子の木ですよー！』

『よく物語では聞くがこんなものなのか』

二人は高い南洋の高木を見上げる。昔はそう珍しくない木であったが、東京では見る機会がめっきり減ってしまっている。

『こっちはハイビスカス！』

『綺麗なものだな……』

ハワイといえども真つ先に連想する花だろうか。ハワイのフラダンサーとよく似合う花である。

「何よ何よ南の島に旅行気分！？ ざけんじゃないわよ！」

「り、リン隊長！？」

「リン、ナイフ抜いてる」

思わず彼女もナイフを抜いてしまう。何人かの客が危険なものでも見るような目で二人の周りから引いていく。

「このイヤホン、ホントぶっ壊したいわ」

「後悔するだけ」

そう、ヒメが本を読みながらのんびり答える。

壊したら壊したで会話を聞くこともできず、余計イライラするだけである。いくら身体能力が常人離れしているといっても、50メートルも離れれば会話を聞き取ることはできない。

『あー！ 見てください見てください！ 椰子の実のジュースですよ！』

『飲んでみるか？』

『いいんですか！？』

イヤホンの向こう側からとても嬉しそうな声が伝わってくる。その言葉が彼女の耳を通り抜ける度に額に浮かぶ青筋の数が増えていく。「どっどっ」

本当にリンを落ち着かせる気があるのかわからないが、ヒメはまあまあとリンをなだめようとする。だが、彼女のイライラは積もっていくばかりであった。

『甘くて、なんだかとりけてしまいそうです……』

『ちょっと甘すぎるくらいだな』

『えー？ そうですか？』

『甘いものはそんなに好きじゃない』

『じゃあもらっちゃいますよー？』

そこでリンははっと息を飲む。

彼女の遙か50メートル前方で、ほんの数秒前までサトルがくわえていたストローをユリがくわえ、彼の椰子の実ジュースを飲み始めたのだった。

『お、おい……』

『ふふ、美味しいです！』

『ったく……』

しょうがないな、という様子でサトルは頭をかく。ユリは満面の笑みを浮かべながら二つの椰子の実ジュースを美味しくそうに味わっていた。

「あんのアマあああああああああ！ ぜっつっつたいブツ殺すー！」

リンの中で何かがぶつりと音を立てて切れた。バイクの二人乗りにしているのは許せた。二人つきりで植物園へ遊びに行くのもなんとか許せた。だが、間接キスとは一体何事だろうか。柵に足をかける彼女にヒメが手を伸ばす。

「リン、ストップ」

「隊長！ み、見つかるっす！」

「ざけんじゃないわよ、ざけんじゃないわよ！ マジ殺す、絶対殺す」

間に庭園があるにも関わらず、そこを乗り越えて行こうとしたリンを、ヒメはなんとか首根っこを掴んで止める。リンが恐ろしい形相で振り返りヒメを射貫いたが、彼女はそれにも動じずにリンを見つめる。

「ここは植物園」

「……ちっ！」

リンは大きく舌打ちを打つ。こんな公共の場所でナイフを振り回したりすればそれこそ除隊モノである。お金の蓄えがあるといってもこれから何十年を生きていくにはいくらなんでも足りなさ過ぎた。彼女はなんとか堪えると、再び双眼鏡のスコープを覗く。ズームで映し出す双眼鏡は、まさに幸せそうなカップルのといった二人の表情をリンの眼前に見せつける。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す……」

「リン、落ち着いて」

「ひ、ヒメちゃんが平気なのがなんでかわからないっす……」

触れるだけで殺されそうなぶっ殺すオーラ全開のリンをなだめようと、ヒメはなんとか声をかけるもまったく効果はないようだった。ヒメはため息をついてサトル達の観察に戻る。

サトル達は椰子の実ジュースを飲みながらベンチで休憩していた。二人の間に会話はなく、耳元からは騒がしい来園者の声と通信の際に生じるノイズだけが流れていた。

『なあ……』

ふと、そのとき耳元から雑音以外の声が聞こえてくる。

『ユリは楽しいか？』

『はい！ 楽しいですよ！』

『……………』

サトルはしばらくの間、静かに押し黙っていた。だが、やがて口を開いて言葉を紡ぎ出す。

『……………どういうところが楽しいんだ？』

『色々な人に会えること、色々な物を見ることができると、目に入るもの全てが初めてのものばかりで、それらを見ることができると自分が楽しいです！』

『……………そうか』

二人の間を再び静寂が支配する。

リンはやはり恐ろしい形相を浮かべたまま二人を凝視する。彼女にとってそんな些細な会話すら許せないようだ。

「え……………」

そのとき、ヒメが声を漏らす。その小さな声をリンは聞き漏らさない。

「どうしたの？」

普段表情を浮かべず、ましてや無駄口など一切口にしないような彼女が、このように声を上げ、そして表情を露にすることがあるだろうか。

ヒメは蒼白まではいかないものの、驚愕と悲しみが入り混じったような表情を浮かべていた。

何があったの、と彼女に声をかけようとして、その答えをリン自身も知ることとなる。

『俺には楽しい、という感情が一切わからないんだ』

「……………え？」

「……………は？」

『それは……………』

『俺が両親を失ったあの日から……………俺は感情がない、あるいはもの

「凄く希薄なんだ」

リンの表情にも驚愕が浮かぶ。彼は一体何を喋っているのだろうか。『だって、この前のゲームセンターのとき、凄く楽しそうにして…』

『付き合っただけなんだ。他のやつらが楽しそうにしているから、俺も楽しいフリをしているんだ』

「……嘘よ」

「……な、どういことっすか……？」

だが、彼の言葉は彼女らの心を蝕むように容赦なく続く。

『皆が笑うから俺も笑う。皆が悔しがるから俺も悔しそうな表情を浮かべる。皆が泣くから俺も悲しげな表情を浮かべる。皆が怒るから……俺も怒っているような表情を浮かべるんだ』

『だって、今日はずっと笑って……』

『ユリが笑っていたから、俺は笑っていたんだ』

「嘘よ……。私達と……私達と一緒に何かをすることがただ、私達のためにやっていただなんて……」

「……」

「オイラ達は……ただ付き合ってもらっていただけ……っすか？」  
ヒメはしばらくの間押し黙る。彼女は感情を表情にすることは少ないが、それでも喜怒哀楽を感じることはできる。ただ、それを表現することが苦手なのである。

だが、サトルはその感情すら感じることをできないという。それは、毎日を生きる上でどれだけ苦痛を伴うものなのだろうか。

人々は毎日を楽しむことができるから、日々を生きていくことができる。どんなに辛いことがあったとしても。

その楽しさを感じることができない彼は毎日をどのように感じているのだろうか。

そこまでヒメは考えて、一つの結論に至る。

彼には……辛いという感情もないのだろうか。

『俺の心に唯一感情があるとすれば……強い復讐心だけだろうか』

『……オートマータに対するでしょうか……?』

『俺の日常を奪ったあいつらを俺は許すことができない。だから俺は任務に打ち込むことができる。だから……毎日を生きて行ける』

『そんなの……辛すぎます』

『俺にはその辛いという感情もない』

リンが悲しげな表情を浮かべて口を動かす。

「じゃあ……サトルは最ツ高のお人好しね。私達のためなんか毎日を送り減らして……。本当なら、今すぐにでもオートマータをぶっ壊しに行きたいはずなのに……」

「……サトルは優しい。感情がないから……どれだけ優しくすればいいかわからない。だから、サトルは優しい」

「何よそれ……。じゃあ、サトルは私達が死んでも悲しくないの?」  
「た、隊長はきつと泣いてくれるっす!」

「でも、悲しくないんでしょ!? そんなのって……そんなのってあんまりよ……」

サトルの言葉が本当ならば、つまりはそういうことである。

仲間の内の誰かが死んでも、彼は涙をこぼさない。またはこぼしてもそれに意味はない。

いや、それだけではない。今まで彼と共に過ごしてきた毎日は、彼にとつて無駄な日々だったということだ。

「なんすか……じゃあ、オイラ達が皆で行ってたゲーセンも……隊長には暇潰しにしかならなかつたんすか?」

「暇潰しになつてればいい方よ! サトルにとつては面白くもなんともない無駄な時間だったのかもしれないのよ!」

二人は自分の思いを口にする。ヒメだけは黙つてうつむいていた。

「……ともかく、もう少し話を聞いていきましょう」

そう言つて、リンは耳元のイヤホンに集中する。  
しばらくの間サトル達は黙っていたが、やがてその沈黙にも耐え切れなくなつたのか、ユリは喋り始める。

『サトルさん、一つ聞いてもいいですか?』

『……………なんだ？』

ユリは何を尋ねようというのか。リン達は耳に意識を集中させる。

『サトルさんは……………少ししか感情がないっていいましたよね。ということは……………少しは楽しいとか、辛いとか、悲しいとかって感情も感じるんですよ！』

『……………少し、な』

リンたちはここで少し安堵する。サトルは完全に感情がないわけではない。少しは楽しいと感じてくれているのだ。

『だが、それも復讐心の前では無に等しい。俺がもつとも生きていると実感するときは……………戦っているときなんだ。けれども……………』

しばらくの間、サトルは黙りこむ。この後に何を言おうか考えているのか、それとも何か別の考え事をしているのか。ともかく、ユリは我慢できなくなって、続きを促す。

『けれども？』

『けれども……………お前と一緒にいるときは心が落ち着く』

「え……………？」

ぼかんとしたのは何もリンだけではない。ヒロキとヒメ、そしてユリもしばらくの間啞然とする。

『これが感情なのかわからない。でも、ユリが俺に話し掛けると心が温まる。お前が作ってくれた味噌汁みたいにな』

『心が……………温まる……………』

ユリはサトルの言葉をゆっくり反芻する。噛み締めるように、味わうようにゆっくりと口を動かす。

『嬉しいですけど……………味噌汁ってなんですか。あはは、もう少しいたとえがあると思います！』

そう言う彼女は思いつきり笑う。本当に嬉しそうに、楽しそうに声を上げて笑う。

サトルもそれにつられるように笑う。

「サトル隊長、楽しそうっすね」

「そうね……………でも、なんだかむかつくわ……………」



ヒロキは笑顔で、リンは額に青筋を浮かべてそう呟く。

ヒメだけは無表情のままサトル達二人の様子を見つめる。その表情から彼女が何を考えてるかはわからない。

「……………」

彼女は両目を瞑って微笑を浮かべる。少なくとも、そのことを悪く思っていないようだった。

「……………ヒメが笑ってる」

「笑ってるっすね……………」

「……………悪い？」

すぐに彼女はいつもの無表情に戻る。そのことをヒロキは残念そうに言う。

「ヒメちゃん、笑ってた方が可愛いっすよ？」

「ぶ、ヒメは口説いてもなびかないわよ」

「な、そんなつもりじゃないっす！」

ヒロキは拳を振り上げてヒメを追いかけまわす。そんな様子をやはり微笑を浮かべて見つめるヒメ。

「あははは！ あんたからかうと面白いわあ〜」

「そんな理由でからかわないで欲しいっす！」

ぶんぶん拳を振り回すヒロキ。それを軽快なステップで回避する。こんなことは彼女にとって造作もないことなのだろう。

「……………」

微笑の少女はゆっくりと振り返る。視線の先には二人の少年少女の姿があった。

『さ、次は百合畑ですよー！』

『行くとするか』

二人はゆっくりと立ち上がる。これ以上尾行の必要もないだろう。

ある一定以上の距離が離れるとイヤホンは役に立たなくなる。GPSのナビゲーションはバイクに搭載しているので、このまま姿を見失えば彼らがどこにいるか知る術はなくなる。二人のためにもその方がいいだろう。

そう判断した彼女は再びじゃれ合う二人を見る。

こちらは相変わらず楽しそうにじゃれている。どうやら、耳元のイヤホンから流れてくる声も二人の眼中にないようだ。

ヒメは退屈ではなく、そして不満でもない日常の一日を享受することに決める。植物に囲まれながら本を読むというのも悪くない提案である。

彼女はベンチに座り、腰のポーチから一冊の本を取り出した。

タイトルは『京も雨に打たれて』。もともとインターネットで掲載していた小説だったのだが、それが地味にヒットして書籍化したという、なかなかマイナーな小説である。内容は双子の姉妹とその幼馴染みの少年が巻き起こす猟期的恋愛を描いたものだ。

彼女はこうしたマイナー作品を読むのが大好きなのだ。こういった作品には、磨けば光るものが隠れていることがしばしばある。そんなダイヤモンドの原石を拾い集めるのが彼女の趣味なのだ。

イヤホンから流れる声へ徐々にノイズが混じる。そろそろイヤホンで受信できるギリギリの距離だ。

そこで彼女はイヤホンを外した。ノイズの代わりに風のそよぐ音と木々の葉がこすれ合う音が聞こえてきた。

今日はいいい天気である。快晴と呼ぶに相応しい、雲一つない青空がどこまでもどこまでも広がっていた。

「凄い……」

彼女の最初の一言目はそれだった。

思わず感嘆のため息が漏れる。そして、その光景を焼き付けようと目をより大きく開く。

一面に広がる白い花。視界全てを覆い尽くすその雪のような花畑は、彼女でもなくとも息を飲む美しさだった。

ここは植物園が誇る園内最大の百合畑である。どこまでも広がる白色の花畑は、思わず足を止めてしまふ美しさと、呼吸が止まるほど

の壮大さがあつた。

「なんだか、心臓がときどきします」

「本当に凄いな」

風が吹く。彼女の百合のように白い髪が百合の花と同じように揺れ動く。

ユリは思い切り大きく息を吸い込んだ。鼻孔を百合の甘い匂いがくすぐる。

「これを見ただけで満足です」

「そうだな」

サトルは短く答える。感情をほとんど感じない彼でも、この花畑がもつ壮大さを感じ取ることができた。その感覚を忘れないように、サトルはしっかりと握りしめる。

「こんなに気分が高揚するのは初めてです。なんだか、心地よさすら感じてしまいます」

「そうか」

その感覚を彼は知ることができなかったが、少なくとも想像することはできた。

心を昂ぶらせる高揚感。体を包む快感。

彼はそれをどこかで感じたような気がした。だが、それをどこで感じたかを思い出すことはできなかった。

「なんだか懐かしさすら覚えます。私は……どこかで百合畑を見たことがあるのかもしれませんが」

「きつと記憶を失う前だろう。何か思い出せそうか……？」

「……う」

そのとき、ユリが胸を押さえてしゃがみこむ。サトルは急いで駆け寄ると、彼女の隣にしゃがみ込む。

「どつした……？」

「胸が……ッ！」

苦痛に表情を歪める。そんな彼女を気遣うようにサトルはユリの体を支える。

「あ……」

彼女がそう呟いたとき、突然ユリの体から力が抜けた。サトルは慌ててユリの体をしっかりと抱きしめる。

「おい、ユリ！　しっかりしろ！　おい！」

しかし、彼女は一切返事をしなかった。彼は舌打ちを打つと彼女の体を抱え上げる。

「救護室は……救護室はどこだ！」

サトルは大急ぎで園のスタッフを探すために、走り始めた。

彼女は夢を見ていた。

真っ白な百合畑に、赤いしぶきが降りかかる。

自分が何かを振っているを感じる。その度に悲鳴が轟き、白い花が赤く染まる。

誰かが自分を狙っているのを感じた。だから、彼女は振り向いてそいつに向かってそれを振るった。

再び白い花が赤く染まる。こんなにも綺麗な花なのに、なぜ赤黒く染まってしまうのだろうか。

けれども、彼女はそれを振るい続ける。振るい続けなければ、彼女は殺されてしまう。

「ひ、ひいいッ！」

鬼でも見たような表情で、男が悲鳴を上げる。手には何かが詰まった注射器があった。

不快だったので、彼女はそれを振るった。まるで赤いトマトを壁に向かって投げつけたかのような跡がそこに描かれる。

「また汚れてしまった」

彼女は白と赤が入り混じったような色の花を両手で包み込む。そして、愛しいものを包み込むようにそっと胸に抱き寄せる。

けれども、白くてか細い花は折れてしまう。

折れてしまった花を彼女は見下ろす。それを元に戻す術はない。

彼女は目を瞑り、そしてそれを振った。

白い旋風が巻き起こり、花弁の嵐が吹き荒れる。

白い花が宙を舞い、彼女を包み込むように空を飛ぶ。

「うわあああああああああああ！」

一人の男が手に注射器を持って走り寄る。だが、彼女はその姿を目に映すこともなく、ただひたすら舞い続ける。

それは、花びらの舞い。美しい花弁を巻き散らしながら、踊るようにステップを踏み、腕を振って美しく舞う。

「ぐああッ！」

男は胸を押さえて大地を転がる。胸には深い傷が残され、深紅の心臓をさらけ出していた。

舞いにピリオドを打つように、彼女はそれを振り下す。それはまっすぐに心臓を打ち貫き、真っ赤なしぶきを飛散させる。

返り血をいくらか浴びる。真っ白な装束は血に濡れて赤く染まり、白い髪も赤い血をかぶって黒く染まっていた。

「……………」

彼女は黙って走る。一步走る度に足元の花が折れたが、もはや彼女はそれを気にしなかった。

ガラスの扉を破って抜けると、そこから先は無機質な床と壁が広がる暗い部屋だった。

とにかく、それが彼女は大嫌いだった。だから、全てを破壊することに決めた。

「まったく、どうするのよ！」

ようやくじゃれあいを終えたヒロキとリンはサトル達がいらないことに気付き、ヒメを問い詰めていた。

「知らない」

「イヤホンも使いものにならないし、これであたし達は完全に見失っちゃったのよ！　なんで見てなかったのよ！」

「それはリンも同じ」

「う……」

ヒメに反論されて、リンは言葉を詰まらせる。元はと言えば、リンが言い出しっぺなのである。他のメンバーは付き合わされただけで、リンが全ての状況に責任を取らなければならない。他人にその責任を問うなど、もつてのほかだ。

「もう、誰が悪いとかやめて、探し回った方がいいと思うっす」

「元はと言えばあんたがね……！」

「な、最初に始めたのはリン隊長っす……！」

二人はまた戦おうとするも、すぐに拳を下す。

「無駄ね」

「無駄っす……」

二人は大きなため息をつく。そして、これからどうするかを考え始めた。

「GPSはバイクに取り付けてあるし、あとはもうイヤホン着けて二人の会話をどこかで拾えないか歩き回るしかないわね……」

「……」

ヒメはことさら大きなため息をつく、本を腰のポーチにしまった。

「探す」

そして、すたすたとどこかへ歩き始める。

「ちょっと、一人で行かないでよ！ ほら、あんたもさっさと来なさい」

リンとヒロキは慌ててヒメの後を追いかけた。

「当てはあるの？」

「ない」

即答だった。リンは頭を抱えてうなり始める。

「手分けして探そう。私は百合畑」

そう言うなり、彼女は一人一人ごみへ溶け込んでいく。リンはやはり大きなため息をつく、ヒメの後を追うのを諦めた。

「何かあれば携帯に連絡がくるだろうし、まあいっか」

この状況では確かに手分けして探した方が効率がいい。リンはヒメの言葉にうんうんと頷くと、ヒロキの元へと歩み寄る。

「あたし、夏の花コーナー探すことにするわ。あんたも適当に探して、見つけたら携帯で連絡ちょうだい」

「手分けして探すんすか？」

「そう言っつてヒメが百合畑に行っちゃったのよ。まあ、そうした方が効率出るしそれでいいかなって思っつて」

「リン隊長がそう言うなら……」

二人はそこで別れる。リンは夏の花コーナーへ、ヒロキは当てもななくぶらぶらと彷徨うことに決めた。

冬の暖かな日差しが明るく三人を照らしていた。

人ごみの中を小さな少女が歩いていく。彼女が目指す先は、この植物園で特別に作られた百合畑のコーナーである。

なんでも、この植物園のオーナーが相当の百合好きで、いろいろな色の百合の花で百合畑を作ったそうである。

ヒメは何の当てもなく百合畑を選択したわけではない。他の二人が百合畑に来ないようにするために彼女は百合畑を選んだのだった。

サトルとユリの会話を注意深く聞いていたヒメは、二人の会話から二人がここに来ることを予想していたのである。

けれども、ヒメはイヤホンを耳にはめなかった。

二人の邪魔をしたくないと彼女は思っつていたのである。

適当なベンチを見つけた彼女はそこに腰を下す。

ヒメは大きく息を吸い込んだ。百合の香りが鼻孔いっぱい満たされ、彼女は落ち着いた気分になる。

ユリが好きな花だと言っつのも無理はないと思っつた。

もうF部隊も何にも関係なくて、彼女はただの一人の百合好きの少女ではないかとさえ思っつた。

それほどまでに甘い百合の香りは気持ちいを穏やかにし、いい気分に

させてくれた。

そこで彼女はポーチに入れていた一冊の小説を取り出す。

怜雨は思った。どうして私が彼を愛してはいけないのだろうか。姉が彼を愛しているからか？ 否、それは理由にならない。

私はこんなにも彼を愛しているにも関わらず、いつも姉ばかりがいい思いをしているではないか。

なら、私は姉を出し抜かなければならない。時には薬を、時にはナイフを、そうして姉を殺してでも奪い取らなければならない。

そこまで読んでヒメは思った。この少女もリンのように恋に苦しんでいるのだろうか。けれども、彼女のやり方では決して彼は振り向かないだろうとも思った。全てを終わらせたとき、彼女は現実を見て苦しむだろう。いや、もう彼女は永遠に苦しむこともなく、狂った愛情を彼に注ぎ続けるかもしれない。

愛の究極系はカニバリズムであると説く者がいるという。なるほど、身に取り入れてしまえば永遠に愛する者と共にいることができる。また、愛の究極系はネクロフィリアであるとするとする者もいる。確かに死者は生者を拒むことなく愛情を受け続けるだろう。

だが、こんな一方通行の愛を正常な恋愛と呼んでもいいのだろうか。この本に登場する怜雨という少女も同様に一方通行の愛を続けてしまっただけなのか。

……そして、リンはこのような凶行を犯してしまっただけか。下手をするとナイフを手にとりかねない彼女をいつもヒメははらはらしながら見ている。もちろん、彼女は本気なわけではないだろうが、仲間たちが半ばツッコミという形で彼女を止めている。だが、もし彼女が一人のとき、どうしようもない気持ち膨れ上がってしまったとき、彼女はどうするのだろうか。

そこまで考えて、ヒメは思考を止めることにする。

ヒメはリンのことを信じている。彼女は恋愛のために人を殺すよう



な人間ではない。幼いときに両親を亡くし、人を喪うことの辛さを知っている彼女だからこそ、絶対にしないと信じている。となれば、これ以上思考を続けるのは無意味だろう。

今は若干ユリが優位に立っている。けれども、まだまだリンが奪還することができる可能性は残されている。なぜなら、サトルは感情をほとんど感じないからだ。つまりそれは恋愛事に関してもかなり鈍いはずである。生半可なアピールでは彼の心を動かすことはできない。

「ヒメか……？」

どこかで聞き覚えのある声が彼女の名を呼ぶ。それが自分へと向けられているまで気付くまでに数秒を要した。

「何故お前がここに……？」

ヒメはゆっくりと視線を前へと向ける。そこにはユリを抱き抱えたサトルが立っていた。

「ユリ、何があつたの？」

「そうだユリだ！ 突然倒れてしまったんだ！ どこか救護室を知らないか！？」

いつもの様子からは想像することができない彼の慌てっぷりにヒメは戸惑う。かつて彼がここまで慌てたことがあつただろうか。数年前に、任務で潜伏している小屋の周囲をオートマータに囲まれてしまったときさえ、彼は慌てず冷静に指示を下した。そんな彼が慌てているということにヒメは異常な事態が発生していることに気付く。

「見せて」

ヒメは彼の質問には答えず、ユリの顔色を窺い、彼女の額に手を当てる。

「貧血を起こしている。それに、酷い汗」

「さつきからつわごとばかり言っていて、意識が戻らないんだ！

一体どうしたんだ！？」

「夢にうなされている……？」

ヒメはポーチからいくつかの薬品と注射器を取り出し、数種類の液体を混合させた後、注射器で吸い上げる。

「押さえていて」

サトルはユリを一度ベンチへ寝かせると、動かないようにしっかりと押さえる。

注射器のトリガーを引き、一気に薬液を流し込む。ぽつりと注射の痕が膨れ上がった。

「造血剤と安眠剤、鎮静剤を注射した。貧血と夢にうなされているだけならこれでよくなるはず」

彼女の言う通り、すぐに表情が和らぎ、汗もいくらか引いていた。荒かった呼吸も元に戻りつつある。

「救護室はこっち。付いて来て」

そう言っただけでヒメは立ち上がると、救護室のある方へと歩き始めた。

「あ……」

ユリはゆっくりと目を開いた。

彼女の視界に一番に飛び込んできたのは白い天井だった。

次に、心配そうな表情を浮かべるサトルの姿。そして、その後ろには様々な表情を浮かべるヒロキとリン、ヒメの姿があった。

「ユリちゃん、目を覚ましたみたいっす」

一番にユリが目を覚ましたことに気付いたヒロキが声を上げる。その声を聞いて、ずっとうつむいて座っていたサトルが顔を上げ、次にリンとヒメがユリを見つめた。

「大丈夫か？」

サトルは心配そうにユリに尋ねる。

「あ、はい、大丈夫ですよ！」

彼女は元気そうに言う。ちょうどそのとき、救護室の当直の医師が現れる。

「彼女の処置が適切だったみたいね。まさかこんな小さな女子が医師

免許を持つてるなんて、凄い世の中になったものだわ」

彼女、というののもちろんヒメのことである。ヒメは特に照れるようなこともなく一度だけ頷いた。

「しばらくは安静にしていた方がいいわね。明日には元気に動けると思うわ」

「ありがとうございます」

サトルはゆっくりと頭を下げる。

「あはは、どういたしまして」

そう言つて医師は部屋を後にする。もう大丈夫だということだろう。

「あの……私、どうしちゃったんですか……？」

「いきなり倒れた」

ヒメが短く告げる。それを聞いてしばらくの間うつむいていたが、やがて不思議そうな表情を浮かべて四人を見回す。

「あれ……そういうえば、皆さんなんでここに……？」

「う……それは……その……」

「リンの提案で皆で二人を見守ることになった」

またしても簡潔にヒメが述べる。

「なんでお前たちが見守る必要があるんだ」

サトルも三人に尋ねた。それを聞いてリンが怒り始める。

「別になんでもいいじゃない！ それに、ヒメがいたから大事に至らなかったんだから、むしろ感謝しなさいよ！」

「む……それはそうだが……」

「あはは、別にいいですよ。皆さんがいてくれたから、私はここでこうして笑っていられるんですよ。それならそれでいいじゃないですか」

「そうよそうよ！」

リンがユリに同意する。二人の意見がぴったりと重なり、サトルは黙りこむ。

「なんとか自分が尾行してたってことから話を逸らそうと必死っすね」

「……腕の見せどころ」

ヒロキとヒメが囁きあう。幸い、その会話は三人の耳には届いていないようだった。

「要するにお前たち、尾行していたんだろ？」

「う、うるさいわね。そうよ、尾行してたのよ。悪い？」

「当たり前だ」

すこん、とサトルのチョップが額に命中する。突然のことだったためか、リンは反応が遅れてよけることができなかった。

「あ痛……殴ることないじゃない」

「ユリに免じてチョップ一発で許してやるんだ。本当だったら三日ほど宙吊りにしてやりたいところだ」

ヒロキはヒメの耳元に口を寄せて囁く。

「隊長がそんなこと言うなんて初めてっす。何かあったんすかね…

…?」

「……」

それに対してヒメは答えない。

だが、ヒメにはそれが何故なのかわかっていた。

ユリが倒れたときの慌てぶり、そして彼女が気を失っている間付きつきりであったこと、何よりも、彼女が目覚めたときの安堵……これらを統合すると、間違いなく彼は彼女に強い好意を持っているというのである。それも、仲間であるリンやヒロキ、そしてヒメに対するそれとは違った意思。もっとも、信頼しているからこそ心配しないという可能性もあるが……。

目の前で話をしている自分の友人を見て思う。もう、彼女に勝ち目はないのかもしれない。ヒメはそう思った。

ユリは笑いながらサトルとリンのやりとりを見ている。リンの秘めた思い、そしてサトルの胸中を知ることもなく、ただ笑って二人のことを見つめていた。

## 第五話 G o i n g (後書き)

今回の任務は植物から薬品を作り出す研究機関の片付けだった。オートマータに襲撃され、調査の済んだ施設から荷物を運び出し、別の研究所へと移動させる任務である。

早い話がいつもと同じ、フォールスミッションだ。

だが、今回の任未はいつもと違った。

サトルは疑問を抱いていた。

名簿一覧には作戦に参加する隊員の名前が書き連ねてある。

しかし、そこにユリの名前はなかった。

「今度の任務、サトルさん達だけなんですよね」

「そうらしいな」

廊下ですれ違う二人。サトルに対するユリの表情は悲しそうだ。

「任務、頑張ってくださいね」

「大丈夫、今回もフォールスミッションだ。大したことはない」

サトルは表情を変えることなく答える。

そして立ち去っていく彼の後姿を見ながら 彼女は言った。

「サトルさんのこと、好きなんです！ どうしようもなく……好き

なんです！」

次話、第六話 T u r n i n g

## 第六話 T u r n i n g

### 第六話

今回の任務は植物から薬品を作り出す研究機関の片付けだった。司令書にはオートマータの襲撃にあった研究所の薬品や植物を保護し、別の研究所へと運び出す作業だと書かれてあった。名簿一覧には作戦に参加する隊員の名前が書き連ねてある。しかし、そこにユリの名前はなかった。

サトルは今回の人選に疑問を抱いていた。

いつもならば、こういったフォールスミッションには優先的に後援部隊の者が選ばれる。

チームや チームなどの実戦部隊の者は人数が必要なときのみ動員され、その全員が参加することは少ない。

それなのにも関わらず、今回のミッションは実戦部隊全員と一部を除いた後援部隊の者が参加者として選抜されている。実戦やその訓練ならば、後援部隊の者は任務に抜擢されない。よって、今回の任務は実戦を想定した訓練などではないということである。

サトルは考えながら通路を歩く。その疑問をできることならミサトに尋ねたいところであったが、彼女も暇人ではない。簡単に話ばかりなまいだらう。

「あ、サトルさん」

サトルは一時思考を中断する。

彼の前には微笑みながら手を振るユリの姿があった。

「ユリか」

「今度の任務、サトルさん達だけなんですよね」

「そうらしいな」

ユリは少しの間黙りこむが、やがて表情を輝かせて言った。

「任務、頑張ってくださいね」

「大丈夫、今回もフォールスミッションだ。大したことはない」

「そうでしたね。えへへ」

ユリは満面の笑みを浮かべた。

サトルはふうと息を吐いて、ユリの顔を見つめる。

「それじゃあな」

「はい」

サトルは一度ユリに手を振ってからその場を後にする。

「あの、サトルさん！」

去りかけた背中にユリは勇気を持って話し掛ける。

彼はゆっくりと振り返ると、何事かと疑問を浮かべた表情で立っていた。

「あの……その……私……」

彼女はしばらくの間、言うべきか言つまいか悩んでいたが、やがて意思を固めたようで、力強い表情を浮かべてサトルの目を見つめる。

「サトルさんのこと、好きなんです！ どうしようもなく……好きなんです！ だからその、私のことをどう思っているか聞かせてほしいんです！」

突然の告白にサトルは目を丸くして驚いていたが、やがて少し頬を赤らめて答えた。

「俺も……その、お前のことは好意的に思っている。恋愛感情があるかと言われれば……間違っていない、とも思う。それだけ……だ」

「ほ、ほんとですか!？」

ユリはぱあっと表情を輝かせる。そしてサトルに駆け寄り、彼の腕に自分の腕を回した。

「な……!」

「えへへ……」

ユリは悪戯っぽく笑うと、サトルのことを見上げた。

「だ、抱きつくんじゃない！」

「えへへ、ごめんなさい」

腕を離れたが、彼女の表情は本当に嬉しそうだった。

「俺はともかく行くぞ。するべきことがあるんでな」

そう言っただけはきびきびと歩き始める。いつも以上に堅い歩き方が彼女にはおかしかった。

ユリはまっすぐ通路を歩いていくサトルを見送りながらにっこりと笑った。

「どーしたの、ユリちゃん」

「きゃ！ ど、どこから出てきたんですか!？」

彼女の背後には二人の少女が立っていた。高山ノブヨと清水ユウコである。

「まあまあ、そこんところは気にしないの」

「それより、なんだか嬉しそうね」

先ほどまでユリが見つめていた方向を二人は見た。その先には一人の少年の後ろ姿。

「ユリちゃん見事な告白っぷりね」

「ほんと勇ましかったわ」

「な、見てたんですか!？」

ユリは頬を真っ赤に染めてうつむいた。そんな彼女を茶化すように二人は笑う。

「あー、羨しいわ。私、恋愛なんかこの歳まで経験したことないもん」

「青春よねー」

「あう……えっと……その……」

ずいっとノブヨが身を乗り出す。

「でも油断しちゃだめよ！」

「まあ、カタブツの隊長を落としたっていうテクは認めるわ……」。



でも、油断してたら他に取られるわよ」

「たとえばリン隊長とかね」

「え、ええ!？」

ユウコが考え込むように腕を組む。

「しかも、今度の任務は私達、皆参加しないしね……」

「取られちゃうかもね……」

「ちょ、ちょっと待ってください!？」

ユリがやや慌てたように声を上げる。それを聞いて、二人はニヤリと笑った。

「やっぱり慌てちゃうんだ?」

「青春ね、いいわね」

二人はきやあきやあとわめきながら盛り上がる。ユリは両頬を紅色に染めていた。

「そ・こ・で! 私にいい考えがあるのよ」

「い、いい考え?」

なんとか興味のないそぶりを見せながら、それでいて聞きたくてしようがない雰囲気はユリから伝わってくる。それを感じながら二人は本当に楽しそうな表情を浮かべる。

「それはね……」

三人は場所を変えて集まっていた。

普段は少年少女で賑わう食堂も、三時頃となればデザートに舌鼓を打ちにやってくる一部の女子を除いて閑散としていた。

そして、三人もデザートを楽しみながらじっくりと作戦を練る。

「そもそも、ユリちゃんにはアタック力がないのよ。もっとこっぴ押し押しモードで行かなきゃいけないのよ」

「それでもって、最後はイケイケモードで決めるって感じね」

「全然わかりません」

ノブヨとユウコはがっくりとして机に額を打ちつける。

ヨーグルトゼリーを口に運びながらノブヨが説明する。

「いい？ あなたは押しが弱い。さっきはともよかったけど、いつもあんな感じでいかないとダメ」

「そうよね。なんていうか、受動的って言うか、受け身体制なのよね」

「隊長みたいにお堅い人にはガツン！ ガツンっていかなきゃいけないのよ」

ユウコはパイナップルナタデココゼリーを食べながらスプーンをびしりと突き付ける。

「そう。もう、これくらい大胆にいつちゃっていいと思うわよ」

そう言っつて、ユリの白桃ゼリーから、二個しかない白桃を奪い取る。

「ああっ！ 桃が！」

「うん、美味しいわ」

むしゃむしゃと美味しそうに白桃食べるユウコ。

「だから、うかうかしてるところなるのよ」

とっつて、ノブヨも白桃を奪い取る。

「わ、わたしの桃が……」

「今が隊長だったらどうする？ これだけ悲しい思いをしたのだから、もう誰にも取られたくないわよね？」

ユリはこくこくと頷く。それほどまでに桃を奪い取られたのが悲しかったようだ。

もう残りゼリーだけになってしまった白桃ゼリーを食べながら二人の話の聞く。

「大事なのは最初にも言っただけど押しね。押しして押しして押しまくる！ 常に隊長のハートをキャッチし続けなきゃいけないのよ」

「一瞬でも離しちゃダメよ！ そしたら最後、さっきの桃と同じ末路を辿るわよ」

ユリはなくなつてしまった桃を思うと、悲しそうな表情を浮かべながらうんうんと頷く。

「特にリン隊長は攻撃力が高いからね……」

「幸い、リン隊長に対しては友達としての馴染みがあるから恋愛感情に引き込みにくいっていうアドバンテージがあるわ」

「そこは特に生かすべき部位よ！ 確かにアドバンテージではあるけれど、最後の砦とも言えるわね」

「つまり、ここを克服されたらアウトなのよ」

「確実にかつさらわれるわね」

そこでユリはきつとした表情で桃ゼリーをにらむ。

「あなたがするべきことはわかったわね？」

「はい！」

そして任務当日となった。

サトルは研究所を見上げながら呟いた。

「普通の研究所……だな」

オートマータの襲撃によってかなり損壊してはいたが、その外見は普通の研究所と変わりがなかった。

門入り口には、国立植物薬品研究センターと書かれた看板が張り付けられている。

この研究所は、植物から有用な成分を取り出し、薬品を製造する研究所である。研究所内には多数の花畑があり、そこで特殊な植物を生育しているといわれている。

傷薬や病気を治す抗生物質、殺虫剤、防腐剤のような日常生活に用いられるような薬品から、毒薬、腐敗剤といった戦争に用いられる薬品まで実に様々な薬品を製造している。

「案外見た目は普通ね」

「でも、中にはすごいお花畑があるんでしょ！ 早く見たいわね」

ね、ユリちゃん」

その名前に反応し、サトルは即座に振り返る。

「お花畑……楽しみです」

「楽しみです、じゃない」

サトルはその少女達の方へと歩み寄る。

「どうして任務から外れているはずのお前達がここにいる」

「あ……サトル隊長……」

「こんなに早く見つかるとはね……」

三人は気まずそうに視線を泳がせる。

「あ……えーと、それは……」

「なんていうか……その……」

「わ、わたしが無理を言ったんです!」

ユリが大きな声でサトルに言った。

「ゆ、ユリちゃん!？」

「ちが、それは私達が……」

「いいえ、私が今回任務に参加する人に、代わってもらおうようお願いしたんです」

サトルは苦々しい表情を浮かべる。そんなサトルをユリはじーっと見つめていた。

やがてサトルは何かを思ったのか、大きなため息をついた。

「来てしまったものは仕方がない。ただし、俺の監視の元で任務に就くように」

ノブヨとユウコはにっこり笑って顔を見合わせる。ユリもほっとしたような表情を浮かべた。

「ありがとうございます!」

サトルはこの後の任務を思い、気が重くなるのを感じながら、研究所の方へと足を進めた。

ジュニアチームの面々が研究所内に入ってまず目にしたのは、いきなり眼前に広がる花畑だった。可憐にして、華美。様々な形の花々が規則正しく、どこまでも伸びている。

色とりどりの花々が美しい花弁を開かせて、少年少女達を出迎えた。

「綺麗……」

「凄い……」

ところどころオートマータに踏みつぶされていたが、それでも花々は力強く咲き誇っていた。

ユリ達も嘆息を漏らしながら、花畑に見惚れていた。

「さあ、作業に入れ！」

サトルは大きな声で命令を出す。それで皆気が付いたのか、少しずつ研究所のあちこちへと散っていった。

「さあ、俺達も行くぞ」

「はい」

四人は研究所の奥へと進んでいく。

「私達は何をすればいいんですか？」

ユウコがサトルへと尋ねた。サトルは振り返ることもなく答える。

「地下の特殊植物棟の植物を外へ運び出す。ここでは特別な植物を扱っているそうだ。慎重に、必ず手袋を付けて扱うこと」

「了解！」

階段を下に降りると、いくつかの道に分かれていた。

頭上には行き先を案内する看板がかかっている。サトルはそのいくつかの道の中から特殊植物棟へと向かう通路の方へと進んでいった。

同研究所、某研究室。

冷たい暗室には所狭しと本が並んでいる。

どれもこれも生物、特に植物のことを扱っている本ばかりが陳列されていた。

その中から一冊を少女は抜き取ると、ぱらぱらとページをめくる。もう一人の少女は、共に居る少年と話をしながらとても退屈そうにソファへ寝転がる。

「ねえあんた。こんなとこで油売っていいの？」

「問題ないっす。そういうリン隊長も寝てていいんすか？」

「問題ないわよ。ねえヒメ」

「……………」

ヒメは一人本のページをめくりながら、頷くこともなく本を読み続ける。

「何の本を読んでもるんすか？」

「…………… 生体部品」

この研究所らしからぬ本に興味を引かれたのか、彼女はただ本を読み進める。

「ねえヒメ。なんでさっきユリがいたのかしら」

「……………」

「大方こつそり付いてきたって感じじゃないっすか？ まあフォールスミツションだから問題ないと思うっす」

「アンタの意見は聞いてないわよ」

ぴしゃりとリンは指をさす。彼女のあまりの冷たさにヒロキは嘆く。

「ヒドイっす……………」

「……………」

相変わらず二人に構うこともなく、ヒメはページをめくる手を止めることはない。

リンはつまらなそうにごろごろと体制を変えながら二人に話し掛ける。

「ねえヒロキ。あんたんとこの部隊は頭がいなくて大丈夫なの？」

「問題ないっす。ウチの部隊は優秀で、何かあったときはトランシーバーで指示を出すだけっすから」

「まあウチも似たような感じね。だからあたし達はこうしてられるけど」

どこから持ってきたのか、リンはぼりぼりと煎餅をかじる。ヒロキは手を出したが、ぴしゃりとリンに叩かれ涙を浮かべる。

「ヒメちゃん、リン隊長にがつりと言ってほしいっす！ 任務中に煎餅食うとは何事かって！」

「…………… めっ」

そう、一言だけ言って再び本のページをめくった。

そんな言葉などなかったかのように、相変わらずリンはぼりぼりと煎餅をかじり続ける。

ヒロキは特大のため息をついて、リンから離れ、ヒメの読んでいる本を覗き見た。

しかし、ヒメは座る向きを変えてヒロキから見えない位置へと移動する。

二人の少女から邪険にされて、ヒロキは泣く泣く適当な本を手にとる。

彼が取った本は植物の成分に関する本だった。もつとも、彼は意識的にその本を取ろうと思ったわけではない。ただそこにあつたから手に取っただけである。

ぺらぺらと適当にページをめくり、意味がわからずともとりあえず読む。

しばらくの間三人は黙りこくる。

リンは一人煎餅を、ヒメとサトルは本を、ただ三人は自分のしたいことをして一人過ごす。

だがその均衡も長くは保たず、真つ先にサトルが悲鳴を上げる。

「な、なんすか……セルロースとか、アドレニンとか、ペクチンとか……もう意味不明っすよ……」

「アドレニン……」

ヒメは何冊かの本を小脇に抱えると、サトルが呼んでいた本を奪い取る。

「な、なんすか!？」

彼女は黙って本を斜め読みする。やがて目当てのページを見つけ出したのか、その本を開いてサトルにもわかるように説明する。

「最近発見された物質でアドレナリン分泌を促進する物質。副腎髄質からのアドレナリン放出量を促進する物質で、交感神経が刺激されることよつて分泌される。アドレナリンは強心剤としても使われるホルモンで、グリコーゲンの分解を増進して血糖を上げ、脂肪組織の脂肪を分解、酸素消費を高める。すなわち、運動している状

態に近付けるホルモン」

「ちよつとどうしたのよ」

リンは何事かと二人の方へと歩み寄る。

次に脇に抱えていた生体部品の本を抜き出すと、それを開いて二人に見せる。

「アドレナリンの大量需給によつて“本来の能力”を發揮する人工筋肉がある。ある一定の閾値を超えるアドレナリンを検出すると、俊発力、持久力などが一気に向上し、人間では再現不可能なほどの動きを見せる。これがあるのはこの本でわかった。でも、通常のアドレナリン分泌量じゃ絶対に機能しないから考えていなかった。でも、アドレニンならば……」

「ちよつと、そのアドレニンとかいうのがどうしたのよ!」

「もともとはオートマトンに使われる生体部品。オートマトンは正確には人間じゃないから、アドレナリンを過剰に分泌させても大きな問題はない。けれども、この部品が動くだけのアドレナリンを分泌させれば、人間の場合は中毒症状を起こす。けれども、F部隊の命を弄ぶ研究、すなわち、生きた人間をベースに生体部品を大量に使用する改造人間を作り出す研究だとしたら、オートマトンにも対抗できる最強の兵士を作り出すことが可能……」

「ちよつと待つて、アドレナリンってたくさん分泌したらヤバいんじゃないの!?!」

ヒメはしばらくうつむいていたが、やがて首を横に振る。

「もし、全身のほとんどの部品を取り換えるほど生体部品と交換していれば、アドレナリンの影響は少ない……」

「じゃあなに!?! あのユリがその兵士だって言うの!?!」

「……さつき、生体部品の本にF部隊のことが書いてあった。つまり、F部隊の研究はほぼ間違いなく生体部品。そして、ここは植物を研究する研究所。そして、“ユリを含む”後援部隊の一部が外されていたということは……」

「何よ……ビンゴだつていうの?」



「な、なんすか!? F部隊とか、最強の戦士って!?!」  
ヒロキだけが理解できないというように慌てふためく。  
そんなことはお構いなしにリンとヒメは駆け出していた。両手には  
各々の武器を持ち、もはやその目は戦場のそれであった。

真っ赤に濡れる、元は白かった百合の花畑。

そして、少女の腕の先で震えるノブヨ。その胸は腕に貫かれ、鮮血  
に染まっていた。

「あ……な、んで?」

コウコは声を出すこともできず、変わり果てた二人の友人を見なが  
らうずくまっていた。

「ゆ、ゆり、ちゃ……ッ」

少年は腰に携えた拳銃を抜きつつも、引き金を引くことができない  
でいた。

そう……白い可憐な花が咲き乱れるそこは地獄と化していた。

「な……なんでこんなことが……」

サトルは戦場で初めて震えていた。標準が定まらず、それどころか  
力が抜けて銃を構えることすらできなかつた。

「はあー……はあー……」

少女は吐息を荒くして、腕の先に力を込める。

「あ……」

その瞬間、ノブヨの体が震える。一瞬だけ細かく鳴動すると、やが  
て全身から力が抜けていく。彼女の目から、光が消えていく。

「嘘……嘘でしょ……」

少女は思い切り腕を振るって、腕に突き刺さっていたノブヨの体を  
地面に叩きつける。白い花びらが宙を舞う。彼女の体はごろごろと  
転がり、やがてコウコの目の前で静止する。

「いや……いやあ……」

コウコを見つめる彼女の瞳は生を感じない、言わば死んだ目だった。



前に現れる。

その腕には一本の赤い線が引かれていた。おそらく弾がかすったのだろう。

少女は無言で腕を伸ばす。だが、サトルもさすがに二度見た攻撃を受けるようなことはなかった。

素早く銃をガードに回し、腕を防ぐ。だが、次の瞬間目にも止まらぬほどの速度で左手の拳が襲いかかる。

防御を許さぬほどの速度で飛翔したその一撃は確実に鳩尾に突き刺さる。

「うっ！」

わずかの痛みも感じさせぬほどの、優しくて暴力的な力が彼の意識を拭い去った。

最後に彼が覚えていたのは、彼のことを見下ろす、冷たくて野生的な瞳の光だった。

彼は夢を見ていた。

彼の前には二人の白髪の少女が立っていた。

その容姿は同じようで、瞳に宿る輝きが違う少女だった。

一人は可愛らしく笑い、もう一人は寒気がするほどの恐ろしい笑顔を浮かべる。

『ねえサトルさん！ サトルさんはわたしのことを好きですか？』

彼はその言葉を聞いて答える。

「お、お前のことを好意的に見る、と言ったからにはそう貫く。違うか？」

もう一人の少女が血も凍るような声で答える。

『だって、“わたし”を見てしまったから。友人を殺し、あなたをも殺そうとする“わたし”を目に焼き付けてしまったから！』

『あれは……わたしじゃないですよ。ほら、私はこんなにも優しく、気が穏やかで、虫一匹殺せないような女の子なんですよ？』

一人の少女はにっこりと微笑む。その笑いは見るものに安らぎを与え、思わず頬が緩むような優しい笑顔だった。

「そうだ、ユリに人を、それも友人を殺すことができるはずがない」  
「違うッ！」

怒気を帯びた声が響き渡る。それは彼の精神をも揺るがし、一人の少女の姿を霞ませる。

「わたしは殺人鬼だ！ 仲間をいとも簡単に手を掛け、そして愛する人をも殺す鬼だ！」

「そんなことないです！ だって、わたしはこんなにもサトルさんのことを考えています！ 毎朝のお味噌汁だって、心を込めて作っていますし、お弁当にだって愛情をこめて作ります！ ちょっと恥ずかしいけどケチャップでハートマークも書きますし……！」

「そんなものは嘘だ幻想だまやかしだッ！ 表面だけを取り繕って己のうちに潜む悪鬼を隠し、醜い偽りの外見だけのお前なんて、わたしは絶対に認めない！」

二人の少女は火花を散らしながら憎々しげににらみ合う。

「ユリ……お前は……どっちが本当のお前なんだ？」

「わたしです！」

「わたしだ！」

二人のオーラがぶつかり合い、彼は吹き飛ばされそうになるのを必死に堪える。

「どっちが……どっちがお前なんだァッ！」

「サトルうッ！」

一人の少女の痛切な声が響く。

彼はゆっくりと目を開いた。

その目に飛び込んできたのは、真っ白な壁だった。

何本ものコードやケーブルが彼の体の上を這いずり回り、右へ左へ横行していた。

「さ……サトル……？」

ガラスの窓を隔てた外から一人の少女が呼び掛ける。

「お、起きたの！？ 意識が戻ったの！？」

リンはガラス窓に張り付く。その声を聞いて隣に座っていたヒロキとヒメも立ち上がった。

「た、隊長！」

「サトル……」

「ねえ、返事をしてよ！ ねえ！」

サトルはぼんやりとしながらあたりの風景を見渡す。その中で見知った人々を見つけ、ゆつくり微笑んだ。

「よう、お前達」

その声を聞いて、リンの表情が一気に崩れる。

「サトル……つえぐ……心配……じんだからあ……」

崩れ落ちるリンの体をヒメが支える。そして、ハンカチで彼女の涙を拭ってやった。

「泣くなよ、リン」

「うるざいっ！ どんだけ……どんだけじんばいじだど思ってるのよお……」

「……そういえば、ユリはどうした？ ここには……いないのか？  
そうサトルは尋ねるが、誰一人として答える者はなかった。

その様子にサトルは不信感を抱く。

「それ以前に、俺はどうしてここに……」

そこまで呟いて、彼は意識を失う前の記憶を思い出した。

真っ赤な血飛沫、赤く濡れた白い百合、死んだ二人の部下、そして自らをも殺そうとした最愛の人。

「ユリは……ユリはどうした。ユリに何があった。ユリはどうなった！ 誰か答える！」

しかし、その怒声を聞いても答える者は誰一人としていなかった。

「誰か答える……ちくしょう……答えて……くれよ……」

やがて声は覇気をなくし、意気消沈していく。

最後には、枯れた花のように力の抜けたサトルと、植物の様に黙し続ける三人だけが病院の一角にあった。

## 第六話 T u r n i n g (後書き)

居所も恋人も失ったサトル。

けれども、彼にはまだ三人の仲間がいた。

ユリがあんな風になってしまった理由を聞いて、サトルは決心する。

「ヒメ、もう……お前のことだから調べてあるんだろう。ユリの…

…正体を」

ヒメはゆっくりと口を開いた。

彼女は語る。身の毛もよだつような恐ろしい、日本軍の極秘研究を

……。

次話、第七話 H e a l i n g

## 第七話 Healing

### 第七話

彼の頭の中をぐるぐると二つの思いが渦巻いていた。

ユリを信じるべきか、または否か……。

もはや好き嫌いでどうにかすることができない状況となっていた。

優しい彼女が本当の彼女なのか、それとも残虐な彼女が本当の彼女なのか、彼にも判断がつかなかった。

後から彼が聞いた話によると、あの日あの場所で生き残ったのは彼ら四人だけだという。

他の部隊員全員があこの彼女に殺され、命を落としたという。

リン達三人が生き残ったのも、ヒメの能力で彼女に会わないように逃げ続けたからであって、直接遭遇して生き残ったのはサトルだけであった。

サトルも、左右の臓器が反転しているという珍しい体質のおかげで心臓を握り潰されなかったというだけで、本来ならば彼もここにいることができないであろう。

一週間が経過しようとしていた。

サトルの傷は酷い傷ではあるものの、最先端医療の手にかかり、徐々に傷は癒えつつあった。ほぼ完治したといっても過言ではないであろう。

当初は集中治療室に入っていたサトルだったが、今では一般病棟に移っている。

「サトル、大丈夫？」

「ああ、もう大分よくなった」

毎日のようにリン達は見舞いに来ていた。



事件によって、ジュニアチームの主力部隊が壊滅したため事実上ジュニアチームは解散となった。彼らはすることもなく、毎日のようにサトルの病室を訪れていた。

しかし、彼らの間に流れる空気は重い。いつものように気軽に雑談をすることもできず、各々の方法で時間を潰していた。

「ヒメ」

突然、サトルはヒメの名を呼ぶ。ヒメはゆっくりと顔を上げ、黙ってサトルを見つめる。

「もう……お前のことだから調べてあるんだろう。ユリの……正体を」

彼女はしばらくの間黙っていたが、やがてこくりと頷いた。

サトルはためらっていた。一週間もの間、時間があったにもかかわらず、ヒメに尋ねることができなかったのは、ユリの正体を知ってしまうことで自分の中のユリのイメージが崩れてしまうことを恐れていたからだだった。

だが、彼は考える。いつまでも逃げ続けていいのだろうか、と知りたくない事実から顔を背け、己の作り上げた虚像のみを見つめ続けているだけで、いいのだろうか。一度は彼の命を奪おうとしたとはいえ、最愛の人である。そう簡単には諦めることはできなかった。

「ヒメ、教えてくれ。ユリの正体、そしてあんな事件が起きてしまった理由を……」

ヒメはしばらくの間黙っていたが、やがて語り始める。

「彼女は非正規戦闘部隊、ジュニアチームF部隊の被験体ナンバー Lily-2316」

「被験体……？」

「日本軍は表向きに専守防衛を主眼とした軍隊を整備していた裏側で、拠点攻撃のための攻撃部隊を実験的に整備していた」

「ちよつと待て、実験的にはどういうことだ!？」

「言葉の通り、人体実験をベースとした改造兵士の“生産”、及び

兵器の開発を行っていたということ」

サトルは目の前が真っ暗になるのを感じた。

自分たちが兵士として養成される裏側で、兵士が人工的に“生産”されていたことが驚きだった。

ヒメの言葉はなおも続く。

「私たちと同じ戦災孤児から選ばれた被験者が本人の望む、望まぬに関らず強制的に生体部品の移植手術を受けさせられて、兵士にされる」

「本人の意思に関係ないのならば、兵士として運用することができないんじゃないのか!？」

「強制的に戦わせるシステム、それが日本軍が極秘裏に開発していたフラワーステム」

「フラワーステム……?」

「特殊な花の花粉をレセプターに受容させることによって化学物質を分泌し、体の中のホルモン量を強制的に調整、そして人間の快感、特に物を破壊したり、生き物を殺したときの快感に関する神経を鋭敏にし、人間の破壊本能を活性化するシステム、それがフラワーステム。ユリの場合は特殊な百合の花粉。だから、ユリは無意識的に百合に対して好意を抱いていた」

「名前とは裏腹になんていう恐ろしいシステムっすか……」

ヒロキ達も話しに聞き入る。

「理性面も抑える効果がある。まさに、狂戦士を作り出すためのシステム」

感情を表に出さないヒメも、恐ろしいというような様子で語った。

「ユリは……そんなものに苦しめられていたというのか……?」

サトルは思い切りベッドサイドのテーブルに拳を叩きつける。その表情は苦痛に満ちていた。

彼には彼女のことが自分のことのように思えていた。それは、彼にとって未だかつて経験したことのない感情だった。

そのことに彼は戸惑いを覚えつつも、不思議と共感すら覚えつつい

た。

自分は彼女のことを愛している。そして、彼女の痛みも自分の痛みとして受け入れようとしていた。

「ユリを……救い出すことはできないのか？」

「……一カ月後にアメリカで戦闘がある。オートマータ軍が占拠する地域への、ユリ単独投入」

「た、単独っすか！？ そんな、死ぬと言っているようなものじゃないっすか！？」

「日本軍はそれで勝つ気でいる。それが……ユリの戦闘能力」

サトルはしばらくの間黙って考え込んでいた。

もしユリに元の感情、記憶、人格が残されているなら、救い出すチャンスかもしれない。だが、それは今まで自分が所属してきた組織に対する冒流行為ともいえる。

自らの保身か、最愛の人が。彼はそれを選ばなければならなかった。

「ユリが元に戻るとは限らない。戦うだけの戦闘兵器になっているかもしれない。それでも……サトルはユリを助けるの？」

「俺は……」

組織を離反すること、それは即ち今まで自分が築いてきたありとあらゆるものに対する裏切りであり、自らを否定する行為だ。オートマータを破壊し、両親を奪った存在に対して復讐をする。

云わばユリは、それを彼の代わりに代行してくれる者だ。そんな彼女の邪魔をすることは、自らの生き方に対して泥をかける行為にも等しい。

けれども彼は思い出す。今まで感情らしい感情を感じず、人間のフリをしてきた自分に人間の感情を思い出させてくれたのは誰か。楽しい、とは何かを教えてくれたのは誰か。

それは言うまでもなく、ユリである。彼女の問いかけに対して答えたではないか。彼女のことを恋愛感情を伴って好意的に思っている、と。

彼の答えは一つしかなかった。

「俺は……ユリを助ける。それがたとえ軍に離反する行為であつてもな」

「サトル……」

リンはサトルの顔を見て彼の名を呼ぶ。しかし、その表情は決意に満ちている。

「隊長ならそう言つて信じてたつす」

ヒロキが立ち上がって彼の元へ歩み寄る。

「……」

ヒメも今まで弄っていたパソコンを閉じると、サトルのベッドに腰かけた。

「……わかつたわよ。協力するわよ」

リンはサトルの手を強く握る。

サトルはそんな仲間の様子を見て頷いた。

「お前達……」

「その代わり、オイラ達の将来は隊長に保証してもらつすからね」  
ヒロキは笑いながらそう言う。サトルもそんな彼に釣られるように笑う。

「サトル、私はアメリカへの渡航手段を手配する。だから……それまでに準備を整えて」

「オイラは武器の調整をするつす。隊長の清羽と巨獣は軍が管理してるつすけど、ちょちよいと借りてくるつす」

「あたしは……」

リンは何かを言おうとするが、だが首を振って黙りこむ。

「リン隊長は隊長を支えてほしいつす。ああは言つても、隊長だっている抱えてるハズつすから」

「……わかつたわ」

リンはそれだけ小さな声で言った。ヒロキはそんな様子を不思議そうに思いながらも頷いた。

「ちよつと時間がかかる。だから、私はしばらくここに来れない」

「わかつた。準備が出来たら知らせしてくれ」

「サトルはそれまでしっかり養生すること」

ヒメが確認するように問いかける。サトルはしっかりと頷いた。

彼女は立ち上がると、一度だけリンのことを見てから部屋を後にした。

「オイラもちよつと面倒なことになりそうっすから、しばらく顔を出せないかもしれないっす。あ、それとリン隊長、銀狼を借りていつでもいいっすか？」

「ええ……」

リンは懐から何本ものナイフが入ったケースを取り出し、ヒロキに預けた。

「それじゃあ、また後でっす！」

そう言つてヒロキも部屋から退出していく。後にはサトルとリンが残された。

「サトル……あたしも、少し考え事したいから失礼するわ。また後で来る」

「リン……無理をしなくていいんだぞ？ 来たくなければ来なくていい」

「あたしは……ううん、なんでもない」

そう言つてリンも部屋を出ていった。

サトルはベッドに倒れこむと、真っ白な天井を見上げた。

まるで百合の花のように白い天井を見ながら、ひっそりと彼女のことを思い出していた。

夜、空には真円の月が浮かぶ。星々が空を舞い、彼の部屋へも明るい光を投げかけていた。

サトルは窓の向こう側を見上げながら、どこかで同じ夜を見上げることもできないであろう恋人に想いを馳せていた。

時刻は草木も眠る丑三つ時。巡回の看護婦だろうか、彼女たちが時折廊下を歩く音のほかに、聞こえる音はなかった。

「ユリ……あいつは今、どうしているんだろうな……」

白い月は、彼女の肌を連想させ、星の輝きは目の光を髣髴させる。彼は今、とてもユリのことを恋しく感じていた。

そのとき彼は今までの足音とは違う音を耳にする。

抜き足差し足とでも表現すればよいのだろうか、彼のように耳が特別よくなければ、思わず聞き逃してしまうほど音だった。

やがて、小さな音を立てて扉が開く。そこにはリンが立っていた。

「リン……?」

「サトル……話がある」

そう言うと、彼を誘うように手を振る。サトルはスリッパに足を通すと、彼女の後を付いて歩いた。

リンは黙ったまま廊下を歩く。やがて階段を上り、屋上への扉を開いた。

冷たい空気が肌を刺す。

月光が冷やかに二人を照らし出す。窓を通して見ると明るく優しい光も、直接浴びると氷のように冷たい光となった。サトルは軽い寒気を感じながらも、彼女の後に続く。

やがてリンは屋上に設置されたベンチに腰かける。そして、サトルも座るよう促した。

「何の用だ」

しばらくの間、二人の間を冷たい空気が流れていたが、やがてサトルは我慢できなくなって彼女に尋ねた。

「どうした……?」

「サトルは……身の危険を冒してまでもユリを助けに行くのよね……」

リンは搾り出すようにサトルに尋ねた。

「ああ。あいつは……俺に人間とはどんなものを思い出させてくれたからな」

「……」

リンは黙ってうつむいた。しばらくの間何かを考えていたが、やが

て顔を上げて問いかける。

「私たちには……無理だったのかな。サトルの手助けをすることは……」

「……悪いな。お前たちと一緒にいるときはとても愉快だったが、俺に感情を思い出させるほどの楽しみを与えてくれることはできなかった」

サトルはしばらくの間黙っていたが、やがて押し出すようにそう答える。

リンはその告白を黙って聞いていた。

「俺はあいつに感情を思い出させてもらった。そして、人を好きになるということも……」

「あたしじゃダメなの！？ あたしには……あいつの代わりに務めることはできないの！？」

「無理だ。リンはリン。ユリはユリ。ユリの代わりなんて他にはいない」

「あたしだってあなたのことが好き！ その感情はあいつに負けなほどこあるわ！ なのに……なのになんであたしには……あたしには振り向いてくれないの……」

リンはうつむいて声を漏らす。

サトルは月を見上げながらその問いかけに答えた。

「お前に対しても好意は持っているつもりだ。だが……それは仲間としての好意であって、恋愛感情のそれとは違う。悪いな、リン……」

「馬鹿あ……つえぐ……ぐすつ」

リンは声を出して嗚咽を漏らす。そんな彼女をどう扱えばいいものかサトルもわからず、ただ困惑しながら彼女を見つめていた。

しばらく間泣いていたが、ようやく泣き止んだのか、声も出さずにサトルに抱きついた。

「お願い……サトルがあたしのものにならないのはわかったけど……」

……今だけ……今だけは私のサトルでいて……」

「俺は構わない……。だが、傷つくのはお前じゃないのか？」

「いいの。今が幸せなら、それでも構わない……」

そう言うと、リンは彼の胸に顔を埋める。サトルはそんな彼女をそっと抱きしめた。

「サトル……あつたかいよ……」

「寒いからな」

やがて、小さな雪が舞い落ちる。

白くて冷たい、星の欠片のような雪の結晶。

リンはそれを掌で受け止める。

「……百合の花みたい」

「そうだな」

それをリンは握りしめた。雪は一瞬で溶け、滴となって手のひらからこぼれ落ちる。

「戻ろう。こんなところにいると風邪をひく」

「……うん」

リンはサトルの言葉にゆっくりと頷いた。

彼女は彼の手を握りしめると、ゆっくりとサトルのことを導いた。

サトルは今の彼女に対する対応が正しいのか否かを考えながら、ただ手を引かれるがままに歩き続けていた。



## 第七話 Healing (後書き)

病室に戻った二人は雪のちらつく外を見ながら、ベッドに並んで腰掛けていた。

「私ね、行きたい場所があるんだ」

リンはそうサトルに提案する。

「しょうがないな……今から行くか？」

「今から？ 何もこんな遅くに出ることないじゃない」

「下手すれば明日にも戦うために発たなければならぬかもしれないかもしれん。行くなら早い方がいい」

二人は柔らかな雪が降り注ぐ中、夜のハイウェイを奔る。

次話、第八話 Driving

## 第八話 Driving

### 第八話 Driving

「ねえサトル」

二人は病室に戻ってくると、ベッドに腰かけて話をしていた。

「私ね、行きたい場所があるんだ」

「行きたい場所……？」

「うん」

リンはサトルに寄りかかると、静かな声でその場所を告げる。

「旧東京。その東京タワーに上ってみたい」

かつての東京はオートマータの大規模攻撃によって破壊されつくされてしまった。

今では人もいなくなり、廃墟の街と化している。

「地上から333メートルの高さを誇る巨大なタワー。今ではどこまで上れるかわからないけど……はるか上空から世界を眺めてみたい」

「それなら、こんど飛行機に乗って見ればいいだろう。それじゃあダメなのか？」

リンはサトルの足を思い切り踏みつける。サトルはあまりの痛みに声にならない悲鳴を上げた。

「もう、デリカシーがないんだから。私は東京タワーから見たいのわかる？」

「おま……もう少し他の方法はないのか……？」

リンは頬をぶつくりと膨らませる。

「サトルが馬鹿なのが悪いんだからね」

「いつつ……ったく……」

サトルは足をぶらぶらさせながら悪態をつく。

「しょうがないな……今から行くか？」

「今から？ 何もこんな遅くに出ることないじゃない」

「下手すれば明日にも戦うために発たなければならぬかもしれないかもしれん。行くなら早い方がいい」

「それに……サトル、体大丈夫？」

「もうなんともない」

サトルは腕をぐるぐると振り回して胸を張る。その様子を見てリンは微笑んだ。

「それなら大丈夫そうね」

「先端医療技術の賜物だな」

サトルは立ち上がると軽くストレッチをする。

「現在時刻は12時だ。バイクで出れば朝までには帰れる」

「そうね……でも本当に大丈夫？」

サトルは上着を着ながら彼女の質問に答えた。

「問題ない。退院の目処も立っているしな」

防寒着を着ると、二人は連れ立って外に出る。

こっそりとナースセンターの前を抜けると、エレベーターを使って下へと降りた。

外に出ると、さらさらの雪がちらついている。

二人は急いでバイク置き場へと向かった。早くしなければ、道路が使えなくなる可能性があった。

「寮に戻る時間はない。お前のバイク、中型だったな」

「二人乗りするの？ 私慣れてないわよ？」

「問題ない。俺が運転しよう」

サトルはバイクのエンジンをかけると、バイクにまたがってヘルメットを着ける。

「ヘルメット一つしかないわよ」

「じゃあお前が被れ。ノーヘルでも見つからなければ問題ない」

サトルはヘルメットを彼女に手渡すと、バイクのアクセルをふかす。大きな音が雪降る街に轟く。リンはサトルの後ろに座ると、遠慮し

がちに彼の腰へ手を回した。

「いいか？」

「うん」

サトルはアクセルを入れると夜の街へと繰り出す。

雪の街は驚くほど静かで、ただバイクが駆ける音だけが響いていた。

「静かね……」

「ああ。まるで街が眠っているようだな」

まさにその通りだった。

どこのビルも明かりは落ちて、開いている店は一つもない。

これも戦争の最中、オートマータに狙われないようにするためだった。

今では24時間営業のコンビニエンスストアなどという便利な店はない。

「視界悪くない？」

「この程度ならなんとかなる」

道路を雪が覆いつつある中、二人はどこまでも走り続けた。

途中で温かい飲み物を自動販売機で購入しながら旧東京へと入る。

旧東京に到着する頃、雪は徐々に止みつつあった。

まさにそこは廃墟と称するに相応しい街だった。

道路はひび割れ、ビルは傾き、ガラス窓は砕け散っていた。

どこにも生き物の気配はせず、ただ死の気配だけが漂う旧き街。

それが今の東京だった。

「なんだか……怖い」

「人間はおるか、動物すらも近付かない街だからな」

今でもどこかで壊れかけたオートマータが徘徊している。そのオートマータに恐れをなしてか、その街へ近付こうなどと考える者は一人もいなかった。

二人は廃墟の街を走りぬける。間もなく目的の東京タワーが見えてきていた。

「着いたぞ」

二人は適当な場所にバイクを止めると、タワーの方へと近付いていく。

「奇跡的に電気は来てるみたいだな」

エレベーターのボタンを押すと、ゆっくりと扉が開いた。

二人はエレベーターに乗って、タワーの上層部へと上がっていく。

タワーの展望台は思っていたよりも荒れてはいなかった。

土産屋の跡だろうか、お菓子やペナントなどが並べられた店があったり、かと思えばレストランのようなものもある。

二人は人の気配のないその店々の中へと入っていく。

「この喫茶店、いいわね」

「街の風景が一望できるな」

二人は窓側の席に座った。

遙か遠くに見える光は隣街の明かりだろう。その他には何も映らない窓がそこにはあった。

「何か食べ物があるだろう」

「食べられるかしら？」

「電気は生きているんだ。冷蔵庫に何か入っているだろう」

サトルは喫茶店の冷蔵庫を勝手に漁る。幸い電気が通っていて、冷蔵庫の中には冷ややかな空気が漂っていた。

冷蔵庫の中から食材を持ち出したサトルは厨房を使って軽く料理を作る。今まで完全にユリに任せっきりにしていたが、どうやら料理の勘は衰えてはいないようだった。

簡単なラーメンを二人分作り、適当な酒を持ってサトルは席へと戻る。

「ほれ、ラーメンとワインだ」

「合うのかしら……まだビールのが合いそう」

「文句があるなら食わなくてもいいぞ」

「まさか、もちろんいただくわ」

二人は椅子に座って、遙か遠くに広がる夜景を見ながらラーメンを頬張る。

「二人で食事を取るの、久しぶりだね」

「今まではずっと病院食だったからな」

グラスに入れたワインを傾けながら、二人は会話を続ける。

「美味しいの？」

「美味くはない。食えないほどではないがな」

ラーメンはよほど美味だったのか、二人はあっという間に平らげてしまった。

二人は後に残ったワインを飲む。

「そういえば、以前にあたしのお弁当、食べたことあったよね」

以前に一度、ヒメが体調を壊してリンは自分で弁当を用意しなければならなかったことがあった。

彼女が精一杯努力して作った弁当は訓練所へと持っていかれ、そして広げられた。

一見して普通の弁当だったが、どういうわけか食が進まなかった。

彼女はサトルへ弁当を託すと、一人トイレへと向かったのだった。

「あれは酷かった」

「どっちの方が不味い？」

「両方ともな」

どちらが不味いかを明確にはしないで、サトルははぐらかすように言った。

「でも、病院食は食べれるんでしょ。ならあたしの弁当の方が不味いわよ」

「どっちもどっちだ。そもそも俺はあの弁当を全部食べたしな」

「そういえばそうだったわね」

あの頃の彼には辛いという感情はなかったのだろう。不味い弁当でも、託されればひたすら食べ続けることが彼にはできたのだった。

「ふう……いい景色だね」

遠くの方に一筋広がる光の線は、遙か彼方に広がる街の明るさだろう。

そして、いつの間にか顔を出したのか、月光が廃ビルたちを明るく

照らす。

「死都、東京……か。俺たちが子供の頃は考えられもしなかっただろうな」

「そうね。眠らない街とさえ言われた街が、今ではこんなふうになっちゃったね」

リンはどこまでも広がる残骸溢れる死都を見渡す。

崩れかけたビル群が林立しているその都は、かつて栄華を極めた首都とは思えないほど荒廃していた。

「数日後には、この国から離れるのか」

「そうね……」

「恋人を取り返すために軍に謀反を働く……以前の俺からは考えられないような行動だな」

それは、自分に対する確認と同時に、リンに対する確認の意味もあった。

人とはいえ、軍の“最新兵器”を横合いからかつさらう。この計画が軍に漏れれば反逆の罪で捕らえられ、懲罰を受けることとなるだろう。仮に作戦が成功したとしても、日本軍から逃げ切ることができなければ制裁が下されることは間違いない。

「そうね。でも、私はやるわ」

「なぜ……？」

「だって、人間を兵器として使うだなんて許せないじゃない」

そう言つて、彼女はややうつむく。だが、すぐに顔を上げた。その顔はとても清々しい表情だった。

「なんてね。それは建前。本音は私が納得できないからよ」

「納得……？」

「恋敵をこんな方法で排除したつて、気分悪いじゃない。それに、サトルはユリが好きなままでしょ。それじゃあ、体を奪っただけで心を奪ったわけじゃないわ。それは本当の意味でサトルを私のものにしたわけじゃないもの」

「そうか……」

そう語る彼女の顔はとても明るかった。

サトルは思う。これがリンなりのやり方なのだろう、と。

普段は不真面目でも、大事なことは真つ向から本気で戦うのが彼女のやり方なのだ。

「私さ、もう決めたんだ。このままサトルが私のものにならなくても諦めるってね。だから、あんなこと言えたのかな。だつてさ、勝ち目ないじゃん。ユリは……綺麗だし、気立ても良くて料理も上手で……私が勝てるのなんて強さ……いいえ、これも負けてるわね」「そうだな、全然勝っている部分ないな」

「……ひどい。普通直接言う？」

「あ……いや、すまんかった」

リサに冷ややかな目で見つめられて、サトルは謝った。だが、すぐに彼女は諦めの混じった笑みを浮かべる。

「まあ、事実だけどね」

「いや、けれどもユリにはない、リンの良さはたくさんあるぞ」

「たとえば？」

「たとえば……」

サトルは唸りながらしばらくの間考え込む。答えを出すのをリンは待つていたが、やがて待ちきれなくなり、中断するように言う。

「いいわよ、無理に考えなくても。どうせ大したことないわよ」

「いや……たとえば……積極的……？」

「まあそうね……。確かにアピールポイントにはなるけど、でもねえ……ユリの方が圧倒的に有利じゃない」

リンはどんよりとしながら言った。

サトルは一度ため息をついて、椅子にどっかりと座り込む。

時間を見ると、まもなく3時を回りそうだった。そろそろ戻る準備をしなければ、戻るのは朝になってしまうだろう。

「そろそろ戻るか？ 時間も大分遅くなってきたぞ」

「うん。そうしょっか」

二人は後片付けをして、再びエレベーターに乗る。



バイクに乗ると、うっすらと雪に覆われた道路を走り始める。

虚空には明るく真田の月が輝いていた。

二人は月光を浴びながら、静かな廃都のハイウェイを走り続けた。

## 第八話 Driving (後書き)

サトルは自宅へと戻ってきていた。

そこは彼女と長い時間を過ごした狭い部屋。

ベッドに横たわり、深く息を吸い込むと、彼女の匂いが鼻腔を刺激する。

「今度こそ……今度こそは……」

そう、今度こそは幸せな日常を掴むのだ。

あの十年前の無力だった自分じゃない。今の自分には力がある。

サトルは数日前のあの日常を掴むために決心する。

次話、第九話 Remembering

## 第九話 Remembering

### 第九話

サトルは数週間ぶりに帰宅した。

ふらふらと揺れながら歩き、ベッドに倒れこむ。

……その布団は、かつて彼女の身が包まれていたものだった。

彼はそれをぎゅっと抱きしめ、遠い昔を思い出すように目を瞑る。

共に過ごした日々、二人でとった食事、他愛もない会話……それら

がまるで何年も昔のことのようにサトルは感じた。

「お前がいなくなってから……そう日も経ってないんだよな」

全てのことは数週間前のことなのに、彼はそれを懐かしく思いながら手を伸ばす。

確かにしっかりと握っていたハズの日々は、気付くと手からこぼれ落ちていた。それが彼には悔しくてたまらなかった。

ぎゅう、と手を強く握りしめる。

「今度こそ……今度こそは……」

そう、今度こそは幸せを掴む。

十年前の無力だった自分とは違うのだ。今の自分には幸せを守る力が  
ある。

サトルは立ち上がり、キッチンへと向かう。

そこは、ユリの面影が一番強く残る場所だった。

朝起きると、すでに起きて朝食の準備をしてくれているユリ。それを横目に見ながら顔を洗いに洗面所へと向かうサトル。

今思えば、もっと彼女の姿を目に焼き付けていればよかったと後悔する。

綺麗に整頓されたキッチンの様子は、彼が一人で暮らしていた頃とは空気が変わっていた。

それを感じながら、サトルは冷蔵庫を開いた。

「これは……」

サトルは一つのタッパーを取り出す。それには可愛らしい文字で書かれた小さな手紙が付いていた。

『おやつに食べてください。感想待ってます』

中を開くと、そこにはクッキーが何枚が入っていた。

サトルはそれを一つ取り出し、かじってみる。

……ふと、一滴の涙がこぼれ落ちる。それは後から後から止め処なく湧き上がり、頬を濡らしていく。

「美味い……美味いよ……ユリ」

ぺったりとその場にサトルは座り込んだ。

そして、泣きながらユリのクッキーの味を噛みしめていた。

リンは女子寮の屋上に立っていた。

そこからは周囲の街を見渡すことができる。

どこまでも続く街灯の明かり。それは地平線の果てまで広がっていた。

一陣の風が吹き、彼女の長い茶髪がゆっくりと揺れる。

そこからは肉眼で男子寮を見ることが出来る。

その視線はまっすぐと、ある部屋を射抜いていた。

「サトル……」

今やほとんどの部屋が真っ暗となっているその寮の中、彼の一室は明るく輝いていた。

「今ごろ、何してるのかしら」

彼女は色々と考えてみる。

たとえば、コレクションの銃の手入れをしているかもしれない。そのコレクションの中から何丁かは持っていくのだろう。

それとも、食事をとっているのかもしれない。ユリの作った残りの料理を食べているのだろうか。それとも、新しく何かを作ったのか

……。

あるいは、寝ているかもしれない。部屋の電気を付けたまま寝るのも悪くない。

そこまで考えて、その思考が無意味であることを悟り、思考を停止する。

「サトルは……もう、私には振り向かないんだろうなあ……」  
そう考えると、一滴の涙が目から溢れてきた。

だが、それは一滴だけこぼれ落ちると、すぐさま止まる。

「あはは、もう涙すら流れないや」

もうすでに、東京タワーで彼のことを好いたまま生きていくのはやめたと決めたはずだった。

だが、それでも彼を想う感情は無限大に暴走し、止まることを知らなかった。

「ユリをどうこうしても、サトルは私のことを好きにならない。たとえ私が何もしなくてもサトルはユリを助けに行く。そうだったら私はもう、サトルと一生会えないわ」

かといって、共に行ってもユリと戯れるサトルを見ることになるだけであろう。彼女の元にサトルが来ることは永遠にないだろう。

「だからって、逃げるわけにはいかないわ。私は……私は自らの負けを悟るために、行かなくちゃいけない」

自身の狂った愛情に終止符を打つために、リンは行かなければならないだろう。

再び風が舞う。

冷えた体をさすりながら、リンは室内へと戻っていった。

そして、ついにその日を迎えた。

サトルは大きなポストンバッグを二つ担いで、ヒメが指定した時間にそこへとやってきた。

すでに他の仲間が集まっていた。

「いよいよよっすね」

ヒロキは大きなボストンバッグを床において、その上に座っていた。  
「皆の武器つす」

ヒロキは全員にそれぞれの武器を渡す。

「隊長の武器は連射速度を上げておいたつす。リン隊長はナイフの振動数を、ヒメちゃんのは全般性能の底上げをしといたつす」

三人は武器を受け取ると、久しぶりにその重み感じながら、それぞれ収納する。

「それにしても、こんな場所でどうするの？」

ナイフをくるくると手で回しながら、リンもボストンバッグの上に座ってヒメに尋ねる。

「あと少いで迎えが来る」

そう言ったヒメは小さなスーツケースを指先で弄りながらうずくまっていた。

「それにしても、隊長は荷物が多いつすね」

「少し武器を持ってきた。大きな戦いになるだろうからな」  
サトルは重そうなカバンを片手で担ぎながらそう答える。

そうしてしばらくの間四人は待っていると、やがて低い音を唸らせながら一機の飛行機が降りてきた。

「垂直離陸式旅客機……パイロット付きとはずいぶんと都合がいいモノを用意したな」

「パイロットはいない」

やがて、飛行機の中から一人の男が降りてくる。

「こんな子供だったとはな。まあいい、金は用意できているのか」

「これ」

スーツケースとは別に持ってきていたカバンをヒメは男に差し出す。

「ふむ、確かに。それにしてもこんな時期に修学旅行とはいいいご身分だ」

男はカバンを持ってどこかへと歩いていく。

「買ったの」

「高かったんじゃないか？」

「お金が全部なくなつた」

「後で半分出すわよ」

「うん」

ヒメはそう言うと、飛行機へと乗り込んでいく。

三人も後に続いて飛行機へと乗り込む。

中は色々と内装に凝っていて、様々な装飾が飾りつけられていた。

「うえ……趣味悪う」

「文句言うな。どうせ長いこと使うわけじゃないしな」

ヒメは操縦席に座ると、慣れた手付きで機械を操作する。

「動かせそうか？」

「大分カスタマイズされてるけど大丈夫」

やがて、軽い振動と同時に機体が浮かび上がる。

「乗り心地は悪くなさそうね」

「ヒメの運転なら大丈夫だろ」

やがて、轟音を轟かせながら飛行機はまっすぐに飛び出した。

飛行機に乗ってから数時間が経過した。

機体は自動操縦でまっすぐに演習予定地へと向かっていた。

「順調に進んでいるな」

「……」

ヒメはサトルの言葉にこくこくと頷く。

「これから今回の任務を説明する」

ヒメはそう言うと、カバンの中からいくつかのヘッドセットと、ノートパソコンを取り出した。

「私の能力をパソコンに搭載した装置で強化する。それで皆の行動の数秒後を予測する。皆はヘッドセットで私の言葉を聞いて、その通りに動くこと。その間私は動くことができない。だから、能力発動中は基本、誰かに担いでもらうことになる。サトルとリンが前線に立つことを考えると、それはヒロキが妥当だと思う」

「お、オイラっすか!？」

ヒロキは少し頬を赤らめて慌てふためく。

「適任ね。前線は直接戦闘、後援はライフルで支援しながら無線でサポート。2チームに分けるのがよさそうだわ」

「わ、わかつたっす」

ヒロキはややぎこちなく頷いた。

「目的地に到着したら、ヒロキは私を連れて身を隠す。そして支援射撃でサトル達をサポートする。サトル達はしばらく身を潜めて待ち、ユリとオートマータの戦闘が終わるのを待つ」

「待て、俺はユリが戦っているのを黙って見てるっていつのか？」

「それが最善。作戦をオートマータに邪魔されないし、サトル達はユリの戦力を見ることが出来る」

「む……それはまあそうだが……」

ヒメはそこまで説明すると、四人に小さなリュックサックのようなものを配った。

「これは……?」

「パラシュート」

「……は?」

「急いで荷物を体に巻きつけて」

そう言つて、ヒメは三人にベルトを配った。

「ちよっと待つてよ! まだここは海上だし、それに着陸しやすくするために垂直離陸式の旅客機を選んだんじゃないの!？」

「保険」

そう言つと、ヒメは操縦席の方へと戻つていく。

次の瞬間、どこからか声が聞こえてきた。

『こちらアメリカ空軍だ。貴機はどこの所属だ?』

「……」

ヒメはその通信に対して答えない。

『答えなければ迎撃する。所属を答えろ!』

「ヒメ、ちよっと答えなくてもいいの!？」



「正式な手続きは踏んでいない。だから強硬突破する。迎撃されたら飛び降りて、HALO降下で降りる」

「ちよつと、無茶言わないでよ!？」

「やるしかない」

『最終通告だ! 所属を答える!』

それに対してヒメは答えなかった。

『これより、攻撃を開始する』

「ベルトを締めて!」

その瞬間、機体が大きく旋回する。

突然の揺れに三人は大きく傾きながらなんとか立つ。

「も、もつと早く言ってほしいっす!」

ヒロキはなんとか椅子へとたどり着くと、ベルトで体を固定した。

「まったく! ヒメはいつもいきなりなんだから!」

リンとサトルも椅子に座ると体を固定した。

機体は大きく揺れながら右へ左へと揺れ動く。

「武器はないのか!？」

「ない。これは民間の所有していた普通の旅客機。戦闘機じゃない」

その直後、再び大きく旋回する。

180度回転すると、旅客機内の荷物が大きく上下する。

「避けきれない」

時折銃弾がかかるような音が聞こえてくる。おそらく、敵機の攻撃が被弾しているのだろう。

「見て! 陸よ!」

やがて、陸地が見えてくる。ここまで来れば直撃を受けたとしても降下することができるだろう。

「大きいのが来る。シヨックに備えて」

ヒメがそう言った直後に大きな揺れが起こる。攻撃が直撃したのだらう。

「く……行けるか……?」

「無理」

再び大きく揺れる。そろそろ限界が近いのか、窓の外に黒煙が流れる。

「準備して。もうすぐ脱出する」

三人はベルトを外すと、ヒメから渡されたベルトで荷物を体に固定し、パラシュートを背負った。

「ヒメ！ ハッチを開けてくれ！」

サトルがそう叫ぶと、ハッチが開く。その眼下には陸地が広がっていた。

「行くぞ！」

そう言うと、一番にサトルが飛び降りる。続いてヒロキも飛び降りた。

「ヒメ！ アンタも早くしなさい！」

「今行く」

短くヒメはそう言うと、再び自動操縦へ切り替え、リンの隣に並んだ。

「行くわよ！」

二人は同時に飛び降りる。

それと同時に一際大きな揺れが起こり、それと同時に左翼のエンジンが爆発する。

下には広大な山脈が広がっていた。サトル達の後を追いかけるように、リンたちは降下していく。

視界の端で今まで乗っていた旅客機が爆発しながら斜めに落ちていくのが見える。一步遅ければ、巻き込まれた可能性もあっただろう。四人はパラシュートを開く。徐々にスピードが落ちていき、すぐに陸地へと着陸する。

旅客機を迎撃した戦闘機は、今度は四人の方へと降りていく。

「こっちの反撃の番だ」

サトルは大きなボストンバッグから、とてつもなく巨大な銃を取り出した。

「な、なんすか！？ そのでかいお化け銃は！？」

「レールガンだ」

そう短く告げると、レールガンをセットアップさせる。

まっすぐに彼らの方へと戦闘機が向かってくる。それにまっすぐ標準を合わせ、サトルは電圧を上げていく。

「これで終わりだ！」

サトルは引き金を引いた。瞬間、一筋の閃光が走り、戦闘機が爆発する。

「凄いつす……」

爆発を起こした戦闘機はそのまま斜めに降下していき、やがて地表に衝突して大爆発を起こした。

「人間に向けて撃つ銃じゃないな」

「そうね。せいぜい戦車とかかしら」

四人は大爆発を起こした戦闘機を見上げながら、山脈の中腹に立っていた。

## 第九話 Remembering (後書き)

アメリカに到着した一行はロサンゼルスを目指していた。

予定ではまっすぐにロサンゼルスへと向かう予定だったが、空軍に追われたことよって到着地点がズレてしまった。

着地場所はロサンゼルスのはるか130キロ北の山中。

「まずは海岸の方の道路のある場所に出る。そこでヒッチハイクして、サンタバーバラへ向かい、そこで車を手に入れてロサンゼルスへ向かう」

ヒメは淡々と任務の説明をする。

残りリミットまであと6日、ゆっくりしている時間はない。

「待っている……ユリ」

サトルは小さくそう呟くと、山中の歩きにくい中を一步一步と踏みしめていった。

次話、第十話 Hitchhiking

## 第十話 Hitchhiking

### 第十話 Hitchhiking

「今の現在地はここ」

ヒメが広げた地図の一角を指さす。

そこには小さな文字で海岸山脈と書かれてあった。海岸山脈の中でもかなり南の方であるようだった。

「目的地は……？」

「ここから南に下った場所にあるロサンゼルス」

「ロサンゼルスって海の近くだよ……なぜ直行しなかったんだ？」  
「空軍から逃げてるうちに大分ズレた」

ヒメはぴしりと言つてのける。地図上の距離はおよそ2センチ。だが、実際は130キロの距離である。

「サンタバーバラに出て、そこで車を拾う」

「そのサンタバーバラまで10キロはあるんだが……」

近くにある樹木によりかかりながらサトルはため息をつく。

「まずは海岸の方の道路のある場所に出る。そこでヒッチハイクして、サンタバーバラへ向かい、そこで車を手に入れてロサンゼルスへ向かう」

「ロサンゼルスか……数十年前までは大きな街だったらしいっすね」

「今ではオートマータ戦の最前線……」

四人は昔のロサンゼルスに思いを馳せる。もしその時代に生まれていればどんな生活を送れただろうか。

戦争のない、平和な時代。小規模な紛争こそあったものの、世界は概ね平和であるといえた時代が存在したのだ。

それが今では世界を覆うほどの戦争にどこの国もが苦しんでいる。

これほどの大戦争を起こしたロベミライアの真意とは一体なんなのだろうか。

「俺達にロサンゼルスはもう関係ない。少しでも急ごう。ヒメ、戦闘まで何日だ」

「6日。一日20キロ移動すれば間に合う」

「一日4時間歩けばいいのか。いや、車なら一日で移動できる」

「隊長、あくまでそれは直線距離を移動した場合ですよ。この辺は山が多くて入り組んでいるから、そううまくはいかないですよ……」

「それでも俺達はやらなければならぬ」

サトルはボストンバッグを担ぎ上げる。それを見て、仲間たちもそれぞれ荷物を持った。

「付いてきて」

ヒメが先頭を歩き、その後ろに三人が付いて歩く。

これより地獄への行進が始まったのだ。

「待っている……ユリ」

サトルは小さくそう呟くと、山中の歩きにくい中を一步一步と踏みしめていった。

しばらく歩くと、すぐに道路が見えてきた。もっとも、そこを走る車は一台もない。

四人は一度荷物を下し、休憩を取ることにした。

「ヒメちゃんズルいつす……」

「何が？」

ヒメは何くわぬ顔でヒロキに尋ね返すが、ヒロキは彼女の持つカバンを指さして言った。

「ホバーリフト付きのスーツケースなんて……オイラ達なんか全員手で持つてるんすよ！」

ヒメのスーツケースは空気で地上から数センチ浮かび上がるホバーリフトという機構を取った最新型のスーツケースである。

これによって手にかかる負担はほとんどゼロとなり、わずかな力で引くことができるようになっていた。

「今回は長い旅路になるから、できるだけ負担の少ないものを用意しただけ」

「そんないいのがあるならなんで教えてくれなかったんすか……」

「だから鍛えておけと言ったものの……」

「そうよ。サトルに言われて鍛えていればこんな苦労はしなかったじゃない」

サトルは戒めるように、リンはなぜか偉そうにヒロキを攻める。

「リン隊長……そういうことは自分で荷物を持ってから言ってほしいす」

「あはは、まあいいじゃん」

リンの荷物はサトルが持っていた。というのも、リンは重い荷物を運ぶのは体の筋肉の構造上、よろしくないの、代わりにサトルが持つこととなったのだった。

「俺は辛くないぞ。ほれ」

サトルはその場で荷物を持ったままスクワットをしてみせる。

「隊長は筋肉お化けだからそういうことができるっす。オイラは一般人だから、一緒にしないでほしいす」

ヒロキはぼそりと呟くように言った。だが次の瞬間、サトルはカバンからレールガンを取り出し、セットアップし始める。

突如鳴り響く制御音。それを聞いてヒロキは真っ青になって首を振る。

「じよ、冗談っす！ お願いだから、その恐ろしいお化けをしまっ  
てほしいす！」

「……」

サトルは引き金を引くことなく、レールガンをしまい始める。それを見て、ほっと一息つくヒロキ。

「冗談でもそんなもの取り出さないでほしいす。こっちは身がい  
くつあっても足りないっすよ」

「レールガンならヒロキが縦に十人ほど並んでいても、全員射抜く  
ことができるだろうな」

「そ、そんな恐ろしいこと言わないでほしいです……」

ヒロキは表情を青ざめたまま恐ろしそうに言う。

「あはは、面白いたとえ話ね。私としては、ヒロキは一人で十分かなあ」

「当たり前っす！ オイラが何人もいたら困るっすよ！」

「でも、サトルが何人もいたら最強の軍隊ができそうね」

リンはくすくすと笑いながら話を続ける。

「一人貰っちゃいたいかも」

「馬鹿」

ヒメが呟くようにツツコミを入れる。それを聞いて四人は大きな声で笑った。

「あ、見て！」

リンが指さす方を見ると、一台の車が走ってきた。

「チャンス」

ヒメはそう言うと、その車の方へ大きく手を振る。

「おーい！」

ヒロキも声を出して手を振った。すると車の方も気付いたのか、四人の前で車を止めた。オレンジ色の大きなワゴン車である。

「どうした？」

若い男がウィンドウを開けて顔を出す。

真っ黒に肌を焼いた、ガタイのいい男だった。

「あの……サンタバーバラまで……できればロサンゼルスまで連れて行ってほしいです」

「私達、ちよつと野暮用でロサンゼルスまで行くんだけど、お金がなくなっちゃったの。それで、歩いてロサンゼルスまで向かってるんだけど……」

うるうると目をうるわせて頼み込むようにリンは男を見つめる。

「む、まあそれは構わないが……ロサンゼルスは今危険だぞ？」

「それはわかっている。それでも、俺達は行かなければならないんだ」



しばらくの間、男は黙って考え込んでいたが、やがて顔を上げて言った。

「わかった。俺も仕事でロサンゼルスまで行くが、車の中に色々と機材を積んでいてな。少し窮屈だが、構わないか？」

「……構わない」

ヒメが小さな声で答える。男は笑顔になって自分を指さした。

「俺の名はアラウィン。アランって気軽に呼んでくれ」

そう言っつて男は後ろのドアを開いた。四人は荷物を車の中へ積み込むと、後部座席に座った。

「旅は道連れ世は情け、つてな。確か日本のことわざだろ？」

「そうだな。旅はお互い助け合っつていくのが良いという意味だったはずだ」

アランはしばらくサトルの体を見ていたが、やがて

「お前さん、かなりいい体してるな。職種は兵士だろ？」

的確にサトルの前職を言い当てる。

「よくわかったな」

「これでも戦場を駆けめぐるジャーナリストをしてるもんでな。兵士と一般人の区別は付けられるんだ。もしも場合は頼むぜ。一応身を守るための護身用の武器は持つてるが、ちよいと癖ありだな」

「わかった」

そうサトルは頷く。他の三人もうんうんと頷いた。

「お前さんたち、これからヤツらに戦争を申し込みに行くんだな」

「まあ、それに近いかな。ちよつと色々とヤバイんだけどさ」

「まあ深くは聞かねえよ。お前さん達にも機密事項とかあるんだろうしな」

四人はほつと胸をなでおろす。できるだけ作戦のことを他人に話したくはなかった。

車が少し揺れ、徐々にスピードを上げていく。どうやら目的の日までにロサンゼルスにたどり着くことができそうだった。

「俺はジャーナリストでな。何度も戦争を見てきたよ。お前さん達

みみたいな子供の兵士も見てきた。もちろん大人の兵士も、ロボットもオートマータも何度も会ってきたよ。会えば会うほど嫌になるな」「どうして?」

リンが不思議そうに尋ねる。アランはやや悲しそうな口調で答える。「皆死んじまうだろ。壊れちまうだろ。それがなんだか悲しくてな」「戦わなければ明日はない。戦いを放棄したとき、待っているのは死のみだ」

「それはわかってるんだけどな」

アランは車を運転しながら答える。かなり車の運転は上手いようである。

ゆるやかなカーブを曲がっていく。車窓から隣を木々が飛ぶように去っていくのが見えた。

「けれども、こうやって実際に人の生き死にを見てくると、なんとも感慨深くなっちまうもんだ。俺だって仕事柄、いつ死んでもおかしくないしな」

彼はタバコを一本取り出し、火をつけた。

とたんに辺りに煙が舞い始める。

「実際死にかけたことも何度もある」

「仕事をやめようとは思わないの?」

アランは大きく息を吸い込む。そしていくつかの見事な煙の輪を作ってみせる。

「思わないね。不思議と思わないね。別に命を軽んじてるわけじゃあない。なんていうか、人の生き様を見る仕事ってやりがいがあるっていうかな。お前さん達みたいな命を張る仕事は特にな。そういうお前さん達はやめないのか?」

「俺達は……」

「ええ、やめてやったわ」

「ちよ、リン隊長!？」

リンは大きな声で威張るように言った。

「あんな場所で働くのはもううんざり。作戦で部隊が壊滅して、私

達だけになつて……もうあんなところで仕事をするのは御免よ」

「ははは、威勢がいいな」

小さな声でヒロキはリンの耳元で囁く。

「いいんすか？ オイラ達が今兵士をしてないなんてバラして……」

「あら、何か問題でも？」

「……問題ない」

ヒメがそう断言する。ヒメが言うならと、ヒロキは元のように座り直した。

「あなたはこれから何の取材を？」

ヒメが珍しく、発言をする。その様子に三人は驚いた。

「お、俺の仕事に興味あるのか」

「……」

こくこくとヒメは頷く。それを見て、彼は嬉しそうに喋り始める。

「いやな、日本の最新兵器とやらが前線に出されるって噂をウチの社がキャッチしたんだ。その情報を確認しに俺らが出向くことになったわけだ」

「ジャーナリストってことは記事に載る？」

「ああ、情報によると、それはなんでもたつた一機でオートマータの大群を殲滅できる対オートマータ用、汎用殲滅兵器らしいな」

彼の言っている兵器とは、間違いなくユリだろ。そういう扱いをされていることにサトルは憤りを感じていた。

「サトル」

ヒメはふるふると首を振る。彼女の言わんとしていることはサトルにもわかった。強く握りしめた手をゆっくりと解く。

「日本もずいぶんと物騒な兵器を作るようになったもんだ」

「……」

ヒメはこくこくと頷いた。

「他には話を聞いていない？」

「そうだな……かなり小型だつて話だつたな。オートマータとそれほど変わらないぞうだ。これ以上はちょっと企業秘密で喋れないな」

「そうなのね。じゃあ別のことを聞く」

少しの間考え込んだ後、ヒメはすぐに喋りだす。

「あなたの今回の仕事」

「おう、どんと来い」

「あなたの今回の仕事は？」

「俺の今回の仕事か……企業秘密とかあるからあまりは話せないが……」

アランは慎重に話を選んでいるのか、しばらく黙って考えていたが、やがてゆっくりと語り始める。

「俺の今回の仕事は日本の新兵器のレポートだな。兵器の様子、写真、性能、その他もろもろを写真に収めたり、文章にしたり、そうやって情報を本社に送ることだ。ウチの社は兵器開発にも一枚噛んでいて、そういうのの参考にしようってワケだ」

「そう、ありがとう」

その話を聞いて、ヒメは何かを考えるように黙りこむ。

「ヒメ、何かいい話は聞けたか？」

「ん……」

何かを言おうとしたようだが、やはり話すのをやめて再び黙りこむ。

「ヒメ……？」

「協力しない？」

突然ヒメがそんなことを言い始めた。そのことに、三人は驚きを隠せなかった。

「私たちは日本軍の作戦を邪魔しに行く。オートマータとの戦闘は邪魔しない。それを見たいというのも私達の目的。でも、本当の目的は日本軍の兵器を横からかつさらうこと」

「そ、そりやまた随分とデンジャラスな作戦だな」

四人にも彼の唾を飲み込む音が聞こえた。間違いなく、彼は強い衝撃を受けているのだろう。

ヒメは再び話し始める。

「私達の計画は、その実行までの手順に関してはほとんど問題がな

い。けれども、問題は作戦後」

「とうとう?」

「もし仮に、兵器を奪い取るのに成功したとしても、私達には足がない」

それを聞いて、サトル達三人は衝撃を受ける。

仮に作戦を成功させたとしても、その後日本軍から逃げ伸びなければ明日はない。すぐにユリは日本軍に捕えられ、そしてサトル達も捕まるだろう。

サトル達はそのことを考えずに作戦を推し進めていたのだ。そこまですべて考えが回らなかつたことに、サトルは内心舌打ちを打つとともに、逃亡手段に関してしつかりと考えを練っていたヒメを改めて見直す。「そこで、あなたに逃亡手段を手配してもらおう。代わりに、私達が奪い取った兵器を好きなだけ観察する権利を与える」

「具体的には?」

「安全に国外へ逃亡できるまで。できることならばアフリカ辺りに亡命したい」

「ロベミライアか……!」

ヒメはこくこくと頷く。日本軍もロベミライアへ逃げ込んだとなれば、手を出すことはできないだろう。

危険な賭けだが、やってみる価値はありそうだった。

「君は……その兵器をどうするつもりだい?」

「見ればわかる。この兵器は確かに強力だけど、他へ転用することが容易ではない。私達はおそらく、あなた以上にあの兵器のことを知っている」

その兵器と友達だったから、とは付け加えなかった。兵器の概要まで語ってしまったら、あまりの話に彼が信じなくなる可能性もあった。だから、あえて彼女はそこまで話すことはなかった。

「考えて……おこっ」

アランはそれ以後ドライブの道中一切話すことなく、黙りこんだまま何かを考えながらハンドルを握っていた。



## 第十話 Hit ch h i k i n g (後書き)

一行はサンタバーハラに到着する。  
美しいものの、不気味なほどに静かなその町に、かつての栄えた頃の様子はない。

開いているホテルを見つけると、さっそく宿泊する手はずを整える。  
部屋に入って、ふとヒロキがサトルに尋ねる。

「本当にユリちゃんとは……戦わないといけないんすか？」

サトルはその言葉に頷いた。

「お互い好き同士なのに、戦わないといけないなんて辛いっすよ」

「俺は感情を捨てて辛いと感じることから逃げてきた。今こそ、それに立ち向かうべきときだ」

サトルは一人埃っぽい部屋を後にする。

後に残されたヒロキは一人ぼそりと呟く。

「隊長は……やっぱりハンパないっす」

次話、第十一話 T r a v e l i n g

## 第十一話 Traveling

### 第十一話

サンタバーバラ。

そこは美しいビーチと小綺麗な街並み、緑豊かな公園のある街として短期休暇に様々な人々が訪れる憩いの街だった。だがそれは昔のこと、今では戦争の余波を受けてほとんどの住民が避難してしまい、荒れ放題となつてしまっている。

住民が消えてから数年が経過したこの街は、今では旅行者も訪れることのない寂れた街となつてしまった。それでも、生まれ育った地で死にたいと思うわずかな住人も残っている。

「ここがサンタバーバラ……」

「綺麗な場所つすけど……静かな街なんすね」

「もとはもつと栄えた街だった。ロサンゼルスで戦いが起こつてからは住民は減る一方だけだな」

車道をしばらくの間走り続けるが、なかなか開いているホテルを見つけることができなかった。

長いこと走り、ようやく開いているホテルを見つけると、その駐車場に車を付ける。

「そういえば、お前さん達金はあるのか？」

「いちおう1万ドルほど用意してある」

どこから取り出したのか、ヒメが札束を取り出してみせる。それを見て目を丸くするアランとサトル達。

「ヒメちゃん……いつの間に……」

「……日本で事前に換金した」

そう短く告げると、車から降りてすたすたと歩いていく。四人は後を追つて車を降りる。

「今回、私以外お金は持つてない」



「……失念していた」

「ないっす」

「ないわね……」

「……借りっす」

にやりと笑ってヒメはフロントの方へ歩いていくと、チエックインを済ませる。

「……まったく、俺達は何も考えてなかったな」

「まったくよ。冷静なサトルでさえ忘れるんだもの。私達が持つて  
るわけないわ」

「隊長はきつとユリちゃんのことしか考えてなくて頭が回ってなか  
っ……ちょ、隊長！ レールガンをしまつてほしいっす！」

サトルはレールガンの銃口だけをヒロキに向ける。

「そんなもの振り回して追い出されないようにね。うふふ、サトル  
の弱点一個発見ね」

リンはそう嬉しそうに笑いながらヒメの元へと駆け寄る。

「ツインを二つ」

「わかってるわよ。四人部屋とかはいくらお金が限られているとは  
いつでもゴメンだわ。サトルと一緒にするのはいいけど、ヒロキと  
一緒にじゃうるさくてたまらないわ」

「同感」

そうヒメは言うと、ぼんと部屋のキーをサトルの方へ放り投げる。

サトルはそれを空中でキャッチした。

「また後でね。ずっと車の中だったから肩凝っちゃったわ」

そうリンは言うと、ヒメとともに歩いていく。

サトルはキーの部屋番号を確かめると、ぼんやりとしていたヒロキ  
の尻に蹴りを入れてやってから歩き始める。

「行くぞ」

「隊長、何も蹴らなくてもいいじゃないっすか……」

サトルは黙って、ヒロキはぐずぐずと愚痴をこぼしながら自分たち  
の部屋へと向かった。

サトルは荷物を部屋に置くと、一息ついた。

どっかりとソファに座り込み、懐からタバコを取り出す。

「ふー……」

火を付けて大きく息を吸い込む。肺にしっかりと煙を吸い込んでから、一気に吹き出す。

紫煙がゆらゆらと揺れながら部屋の片隅へと消えていく。

古ぼけたホテルの一室は、かつて観光地だったというだけあって、かなり綺麗に造られていた。

壁には一枚の絵がかかり、窓からは海を一望することができる。

「サーフィンでも行けたらいいんですけどね……」

「そんな余裕はない。明日の朝一で出発するとアランが言っていた。明日に影響を及ぼすかもしれないが、行きたければ一人で今すぐ行け」

「冗談ですよ。こんな寒い冬に海に入りたくないです。そこまでしてサーフィンがしたいわけじゃないですよ」

ヒロキは窓から海を見ながらぼそぼそと呟くように言った。

サトルは再び息を大きく吸い込むと、タバコの煙で輪を作り出す。

二人の間に沈黙が流れる。

やがてヒロキは手持ち無沙汰になったのか、カバンから銃器の類を取り出して整備を始める。

彼が取り出した銃器は、彼が丁寧にメンテナンスをしている一丁のライフル銃と、何丁かの拳銃である。

ライフル銃とはもちろん精霊で、高い狙撃能力を誇る彼の愛銃である。彼は今回どのようなカスタマイズをしてきたのだろうか。

他の拳銃はいわば護身用の銃器である。ライフル銃が苦手とする近接戦闘において使用する拳銃だ。普段は使わないが、万一に備えてこれらのメンテナンスを済ませておく。

「隊長」

ふと、ヒロキはライフル銃を弄りながらサトルを呼ぶ。

サトルは返事の代わりに煙の輪を吐き出す。

「本当にユリちゃんとは……戦わないといけないんすか？」

「必要があれば戦わなければならない」

サトルは毅然として言い切った。ヒロキはそのことを少し悲しく思う。

「お互い好き同士なのに、戦わないといけないなんて辛いですよ」

「俺は感情を捨てて辛いと感じることから逃げてきた。今こそ、それに立ち向かうべきときだ」

「それは……でも、隊長の場合仕方ないっすよ。目の前で両親が殺されるなんて、十分辛いことじゃないっすか」

「だが、今はそれ以上の苦しみを感じている人間はたくさんいる。

ユリも……苦しいはずだ。俺だけが苦しみから逃れるだなんて不公平だ」

「だから、わざわざ茨の道を歩むんすか？」

「……茨の道を歩んでも掴みたい未来がある」

サトルはそう言い捨てるように言うと、タバコをもみ消した。

「少し外の空気を吸ってこよう。ここは少し埃っぽすぎる」

そう言って、彼は部屋を後にする。

一人残されたヒロキは銃を放り出すと、ソファに身を沈めた。

「隊長は……やっぱりハンパないっす」

自分との格の違いを感じたヒロキは少し惨めな気持ちになるとともに、諦めるような気持ちにもなった。

「んー！ リゾート地っていいわねー！」

リンは少しマットレスの固くなったベッドに飛び込んだ。それでも布団は寮に備え付けのものよりも柔らかい。

「ずっと戦いばっかの毎日だったから、お金があっても旅行する暇がなかったしね」

「戦争中の今、行く場所がない」

「まあそりゃそうだけど、モルティブとか行ってみたいじゃない。あーハワイもいいわね。対ロベミライアにおいて軍事的な意味の少ないそういう絶海の孤島なら大丈夫じゃない？」

リンは楽しげにルームサービスの一覧を見ながらはしゃぐ。その様子を見ながら、ヒメは落ち着いて荷物の整理を始める。

「リン、先に今回の作戦の説明をしておく」

「作戦の話？ 皆がいるときにすればいいじゃない」

「これはリンだけに話したい」

厳かな様子でヒメは言った。その様子に違和感を覚えたリンは向き直ってベッドに座り、ソファに座るヒメの方へ視線を向ける。

「あたしだけ？」

「もし……もし、サトルが戦えなくなっただけ、リンが激励してほしい」

「あのサトルが？ まさかそんなことあるわけないじゃない」

「相手はユリ。データを持っているとはいえ、実力は未知数。サトルが一瞬でもためらえば、殺される可能性がある」

「サトルは大丈夫よ。あのサトルに限ってそんなことないわ」

ヒメは首をふるふると横に振る。そして、真剣な様子でヒメを見る。

「もしものとき、サトルに一番声が届くのはリン、あなた」

「うー、わかつたわよ。サトルがためらったらあたしが尻蹴り上げればいいのね」

ヒメは笑って首を縦に振る。

「そう」

「任せなさいっ！ あ、ねえねえヒメえー！ ルームサービスって頼んでいい？ 私この赤ワイン飲みたいわ！」

「高いからダメ」

「えー」

リンは口をとがらせて文句を言う。そんなリンを見つめるヒメの様子に、先ほどの厳しい雰囲気は感じられなかった。

リンはそのことに安堵する。これから先、どれだけ厳しいことが待

ち受けているかわからない。ならば、今を楽しむしかないだろう。彼女はそう決めると、戦いまでのわずかな時間を思い切りヒメと楽しもうと思った。

紫煙がゆっくりと揺れている。

空の彼方へと上っていくその煙は、薄い月の浮かぶ空へと吸い込まれていく。

煙草の先が灯っては消える。サトルはどこか遠くを見つめながら一人何かを考えていた。

「よつ。隣いいか？」

アランが煙草をくわえながら、コートを片手に現れた。

サトルは隣を半分譲ると、再び煙草をくわえてゆっくり息を吸い込んだ。

「若い頃から煙草か。最近のガキはませてるな」

そう言いながらも、アランもしっかり煙草に火をつけ、煙を揺らす。

「そういうアンタも煙草吸ってるだろう」

「いいんだよ。俺は大人だからな」

アランも大きく息を吸い込み、丸い輪っかを作り出す。

海からの風がゆっくりと煙を散らしていった。

「俺も若いときは無茶したよ」

「まだ十分若いだよ」

「いや、もう歳を食いすぎた。あまりにも荒々しい仕事場だったんで、心をすり減らしてるんだよ。寿命も10年は縮まってるな」

「俺も似たようなものだ」

サトルは煙草を壁面にこすりつけて消すと、放り投げて足で踏みつぶす。

「ま、戦場に出てるって話なら俺も君も同じだろうな」

「アンタは前線まで出てはいないだろう？」

「俺はなんでもかんでも自分の目で確かめないと気が済まない質で

な。よく弾丸飛び交う空を下に、走り回ってたもんだ。今ではもう、そこまではしないがな」

アランはゆっくりと煙を吐き出しながらそう答える。

「今回も前線まで出るのか？」

「いや、今回は遠くから観察だけだ。君らの邪魔をするつもりはない。俺はあくまで情報収集が任務だからな。戦うのは他の連中に任せっきりだよ」

サトルはそうか、と頷いて空を見上げる。

「君らは何が目的だい？ 技術転用が不可能な兵器、それを横合いから奪い取って、ロベミライアに逃亡する。ロベミライアは受け入れるつもりはないだろうし、かといって国連にも背を向ける。その意味は一体なんなんだ？」

「……」

サトルは黙って煙草をもう一本取り出すと、火をつけた。

「そうだな、まるで……その兵器そのものに何か思い入れがあるうだな。たとえば、その兵器と友達とか、恋仲であるとか……」

サトルは煙草を慌てて落としそうになる。

この男は……兵器が人間であることを知っているのだろうか。

「凶星だろう？」

「……」

アランはサトルの答えを待たず、一気に喋り始める。

「知ってるぞ。その兵器が人間だってことはな」

「一体どうして……」

「ウチの会長が調べたんだ。日本軍が危険かつ非人道的な兵器を開発してるってな。まさか、あの日本がそんな兵器を開発してるとは……驚きだな」

「……」

「Lily-2316。開発陣はユリだなんて愛称をつけて呼んでる。元はただの孤児だった少女にオートマータから奪った筋繊維やら兵器やらを内蔵して作った人造人間。人間ベースのオートマータ。

それがLily-2316だな」

「アンタに何がわかる……ッ！」

サトルは怒りを表に表しながら、アランへと迫る。

だが、アランは涼しげな表情で煙草の煙を揺らしていた。

「ああ、俺には何にもわからないだろうな」

アランはそう言うと、煙草を靴の裏でもみ消して放り投げる。

「……数年前のオキシデリボの事件は知ってるか？」

「人間のクローンが問題になったあの事件か」

「俺はあのクローンの一人だよ」

突然の言葉にサトルは信じる事ができなかった。サトルは目を丸くしたままアランの顔を見つめる。

「あの事件のクローンはおよそ五十名。そのうちの一人が俺だ。仲間も何人もいる。今は俺と同じように世に出て仕事をしてるヤツらは大勢いる。俺の一番親しかったヤツも今では難民救助運動や前線に出ている兵の世話をしている。今回の俺の仕事にも一枚噛んでいて、後で合流する予定だ」

アランはそう言うと、二本目の煙草を取り出して火をつける。

「俺たちはまさに人体実験の産物だよ。実験とすら言えないな。商品として扱われたよ。俺らは最初、人間としてではなく、人間の代替品として造られた。目的こそ違うが、やってることは日本軍と同じだな」

「……」

「だから、何となく繋がりを感じちまうんだよな。お前さんみたいに感情がどうこうって話じゃない。心の奥底で共感しちまうっていうか……はは、ジャーナリストなんてやってるのにこう語彙が少ないと苦労するよ」

アランはそう言うと、月を見上げる。

「あの暴露事件を引き起こしたのは俺だ。最初に自分がクローンと知ったときは心底驚いたよ。それと同時に恐れたね。自分の命が商品を消化するように消えるって考えると、本当に怖くなったよ。あ

のときが人生で初めて生に対する執着を感じた時だろうな。ともかく生きたい。死にたくないってな」

「今は……違うのか？」

「ああ、今も死にたくないよ。そりゃもちろん。こんな命を危険に晒すような仕事をしてるが死にたくないね。なによりも仲間を残して死ねないってのが一番かな」

「仲間を残して死ねない……か」

サトルは自分の仲間たちの姿を思い浮かべる。ヒロキ、ヒメ、そしてリン。どれも失うわけにはいかない、大事な仲間達だった。

「あいつらを残しては逝けない……。俺もそうだな」

「仲間は大事にするもんだぜ？ 誰が今回の作戦の立案者か知らんが、お前さんはしっかり仲間を守ってやれよ。ほれ」

そう言つて、アランは何か四角い黒いケースを放り投げた。

「これは……？」

「おっと、間違つても今開けるなよ？ そいつはパンドラの箱っていう電磁波兵器で、開けた瞬間、強力な電磁波を発生させてほとんどの電子兵器を無効化するって優れ物だ。ちなみにオートマータにも有効だ。まるでスタンガンを食べらつたみたいに一時的に動けなくなる。Lily-2316にも有効なはずだ。ただし、使用できるのは一度だけだ」

「これがアンタがさっき言つた癖ありの護身武器か」

「そうだよ。まだ俺は予備がある。お前さんが使うといい。使いどころは間違えるなよ？ そいつはかなり強力だから、味方の電子機器すら無効化する。使いどころを間違えると自分の武器まで使えなくなつて泣くぞ」

「わかった。心して使うとしよう」

サトルは黒いケースを懐にしまう。それほど大きくはないので、戦いの邪魔にはならないだろう。

「頑張れよ。お前さんがやらなきゃユリさんが悲しむ、だろ？」

それだけ言つと、アランは煙草をくわえたままその場を立ち去つた。



サトルはフィルターまで吸いかけた煙草を踏み消すと、ぼんやりと浮かぶ月を見上げながら座っていた。

## 第十一話 Traveling (後書き)

リンは酒に溺れながら、自分の恋はなんだったのかとヒメに詰問する。

「ヒメ……正直あたしの恋ってなんだったのよ」

「……リンは頑張った」

そんな慰めも彼女の耳には届かない。

「頑張ったってこの様じゃあ泣けるわよ」

「リン、落ち着いて」

「どこが落ち着けるってのよおッ！」

グラスをテーブルに思い切り叩きつけるが、勢いがよかったのもそれまでで、彼女はしゅんとなって尋ねる。

「まだ……チャンスあるかな？」

「まだ数日ある」

ヒメの言葉に再び気持ち盛り上がるリン。

だが、そこで一気に絶頂を迎え、崩れるように眠りへと落ちる。

「お嬢ちゃんも大変だな」

バーのマスターがヒメの苦労をたたえるように言った。

ヒメはリンの眠るテーブルを離れるとマスターのいるカウンターへと向かう。

今度はヒメが愚痴を吐き出す番である。

マスターはヒメの言葉を一つ一つ受け止めていった……。

次話、第十二話 Preparing

## 第十二話 Preparing

### 第十二話 Preparing

少し大人の雰囲気か漂う、少し薄暗い電燭。

何十本ものボトルが壁にかけられ、所狭しと並んでいる。

一人の初老の男性がカウンターに立って、ボトルの酒を傾けていた。その店の席の一角に、二人の少女がアルコール度数の高い酒をちびちびと舐めるように飲んでいた。

「ヒメ……正直あたしの恋ってなんだったのよ」

「……リンは頑張った」

頬を赤く染めながら、リンは半ば泣いて尋ねる。

「頑張ったってこの様じゃあ泣けるわよ」

「リン、落ち着いて」

「どこが落ち着けるってのよおッ！」

ガンと大きな音を立ててグラスを叩きつける。

「……ひつく、あたしの初恋はもう終わったのね」

「リン、まだ諦めちゃダメ」

「まだ……チャンスあるかな？」

リンはうつると目を潤ませながら、雨に濡れた子犬のように力無く尋ねる。

「まだ数日ある」

「そうよねそうよねそうよね！」

リンはそう連呼すると、ぱったりと倒れるようにテーブルへ倒れこむ。

「ふあゝ……サトル好きいゝ……」

そう、呟くように言いながら、リンは眠りについてしまう。

「……ふっ」

ヒメは小さなため息をつく、グラスに残っていたわずかな酒を飲み干す。

「お嬢ちゃんも大変だな」

カウンターの向こう側に立つマスターは笑いながらそう言った。

ヒメはこくこくと頷くとリンをそのまま放り出し、ボトルとグラスを持ってカウンター席へと移動する。

「お嬢ちゃんは どうしてまたアメリカなんかに来たんだい？」

今や自由の国アメリカは戦争に巻き込まれ、生と死を隣り合わせにしたような国と化している。国連の中でも比較的高い地位に国に対する攻撃はやはり激しい。

「仲間を救うため」

「ほう、というと？」

「兵士の仲間が戦場に駆り出された。それを助け出すために私達はここにいます」

「ふむ……となると脱走の手助けでもするのかい」

「……」

ヒメはこくこくと頷く。それを見て、マスターは大きな声で笑い始める。

「はっはっは！ これまた大層なお嬢ちゃんだ！」

「まだ不確定要素はある。成功するとは決まったわけじゃない」

「それだけのことを考え出すことが大層な事だ」

彼は笑って後ろのボトルケースから一本のボトルを取り出す。

「今日はお嬢ちゃんの門出を祝って乾杯といこうじゃないか」

マスターはヒメのグラスになみなみと酒を注ぎ、自分のグラスにも半分ほど注ぐ。

「それじゃあ……お嬢ちゃんの作戦成功を祈って」

「乾杯」

ヒメは軽くグラスを傾けて、半分ほどの酒を飲み干す。

「いい飲みっぷりだな」

「……」

痺れるような辛口の酒に、ヒメは少しむせそうになる。

「ちよつとキツ過ぎたか？」

「大丈夫」

もう一度グラスに口をつけ、さらにもう半分ほど飲む。

「刺激が強い。けれども美味しい」

そう言つて、残りの酒も飲み干してしまう。

マスターもグラスに半分入った酒をぐーっと一気に飲み干す。

「そうだろう。なんと言つても、こいつはちよつと有名な酒だから」

もう一度二人のグラスに酒を注ぐと、マスターは大事そうにそのボトルをボトルケースへと戻す。

「この二杯は私からのおごりだ。さあ、もう少し楽しんでいってくれ」

「ありがとう」

ヒメは椅子に座り直すと、ゆっくりと酒を楽しむことにした。

もう、もしかするところやっつて楽しむこともできないかもしれないのだ。

そう思うと、まるで末期の水を飲むかのように、ヒメは酒を飲み干した。

夜が明けた。

東の山々の間から太陽が顔を覗かせる。

海はルビーを転がしたかのように赤くきらめき、何人かのサーファー達が朝早くからサーフィンを楽しんでいた。

「む……」

サトルは小さな音を立てて鳴っていた腕時計のアラームを切る。時刻は6時。どうやら時差ボケなどの影響は小さいようだった。

隣のベッドでは、未だ大きないびきを立てて眠るヒロキの姿ある。

サトルはそれを横目に、拳銃を何丁か取り出し、弾丸の入っていない、火薬だけの弾を詰める。そして、サイレンサーを銃口に取り付

け、安全装置を解除し、弾を装填させると引き金を思い切り引き絞る。

わずかな違和感を感じさせるような小さな音と、その音からは想像もできないような衝撃が発せられる。

しかし、ヒロキはそれでも起きなかつた。

「……」

サトルは直接手を下さずに起こすのを諦め、実力行使に出ることに決めた。

窓を大きく開き、射線上に人がいないことを確認して、レールガンを取り出した。

「ヒロキ、そろそろ起きる時間だぞ」

そう優しく言いつつ、しかしその語調とは裏腹に凶悪なサウンドエフェクトが鳴り響く。

電圧が徐々に上がっていき、それは砲身を取り巻く回路上にエネルギーとして入力されていく。

そのとき、ヒロキは異変に気づいたのか、ゆっくりと目を開いた。

そして、目前に存在する脅威を脳が認識すると同時に跳ね起きる。

それとほぼ同タイミングに引き金が絞られた。

電流は磁場を形成し、それが弾体に働きかける。

結果として、瞬間的にマツハ1.6にまで加速された弾体は砲身を飛び出し、一条の軌跡を残して海へと突き刺さる。

周囲の波をも無力化するほどの巨大なエネルギーが発生し、軌跡上の海水は即座に蒸発、爆炎のごとき水煙が数十メートルにまで及ぶ高さに吐き出され、周囲のサーファー達へと降りかかる。

「おお、起きたか。おはよう」

サトルは極めて爽やかに朝の挨拶をする。だが、それとは至って対象的に顔面蒼白のヒロキが大声を上げる。

「お、おはよう、じゃないっすよ！ 殺す気っすか！？ てか、そんなん食らったら体の破片すら残らないっすよ！」

「何を言うか。銃の発砲音で起きないお前のために、やや非効率的

ではあるが確実な目覚めを……」

「下手したら永眠っす！　ってか銃を発砲したんすか!?!」

サトルは腰に下げられた銃を手にとると、上を向けて数発発射する。

「サイレンサー付きで気付くわけじゃないじゃないっすか!?!」

「弾を装填する音で起きろ。就寝中に襲いかかってくる敵はリロード音すら立てないぞ」

「ここはホテルっす！　夜中に襲いかかってくる敵なんて……」

「何を言うか。オートマータは昼夜場所関係無しに襲いかかってくる。そんな言い訳が通用すると思っただか?」

「う……まあ、それはそうっすけど……」

「だからお前はダメだと言っている。弾丸を装填する音で起きられないとは軍人失格だな。恥を知れ」

そう言い捨てると、ヒロキの方へ銃口を向け、弾倉に込められた模擬弾を全弾発射する。

情けない音が数発鳴り響く。既に銃へと込められた弾は模擬弾だと知っているヒロキは大きなあくびをする。

だが、情けない音の中、最後の一発だけが空気を切る鋭い音を立てる。そして、それと同時にヒロキの頬に一文字の傷が現れ、ぼたりと一筋の血液が垂れる。

「お、すまん。一発実弾が入っていたようだ」

「入っていたようだ、じゃないっすよ！　殺す気っすか!?!」

共に過ごしてきた何度目になるかわからないやりとりを続けながら、二人は朝食の準備を済ませると、部屋を後にした。

ホテルのレストランには、リンとヒメがすでに準備を済ませて集まっていた。

「何やってたのよ。待たせるとはいい度胸ね」

「いや、すまん。こいつがなかなか起きなくてな」

「そ、そういうわけっす」

ヒロキは微妙な作り笑いを浮かべてそう釈明する。

「……？ まあ、サトルがそう言うならそうなんでしょうね。はあ、ヒロキらしいっいたらありゃしない」

その笑みに微妙な違和感を感じつつも、サトルの言うことなのだからと納得し、リンはヒロキに背を向ける。

「そんなことより朝食が楽しみだわ。きよおのごっ飯っはなっにかっしらつと」

何とも不可解なメロディーを奏でながら、リンは半ばスキップでレストランへと入る。

ここのレストランは料理をする直前に獲った新鮮な魚の料理を出すことで、少し有名なレストランである。これは戦争中でも、続いている伝統ある地料理で、これを目当てに未だ訪れることをやめない美食家達もいるほどである。

「コックさーん！ 今日の朝ご飯は何ですかー？」

周囲の目も考えないで、リンは大きな声で厨房の方へと声をかける。しかし、厨房の中では何やら話し合いをしており、どうやら怪しげな雰囲気になっているようだった。

「あれ……どうしたのかしら……？」  
しばらくの間コック達は話し合っていたが、やがてレストランに現れた今朝一番の客に気付くと、ややすまなそうな表情を浮かべてやってきた。

「今朝海の方で大きな爆発があつたんですが、その際にいけすが壊れてしまって、飼っていた魚達が全て逃げられてしまったのです。予定ではシタビラメのムニエルをお出する予定だったので、魚達がいけないのでは料理することもできず……申し訳ありませんが、ありあわせの別メニューとなっております。何名かのお客様はこれを楽しみにして訪れている方もいらっしやるぐらいで……我々としても非常に残念ですが、今日はどうかご勘弁を」

「あら……それは残念ね……。でも、ないものはしょうがないわ。それにしても爆発だなんて……一体誰がやらかしたのかしら」



「そ、それはたぶ……ッ!?」

瞬間、ヒロキは象をも射殺するような視線を感じ、一瞬身構えた。だが、その気力に打ち勝つことができずにすぐさま戦意を喪失する。

(言ったら殺す)

サトルが表情で語るその言葉は、ヒロキの心を叩き折るには十分すぎるほどの威力を発揮する。

「たぶん？」

「……たぶん……お、オートマータの転移失敗か何かしらじゃないっすか!? ほら、よく転移ズレと変質が合わさって、テロ攻撃的な爆発が起こるじゃないっすか! きつと、今回もそれっすよ!

それにしても、被害が海上つてのが不幸中の幸いっす! 朝ご飯はなくなっただっすけど、その代わり負傷者死傷者はゼロっすよ!」

「ん……まあね。ヒロキにしては正論を言うじゃない!」

「あはは、これくらい誰もがやがて至る結論っすよ!」

「……あんまり得意気にしているとその耳切り落とすわよ?」

「ヒイツ!?」

リンよりも先に正解(?)を言い当てられたことに、リンは怒りを感じたのか、それとも単に名物料理が食べられない怒りをぶつけたかっただけなのか、あるいはその両方か、ともかくリンは不機嫌そうにヒロキにそう言った。

当然のことながら、ヒロキは萎縮して、小さくなっていじける。

「……」

そのやりとりを静かに見守っていたヒメだったが、彼女だけは真実に気付いたのか、満足と不満の入り混じったような表情を浮かべる。だが、そのことを誰にも話すことはなかった。

「……まあ仕方がない。それでもきつと彼らは美味しいものを出してくれるだろう。朝食を食べられるだけ、幸せだと思おうじゃないか!」

「そうね、残念だけど、オートマータじゃ仕方がないわ。私生活だけでなく、こんな些細な楽しみさえ奪うオートマータって、本当に許せないわ!」

そうリンは不満気と言つと、席に座つてコックに早くするようにせがんだ。

ヒメは意味ありげ視線をサトルに一度送ると、リンの隣に座つた。ヒロキはいじけながらもきちんと席に座り、やや悲しそうな表情で料理を待つた。

最後にサトルが、小さく手を合わせて視線をヒメへと送ると、ようやく席に座つた。

## 第十二話 Preparing (後書き)

ついに一行はロサンゼルス隣の隣町、サンタモニカへと到着する。オートマータと人間が戦う前線の境目、それがこの街だった。

長いこと戦地となったこの地域は、いつの間にか気候が変化していた。雨は窒素酸化物に侵され、風は黒煙を含み、そして土は灰に満たされている。

「ここも戦争に毒されているのね……」

リンは呟くように言った。

「サンタモニカピアの端っこじゃあ釣りなんかしてるオツサンもたくさんいたらしいし、大道芸の出店なんかも出ていた。サードストリートはロサンゼルスからも山ほど人が来る、最高の場所だったぞうだ。でも、それも全部ロベミライアのオートマータ兵がぶっ壊しやがった。ふざけんじゃねえよ」

アランはハンドルに拳を叩きつけながら言った。

ついに彼らは決戦の地へと降り立つ。

そこで待つのは一体何か。それは“彼”だけが知っていた。

次話、第十三話 Feeling

## 第十三話 Feeling

### 第十三話

一行はいくつかの街を通り抜けてロサンゼルスへと向かう。海を横目に、そして反対側の山々を見ながら、五人は黙って走る車の車窓から風景を眺める。

目的地が近付くにつれて、徐々に風景も険しくなっていく。

最初は山々にたくさんの緑が茂っていたというのに、いつの間にか裸同然の山がいくつも見られるようになった。

長いこと戦地となったこの地域は、いつの間にか気候が変化していた。雨は窒素酸化物に侵され、風は黒煙を含み、そして土は灰に満たされていた。

「ここも戦争に毒されているのね……」  
今まで長いこと黙っていたリンがふと口を開いた。それに答えるようにアランが呟く。

「ここはまだマシな方だ。戦場の中心となったロサンゼルスにはもう、草一本生えていないぜ。それに、川は水銀に汚染され、もう生活用水としては使えない。ロサンゼルス水道をせつかく引いたつづのに、台無しにしゃがって」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべてアランは唸る。

かつては観光・保養地としても栄えていた米国第三の大都市は、いつの間にか死の都へと変貌していた。

「今日の夕方には着く。つっても、隣街のサンタモニカまでだがな」  
「サンタモニカといえば、観光地として有名だった街だな」

「そうだよ。サンタモニカピアの端っこじゃあ釣りなんかしてるオツサンもたくさんいたらしいし、大道芸の店なんかも出ていた。

サードストリートはロサンゼルスからも山ほど人が来る、最高の場所だったそうだ。でも、それも全部ロベミライアのオートマータ兵

がぶつ壊しやがった。ふざけんじゃねえよ」

アランは力強くハンドルに拳を叩きつける。20年も前ならば戦時中とはいえ、まだ人々の往来も盛んだっただろう。だが、それも今では皆無となり、訪れるのはわずかな兵達と、それよりももっと少ないジャーナリスト、そして、それら二つを足しても足りない大量のオートマータのみであった。

「俺は……そんな風に栄えるロサンゼルスを見てみたかった。もし、この戦争が終わってまた、ロサンゼルスが楽しい街に戻ったら……俺の一年分の給料をロサンゼルスとサンタモニカにくれてやるよ」  
そう、アランは笑いながら言う。それにつられて四人も笑った。

「そうだな……そんな楽しい街ができれば遊びに行かないわけにはいかないだろうな」

「そうね。ねえサトル。一緒に遊びに行きましょうよ」

「そうだな。考えておこう」

サトルは薄い笑みを浮かべながらそう言った。リンはやや不満そうに口を尖らせて言う。

「なによなによー。あたしじゃあ不満だって言うの？」

「そういうわけでもない。だが、二人つきりで遊ぶには少し惜しいだろう。お前たち全員で遊びに來たいものだ」

「賛成っす！」

ヒロキは嬉しそうに言った。だが、それでも不満そうな表情を浮かべるリン。

「ヒメはいいけど……ヒロキも？ 私はイヤだな」

「り、リン隊長！？ ひ、ひどいっす……」

「……」

ヒメは笑みを浮かべながらヒロキの肩を叩く。

「ヒロキも仲間」

「ひ、ヒメちゃん……」

「でも、荷物係」

「ひどいっす……」

車内は爆笑の渦に巻き込まれる。

「あはは、ヒメ最高よ、それ！ ヒロキは荷物係にしましょ！」

「そうだな。ちょうどいい体を鍛える機会になりそうだ」

「……」

「た、隊長まで……」

ヒロキは目尻に涙を浮かべて訴える。けれども、その願いは当然の如く一蹴されてしまう。

そんな様子のアランは笑みを浮かべる。

「俺にもお前さん達みたいな時代があったよ。何も考えないで遊びまくって、それで馬鹿みたいなことを言っただけ……短い時間だったけれども、俺はとても楽しかったな」

「誰しもそういう時は必要よね。私だって毎日が楽しいってときがあったもん」

「俺も……お前達と共にいるときは心が落ち着いた」

「オイラは皆と一緒にいるときが最高だったっす！」

「仲間との時間は大事。それは誰しもが感じることに」

四人は改めて仲間というものの存在感を感じ、そして欠落してしまつた者を助け出すための作戦を思い返す。

「……ユリ、待っている。必ず……助け出すからな」

サトルはもう一度決意を固め直すと、自らの想い人に対する想いをより一層強めた。

車外に広がる灰色の砂浜が流れては消えていく。一行の乗る車は、はるか海岸線を目指すように、どこまでもどこまでも走り続けた。

やがて、車はサンタモニカに到着する。

一行は外に出て、その異臭に眉をひそめた。

窒素酸化物や硫黄、アンモニアの臭いが辺りに立ちこめていた。

「オートマータの血液とも言える水銀に含まれていた諸物質の臭いだ」

「普通に戦って破壊した際はそうでもなかったが……こつ集まると酷いものだ」

ところどころにオートマータの残骸のようなものが転がっていた。おそらく、わずかに派遣された米軍が討伐したものだろう。

「今まであまり疑問に思わなかったけど、オートマータって何なの？」

「……これはあんまり公にされてはいないんだが、あれは疑似的に造られた人間のようなもの、だと言われている」

アランは呟くように言った。

「はあ！？ あれのどこが人間なのよ！？ 形はそりゃ人間っぽいけど、腕からブレードが飛び出すわ、手の先から弾が出るわ、指がドリルになるわ、どこらへんが人間なのよ!？」

「内部の構造的な部分だな。頭の中に心臓部となる脳のようなコンピュータが配置され、そこから体中の諸部品に伝令が送られ、それが生産する物質を血管ならぬ水銀管を通して全身に色々な物質が送られる。そして、それを受け取った部品が動くという、まるで生き物のような構造をしている」

「キモチワルいわね」

リンは本当に気分が悪そうに言った。

異臭のおかげで本当に吐き気を催しそうになっていたのは事実であった。

「これを噛み潰せ」

アランは白いタブレットを差し出した。リンはすぐにそれを受け取るとガリガリと噛んだ。

「少しはマシになったわ」

「こいつは窒素酸化物やら硫化水素やらの毒性から身を守ると同時に、嗅覚を弱らせる効果がある」

「助かるわ」

サトルたちもタブレットを服用する。

アランは全員の用意が整ったことを確認すると、歩き始めた。

「どこへ行くの？」

「俺の仲間達が先にここへ来ているハズだ。俺はそれと合流する。お前さん達も来るか？」

「そうね、失礼させてもらおうかしら」

四人はアランの後ろについて歩く。しばらく歩くと、小さなトラックと、それとは対象的に大きなテントが見えてくる。

「遅くなって悪いな」

その声を聞いて、数人の作業着のような物を身にまとった人々が現れる。年はアランと同じか、もしくはやや幼いかということだろう。

「アラン！」

「やっと来たの？」

二人の男女が嬉しそうな表情を浮かべて駆け寄って来る。アランは嬉しそうな表情を浮かべて男と抱擁を交わし、女の方はやれやれといった表情を浮かべながら肩をすくめる。

「まったく、僕達がどれだけ待ったと思ったの？」

「悪い悪い。ちょっと途中で拾いものをしてな」

そう言って、サトル達の方を見る。

彼の指さす方を見て、ぼさぼさの黒髪の男は疑問そうな表情を浮かべる。

「子供……？　こんなところにどうして？」

コバルトブルーの瞳をその目にたたえ、金髪のおさげを下げた女も疑問そうな表情を浮かべた。

「あなた方、一体どうしてこんなところへ？」

その女性の質問に答えるように、リンは言った。

「そうね……しいて言うなら、仲間を助けに？」

「仲間……ねえ。お嬢ちゃんの仲間らしいものって言ったら、ここで戦ってる兵隊のことかしら？」

「いやいや、どうやら例のアレと知り合いらしいんだ」

「へえ……日本人の子供とアレに接点がね……。戦争反対派の日本



らしくないわね」

黒髪の男はサトルに手を差し出した。

「僕はレウオン。気軽にレンって呼んでほしい。君は？」

「俺は……サトル。光間サトルだ」

「コウマサトル……コウマサトル……」

そう、名前を噛み絞めるように数回繰り返すと、レンは笑って手を握る。

「よろしく、サトル」

ここでは、派遣された少数の軍人と、数人の文民が混在して生活していた。

数人の文民とは、さっきの二人を含めた四人で、それぞれ名前をレウオン……レン、リサイア……リサ、ウィリアム……ウィル、アリア……アリスといった。

アランによると、同じ施設の出で、同じく社から仕事で派遣された者達だという。彼の言っていた仲間というのは彼らのことで、それぞれ人当たりのいい性格をしていた。

「まったく、こんなところに派遣してどうするつもりなんだかね」  
ウィルは嘆くようにアリスへとそう言う。

「そうですね……でも、会長さんのことだから、きっと考えあつてのことでしょうね」

四人は全員がオキシデリボ社の社員で、それぞれ色々な戦地に派遣され、各所で救助活動などを行っているという。もともと、基本的には極端に危険な戦地に派遣されることは稀で、そういう場合は何か特殊な任務が伴うことがほとんどだった。

今回も、戦場のすぐ隣という極めて危険な場所に派遣されたわけで、危険な任務があることは間違いないのだが、まだ彼らも知らないようだった。

「いっつも直前に連絡よこすから、やりにくいっいたらありやしない

わ

「まあまあ、彼女も色々忙しいんだし、しょうがないんじゃない？」  
レンはリサをなだめるように言う。それで、少し彼女は落ち着いたが、それでも不満気な表情を浮かべる。

「まあまあ。俺達も彼女に助けられたわけだし、多少の無茶は聞いてやろうぜ？」

アランはそう笑いながら言うと、ビールをあおる。

しばらく五人は自分達の仕事に関する愚痴や、久しぶりの再会を祝った後、今度はサトル達へと興味を向ける。

「元日本軍だつてね。あの日本がこんな子供の兵隊を使っていたとは驚きだね」

ウィルが驚きを込めて言う。日本のイメージは、平和的で戦争というワードから遠く離れたモノだというイメージが強かった。

「でしょ？ でも、私達、思いつきり戦わされていますー」

リサは器用にナイフでリングの皮を剥き、切って全員に配った。

「ナイフも使い慣れてるんですね」

「そうね。もう私の手の一部だと思っちゃうくらいナイフとは長いこと一緒に暮らしてきたのよ」

「俺も似たようなものだ。こいつを抜き、引き金を絞ることに余計な考えはいらない」

そういって、サトルは腰に下げられた銃をぼんぼんと叩く。

「私達も一応護身用に武器は持つてるけど、使い慣れてなくていざというときに抜けないわよね」

「その割に、あの時は皆自然に銃乱射してたけどね……」

あははは、と五人の間に乾いた笑いが走る。あの時、というのがなんなのか知らないサトル達は首を傾げた。

「あの時は必死でしたからね」

「そういうときは体の中で眠っている何かが目覚めるんだよ」

アリスとウィルの意見がすっかりがっちり合う。その言葉に、リサとアランもうんうんと頷いた。ただ、レンだけはちょっと後ろめ

たげな表情を浮かべる。

「一歩間違えたら、人を殺しちゃってたんだよ？」

「ボク達も殺される一歩手前だったけどね」

レンの言葉にウィルはすぐさま噛みついた。

「ん、まあそれは否定しないけどさ……」

「それはそうと、あなた達は人を撃つたりしたことある？」

リサがさも普通のことを尋ねるような口調で四人に尋ねた。その言葉に、リサを除く四人はぎよっとする。

「り、リサ！？ それはその、あんまり聞いちゃいけない質問だと思っよ！？」

「そう？」

リサは不思議そうな表情を浮かべる。アランはやれやれといった諦めを顔に浮かべて肩をすくめる。

「大丈夫よ。あたし達は人と戦うことが仕事じゃないわ」

「そうっすね。基本的にオートマータとの戦闘がメインっす」

「……」

三人はそう、頷く。だが、サトルだけはやや青ざめた表情を浮かべていた。

「俺は……ある」

「え……？」

「ユリを撃つた。ユリに襲われたとき、俺は反射的に銃を抜いた。

だが、どうしても即座に引き金を引くことができなかった。ユリを

……いや、人を撃つのが怖かった」

サトルはそう、罪を告白するような口ぶりと言った。

「一瞬遅れたが、なんとか引き金を引いたもののかすっただけだった。次の瞬間には、俺はユリの攻撃を受けていた」

彼の表情はみるみる青ざめている。それほどまでに、思い出すのも恐ろしいことだったのだろう。

「悪い、ちよつと外に出て風に当たってくる」

そう言い残すと、サトルはビールのジョッキを置いて、一人外へ飛

び出した。

「あれ……あれ？　もしかして私のせい？」

レン達四人の視線がリサへと集中する。

ウィルなど呆れるように額を押さえていた。

「僕、ちよつと行ってくるよ」

そう言い残すと、レンもジョッキを置いて、テントの外へ走り出した。

「ふう……」

サトルは煙草を取り出すと、煙を大きく吸い込んだ。

「大丈夫？」

レンがテントから駆けて来る。サトルは少し視線を送ると、すぐに夜の漆黒の彼方を見つめる。

「なんでもない」

「ホントかな？」

彼は優しい表情を浮かべてサトルの元へと歩み寄る。

レンはサトルの隣に腰かけると、煙草の紫煙を煙たがるようなことはせず、熱心に話を聞く。

「レンは荒事は苦手そうだな」

「そうだよ。僕は荒っぽいのは大分苦手だね。でも今まで荒っぽいことばかりだったから、結構苦労したよ」

そう言う彼の表情には明らかに疲れが見える。

「レンもアランと同じなのか？」

「そうだね。僕達は同じ場所で同じ日に生まれたんだよ」

彼は遠い過去を思い返すように、どこか虚空を見つめる。

「僕達はね。誰かの部品となるために作られたんだ」

「例のクローン事件だな。それについては知っている」

「うん。けれども、僕達はそのことを事前に知ってしまい、逃げ出すことを選んだんだ」

レンは何かを思うようにゆっくりと語る。

「ともかく、なんとか逃げ伸びた。無事に島の外に脱出して、そして一人だけで大陸に降り立ったんだ」

「一人だけでか……？」

レンはこくこくと頷く。

「最初、死のうとさえ思ったよ。自分の大事な人までもを失って、そしてその人が大事だったことに気付いて……でも、後から来てくれた。ちゃんと生きたまま、こっちに来てくれた」

「がっしと、レンは手を握りしめる。それは、大事なものを掴みとったことの再確認だろうか。」

「だからさ……君もユリさんを助け出さないとダメだよ」

「……は？」

ユリのことを彼に喋った覚えはなかった。そのことに、サトルは疑問を感じる。

「読心……？」

「マインドリーディングじゃないよ。僕の場合はちょっと特殊なブレコグニション。ちょっと使うのに不便する能力だけど、君の未来はちゃんと視えた」

そう言うと、レンは立ち上がって、空を広がる満天の星を見上げる。僕が視た未来は一つ。無残にも殺され、そして仲間達も後悔と悔恨の念を抱いたまま死んでいく姿。けれども、覚えておいて。僕の場合は“イフ”の未来を視る能力。絶対に決まった未来なんてものはない。僕はこの能力で幾度となく死んでしまっ僕自身の姿を視てきたけど、未だこうしてここに立って生きている。でも、もし君が今の覚悟のままで行ったら、間違いなく死んでしまう。けれども、僕がこうして忠告した。だから、君はその未来を変える努力をする時間を得ることになる」

レンは空に輝く星々を見上げながら、両手を広げる。

「君の武器は仲間との絆。それ以外に必要ない。パンドラの箱は……最後までとっておくんだよ。使うべきときはそのときじゃない」

「仲間との絆……か……」

その言葉を噛みしめるようにサトルは呟いた。

「きつと、今の君なら勝てると思うよ」

「視えないのか？」

「言ったでしょ、不慣れた能力だつて。僕はこの能力を自由自在には使えない。視れるときと視れないときがあるんだよ」

「む……確かに不慣れた能力だな」

「でしょ？ でも、とっても大切な力だよ」

レンは星空から視線を離すと、まっすぐにサトルのことを見つめる。

「頑張つてね、サトル。僕は君のことを応援しているよ」

最後にそう言うと、レンはテントに歩いていった。

サトルはフィルターの中ほどまで火がついた煙草を踏み消すと、彼が見た星空を見上げた。

## 第十三話 Feeling (後書き)

そして、ついに彼らはユリとの戦いを前日に控える。

長い道のりを振り返り、サトルは思い返す。

ここまでやってきたのも、偏に愛する人を救うためだった。

「これ、持っていないかい」

そうやってリンが差し出してきたのは、彼女が常に何本も携帯している銀狼の中の一本。

そこに彼女が託した想いはなんだろうか。

決戦前夜、真円に輝く月を見上げながら彼は何を思うだろうか。

「やっぱり、起きていたんだね」

そこにレンがやってくる。彼はサトルの隣に座って月を一緒に見上げる。

二人は最後の時を過ごす。彼の見た未来は変わっているのだろうか……？

次話、第十四話 Struggling

## 第十四話 Struggling

### 第十四話

数日が経過した。

未だ戦場は膠着状態で、際限無く湧き上がるオートマトンを倒し、そして湧き上がるオートマトンに押されの繰り返しだった。

サトル達も戦闘に参加し、サンタモニカの兵達と共に戦い続けた。

『サトル、12時23分43度、11時33分52度、5時15分32度』

同時に三方向から繰り出される攻撃に、サトルは大きくバックステップで下がり、両の銃を抜く。

巨獣が咆える。食らいついた弾丸はオートマトンの腹部を食い破り、激しく食い散らかす。

『ヒロキ、23時44分16度射撃』

『了解すす！』

精霊から放たれた一撃は、まさにリンを背後から襲おうとしたオートマトンの頭部を叩き割る。

「ほらほらほらあッ！」

リンは銀狼を両手に携え、次々にオートマトンの武装を剥がしていった。

四人の怒涛の攻撃に、サンタモニカ兵達は思わず息を飲む。

「凄い……これが日本のジュニアチームの力……」

そのエリアを荒らしているオートマトンを一通り排除したところで、全員は一旦サンタモニカへと引き上げる。

「ふう……」

自陣に戻ってきて、サトルは大きく息を吐いて煙草に火をつける。



「どこもオートマータは一緒なのね」

「作ってる国は同じっすからね」

リンとヒロキも渡されたスポーツドリンクで喉を潤していた。

「……すー……すー……」

超能力を激しく使ったヒメは休憩のために睡眠をとっていた。

「こっやって寝てると、可愛らしいですね」

「まあ、君の可愛さには適わないけどね」

ウィルとアリスは兵士達にタオルを手渡しながらそう言った。

「戦績はどんなもんだい？」

「オートマータを百体は片付けた。ここは本当にキリがないな」

アランはサトルの感想を聞きながら、コンピュータにテキストを打ち込む。

一行は各自の方法で休息を取りながら、それぞれの思いに耽る。

サトルは、翌日に控えるユリとの戦いのことを考えていた。

数日前のレンの言葉。それ以来、彼は特に何かを言うてくることはない。

仲間との絆を信じて戦えという彼の言葉は、サトルの中で一つの思いを形作っていた。

サトルは腰に下がっている二丁の銃を見た。

それは、事前にヒロキが調整をした銃。彼の思いはそこに全て込められているのだろう。

「サトル」

リンがサトルの名を呼ぶ。サトルは立ち上がると、リンの元へと歩み寄る。

「どうした？」

「これ、持っていなさい」

リンが差し出したのは一本のナイフ。彼女が常に何本も持ち歩いている、銀狼の中の本だった。

「アンタ、いつも銃と格闘ばかりでしょ？ 少しはスマートに戦いなさいよ」

「悪いな」

リンは狼の群れの中の一匹をサトルへと託す。

「もう、明日でしょ？」

「ああ」

ユリが戦いに参加するのは明日の晩である。彼女を捕えたとしたら、そのときを除いて他はない。

たった一度だけのチャンス。サトルはそれを掴まなければならない。リンの銀狼を強く握りしめる。それを腰に差していた自分のナイフと取り換えると、サトルはリンの隣に座った。

「リン……俺達はユリを止められるのだろうか……」

「アンタが何言ってるのよ。アンタが止めるんでしょ」

「ああ、わかっている。だが……」

「何のためにあたしのナイフを渡したと思ってるのよ。アンタが勝てるようにでしょ」

リンはスポーツドリンクを一気に飲み干す。そして、ボトルを思い切り叩きつけた。

「サトルが勝たなきゃ、あたしは怒るわよ」

「そう……だな」

「さ、今日はもう寝ましよう。ゆっくり休んで、明日に備えるのよ。そうリンは言うと、立ち上がって自分にあてがわれた寝床へと向かう。

「……俺は本当に勝てるのだろうか」

サトルは最後にそう、自分に問いかけるように呟いた。

だが、彼のその言葉に返事をする者はなかった。

月が高く上る。

汚い雲を透かすように、汚れた大地を照らすように、汚された水を映すように月光は降り注ぐ。

サトルは、気付くとテントの外に立っていた。

へドロが溜まった水たまりを蹴り上げながら、サトルは乾いた鉄骨に腰を下した。

「月……か……」

自然と、日本でリンと共に見た月が思い出される。

一カ月が経過していた。月は満ち欠けを繰り返し、そして再び真円へと姿を戻す。

まばゆい月の周りには、身を潜めるように星々が輝いていた。

サトルは懐から煙草を取り出すと、ライターで火を点す。

うつすらと紫煙が上がっていく。まるで月を目指すように、星々の大海へ飛び込むように。

「サトル」

ふと、幼さがいくらか残った青年の声が響く。

サトルは振り向くこともなく、ただ煙草を吸い続ける。

「やつぱり、起きていたんだね」

「ああ」

リンはサトルの元まで歩み寄ると、サトルの隣に腰を下した。

「眠れない？」

「ああ」

サトルは短く答える。

月はあるなにも静かで、それでいて朧々と輝いているのに、彼の精神は激しく熱く昂ぶっていた。

「確か日本ではチームのリーダーをしていたんだよね？」

「ああ。だが、こんなにも落ち着かないのは初めてだ」

「そうだろうね」

明日の晩、全てが決まる。

それは彼のこれまでの人生を変える、大きな転機。

そして、これからの人生を変えるターニングポイントでもある。

サトルはリンのように、銀狼を指先で弄びながら呟く。

「俺は……ユリを助けることができるのだろうか」

「僕にも、未だその答えは視えない」

「本当に不便な能力だな」

サトルは腰へナイフを戻すと、煙草を手にとって煙を吐いた。

「あはは、まあね」

レンは笑いながら困ったような表情を浮かべる。

「サトル。僕にはね、君のことが他人事とは思えないんだよ」

レンは立ち上がると、足の爪先で地面をほじくり返しながら喋る。

「大事な人のために立ち向かう。そして、大事な人のために戦う。

数年前の事件、あの時僕はそうだった。そして、今の君も大事な人

のために立ち向かい、大事な人のために戦う。僕と君は……似てい

るんだ」

「そうかもしれないな」

「僕は数日間の間、君のことを見てきた。本当ならば戦う必要のな

いオートマータとの戦いにも手を貸してくれたし、仲間を気遣って

仲間には負担をかけないように立ち回る。そして、仲間にとても信

頼されている」

「そう……かもしれないな」

サトルはすっかりフィルターへと火が付いてしまった煙草をヘドロ

溜まりに放りこむと、二本目の煙草を取り出した。

「当時の僕も、面倒なことを押し付けられたアランに付いていった

り、リサに使いつ通りにされたり……僕の場合はちょっと違うかな

でも、仲間からの信頼は得ていたと思う。僕は……君に僕を重ねて

見ているのかもしれない」

「……」

「だから、君には死んでほしくないんだ」

「そうか」

サトルは煙草に火を付けると、大きく吸い込んだ。

「できれば、行ってほしくない。せつかくこうして友達になれたん

だ。できることなら……ずっと友達でありたい」

「それは……俺が死ぬと思ってそう言っているのか」

「……」

レンはこくこくと頷いた。

「この前は応援してる、だなんて言った。でも、僕には君が死んでしまふ未来しか視えない！ 無事に助けだす未来が……視えない……」

「そう……か……」

サトルは汚い水たまりに映った月を見下ろした。

それはゆらゆらと揺れながら、不安げに輝いていた。

「君が誰に殺されてしまふかはわからない。でも、何度も何度も君が死んでしまふ未来ばかりが視える。そんな未来しか……視えないんだ」

「まだ……俺には何か足りないのか？」

「君の体に血が広がって……そのまま倒れ伏す未来が視えたんだ」

「それは……俺がユリに殺されるということか？」

「わからない。でも……その光景だけが視えた」

サトルは黙ったまま、月が映る水たまりを足でつつく。

ゆらゆらと不安定に揺れる月は、たちまちかき消え散っていく。

「嫌な予感がする。とてつもなく、嫌な予感が……」

「それでも……俺は行かなければならない」

サトルはそう呟くと、煙草を踏み消した。

「寝る。これ以上は明日に響く」

「……わかった。おやすみ、サトル」

「……おやすみ」

サトルは小さくそう呟くと、テントへと戻る。

レンはサトルが捨てた煙草の吸い殻を指で摘みあげながら、不安げな表情を浮かべて、どこもしれない虚空を見つめていた。

## 第十四話 Struggling (後書き)

ついに運命の日が訪れる。

彼らに待っているのは死か、あるいは未来か。

それは誰にもわからない。

「いよいよね……」

「ああ……」

サトルとリンはヒメが予想した、ユリの予想最終到着地点へと移動する。

天気は雪の混じった雨となり、しとしと、と地面を濡らしていった。

次話、第十五話 Deciding

## 第十五話 D e c i d i n g

### 第十五話 D e c i d i n g

翌日になった。

空は灰色の雲が覆いつくし、今にも雨でも降ってきそうな天気だった。

サトル達は今日はサンタモニカ兵とは出ずに、キャンプの方で休息を取っていた。

いや、正確に言えば作戦会議だろうか。今回の作戦は夕方から夜にかけての夜戦である。

この調子では、今夜は月も星も出ることはないだろう。

「これ、夜戦用の照明灯」

レンがクリスタル状のライトをサトル達に手渡す。強力な内蔵バッテリーにより、広範囲を強力に照らし出すライトである。これをいくつか転がしておけば、十分な明かりを確保することができる。

「ありがとう」

「僕たちにはこれくらいしかできないけれど……頑張つてね」

サトル達はレン達に礼を言うと、キャンプ場を後にする。

時刻は15時。ヒメが調べた記録には、今日の17時より作戦が始まると書かれていたようだった。

残りの二時間で、サトル達は十分な準備をしなければならない。

「ねえ、サトル」

リンはサトルと二人で歩いていた。

ヒロキ達は射撃スポットを確保するために、サトル達は戦場の情報を頭に叩き込むためにそれぞれ別々に行動を取っていた。

「いよいよね……」

「ああ……」

鉄骨がむき出しになったビルが何十本も立ち並ぶ。

元は規則正しく並んでいた高層ビルだったのだから、度重なる戦いによってその姿はわずかな面影のみをそこに残っていた。

「ヒメによると、この辺りらしいわね」

ヒメが予測したユリの最終到着地点である。ユリはたった一本の刀だけを持ってこのロサンゼルスに舞い降り、オートマータを破壊しながら市中を一周する。ヒメはこのルートを、レン達が書き記したオートマータの分布図を元に予想。最終的に今リンが立っているこの広場の辺りまでユリは戦闘を行い続けると予測した。

つまり、この場所で最後に戦闘を行い、そして自陣へと帰還するのである。

それは、ここで待っていればオートマータを全て排除し、疲弊した状態のユリと対峙することが可能であるということの意味しているのである。

「疲れ切った状態を襲うっていうのが何ともアレだけど、まあしょうがないっちゃしょうがないわね」

「俺達のもっとも確実な方法を取る。ただそれだけだ」

ヒメの話によると、それでも五分五分ということとのことである。それほどまでにユリの戦闘能力は高い。

「ビルの中に入って待ちましょう」

リンはサトルを手招きすると、近くの崩れかけたビルの中へと足を踏み入れた。

そこからはちょうど広場が見え、ユリの戦う様子を見るにはちょうどいいだろうといえた。

「あとは……待つだけね」

リンは適当な場所に腰かけると、サトルも座るように促す。

サトルはリンの促すままにリンの隣へと腰かけた。

懐から煙草を取り出す。そしてそれくわえた横からリンがライターを取り出して火をつけた。

「気が利くな」



「たまにはね」

サトルは大きく煙を吸い込むと、真っ白い煙を吐き出した。

「今まで長かったわね」

「そうだな」

ユリとの出会い、共に過ごした日々、別れ、そして決意……。

ここまでに至る過程はまさに数カ月にも渡る。

あつという間のようで、とても長い日々。だが、ついに決着を付けるときがきたのだ。

「今日、もしかすると全てが終わってしまうかもしれないのね」

「けれども、俺は諦めない。明日への道は続いている。途切れることなく続いている」

それは、強い決意。必ず最愛の人を助け出し、そして未来をその手に掴み取るという強い想い。

サトルはそれを胸に刻み込むと、目を瞑る。

(ユリ……必ず助けだすからな……)

そして時が経過した。

曇っていた空からはぽつりぽつりと雨が降り出し、しっとり腐った大地を濡らしていた。

そんな外を見つめながら、リンはぽつりと文句を言う。

「ちえ、雨が降るなんてついてないわね」

「そうだな」

徐々に気温が下がりがつつある。中には多少、白い粒も混じっている。このまま気温が下がり続ければ、雪に変わるかもしれない。

途中、幾度か徘徊していたオートマータを撃墜しつつ、ユリが現れるのを待っていたが、いつまで経っても現れる様子のないユリに、リンは痺れを切らしたのか、大きなあくびをする。

「本当に来るのかしら」

「ヒメを信じるしかないだろう」

『リン、油断しないで』

ヘッドセットからヒメの声が聞こえてくる。リンは適当な表情を浮かべながらはいはいと頷く。

「でも、本当に来るの？ 戦ってる音とか聞こえてこないし、オートマータも相変わらずあたし達に戦いを挑んでくるけど」

『私はプレコグ。クレヤボヤンじゃない』

「そうね」

リンはブーバーと文句を垂らしながらヒメとの会話を楽しみ始める。

『隊長、おいらも一応さつきから色々な方向を見て回ってるんすが、全然それらしい動きがないっす。もしかすると、日本に騙されたんじゃないかとか……』

「……」

サトルの中にもその考えはあった。もし、日本軍が嘘の情報をわざと流していたとすれば、ここにユリが現れないのも納得がいく。

だが、なぜそんなことをするのかわからなかった。

そう考えると、ここにユリは間違いなく来ているということである。

『サトル、リン、大きいのが来る……！』

「ッ！」

その声を聞いて二人は急いで武器を構える。

彼女の言い方から、やってくるのはユリではないだろう。だが、だからといって油断することはできない。

『ビルから出て！』

ヒメの言葉を聞いて二人はビルを飛び出した。

次の瞬間、物凄い音が響き、ビルが斜めに傾いた。

「嘘……でしょ？」

リンの言葉とは裏腹に、その怪物はビルをなぎ倒しながら姿を表す。

「大型……それも特別級か……ッ！」

オートマータは一般的に大きさをランク付けされている。

小型、中型、大型とあり、小型というのは最も小さいタイプで動植物・昆虫などの姿を模したものである。数十年前はこのタイプが一

般的であった。

そして、中型とは人間を模したオートマータである。最近はこのタイプのものが最も多く用いられており、ロベミライア軍の主力兵器となっている。

それよりも大型の種類……例えるならば、象や鯨のような大きさをもつ種類が近年増加しつつある。それは、中型のように小回りが効かず、かつ動作も緩慢だが、耐久性と攻撃力を考えれば、間違いなく最強である。

さらに大型はいくつか分類され、その中でも一際大きい……まるでビルのように大きな種類を特別級と呼ぶ。

体長およそ10メートル。重量数十トンというその巨体は、腕を振るうだけで山を震わせ、一度内蔵された兵器を起動させれば街一つが消えるとさえ言われている。

「これは……骨が折れるな」

「ぼやぼや言ってる場合じゃないわ。来るわよ」

二人はほぼ同時に跳躍する。そこを狙ったかのように、胸部に搭載されたミサイルポッドより小型ミサイルが放出される。

誘導性能を持つホーミングミサイルは一度避けただけでは回避しきれない。どこまでも追い続ける誘導能力を持つ、厄介な平気なのである。

「鬼ごっこは追いつかれなければいいのよ!」

リンは迅速の動きでビルの合間を縫うように走る。次々とミサイルはビルの壁にぶつかりながら、爆発音を残して消えていく。

「そして……触れられなければいい!」

清羽を乱射しながら、レンは次々とミサイルを迎撃する。高い爆発能力を持つてはいるものの、それはある程度の衝撃を受ければ空中で爆散してしまう。ミサイルは対象へと追いつく前に次々と爆発を起こして落ちていく。

「今度はこちらの番だ」

間接部位を狙って巨獣のトリガーを引く。間接部位はたくさん動

きを必要とするために、どうしても耐久力が落ちてしまう。強力な防御力を持つているとはいえ、それは大型特別級のオートマータといえど同じだった。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA! !」

狂気ともいえるような悲鳴が轟く。だが、巨獣の攻撃によっても間接を破壊することができず、表面の装甲を傷つけただけだった。

続いて、背中ポッドが大きく開く。そして、ブレードを大きく開き、ヘリコプターのプロペラのように回転しながら二人の方へと迫り来る。

「スラツシユリッパ! ! ! 厄介なものを……」

ミサイルとは違い、高い貫通能力をもつブレードは多少の攻撃ではびくともしない。ビルにぶつけてもビルの方が耐え切れずに切削され、崩れ落ちるだけである。

「ちッ! !」

リンは紙一重の動きで刃を回避する。だが、ブーメランのように刃は戻り来て、再びリンのすぐそばをかすめる。

『飛んで! !』

リンは指示通り高く飛び上がる。同時に、ブレードから火が上がる。劣化ウラン弾をヒロキが放ったのだろう。強力な貫通能力を持つ劣化ウラン弾は、特殊軽金で作られているとはいえ、一撃でスラツシユリッパを破壊する。

「私よりサトルを! !」

サトルもなんとか身をかわしながら攻撃を凌いでいた。だが、ブレードの周囲に発生する真空波によって、少しずつ傷を増やしていた。『隊長! ! その銃にはオリハルコンを使ってあるっす! ! なんとかガードを……』

「無理に決まってるだろう! !」

サトルは巨獣を唸らせながらなんとかブレードを回避する。だが、超炸裂の爆発力をもってしてもブレードの軌道を変えるのがやっとで、破壊するまでには至らない。



正面へと飛んだ。

「ユリ！」

サトルは大きな声で叫ぶ。オートマータの巨体の至る所から銃口が姿を見せる。

一瞬後にはばらばらのひき肉が残されるかと誰もが思った。

だが、一瞬先を見たヒメははつと息を飲む。

ユリが手に持った刀を振るう。その次の瞬間、誰もが信じられないような光景を目の当たりにする。

たった一振り、ただそれだけでその巨体が縦に割れ、崩れ落ちる。

およそ10メートルの巨体が刀の長さという、物理的な問題すらも無視して真つ二つになるということに、その場にいた全員が驚愕し、啞然とする。

『戦帝……完成していた……』

「るーらー？ 何よそれ！ 一体なんなのよ！」

ヒメは口早に説明を始める。

戦帝とは日本軍が極秘裏に開発していたギミックブレードである。

従来のブレードタイプの武器の常識であったヴィブロ機能を撤廃したその武器は、ガリアン機能という今までにないタイプのまったく新しい機構を搭載した。

刃を数十枚に分割させ、中心を伸縮自在のワイヤーを通すことにより、刀身そのものが数倍の長さに分かれる機構をとっている。

切削能力はヴィブロタイプのブレードよりも落ちるものの、その射程距離は比較にならないほど伸びた。

また、ヒート機能を搭載することによって、熱による溶解という新しい切削方法を取っている。

従来の切削能力に加えて熱による溶解機能を持ったその刀で斬ることのできないものはほとんど存在しないだろう。

だが、刃の軌道が鞭状になるため、自身の体を傷付けかねないという理由で、ガリアン機能を搭載することはとても難しいといわれていたのである。

「どうしてそのガリアン機能つてのが搭載された剣をユリが持つてるのよ！」

『おそらくあのジャケット……オリハルコン繊維で編まれている』  
オリハルコンとは、とある実験の中、偶然で精製された金属であり、ダイヤモンドよりも高い硬度を持つ謎の金属である。

熱にも大変強く、一般の物質がプラズマ化してしまう超高温にも耐えるその金属は、加工することが難しい半面、防具として用いることができればおそらく最強であると言われている。

もつとも、加工するには核融合炉のような超々高温状態下におかなければならないため、誰もが使用を諦めた素材である。

『まさかそんなものが作られるなんて……あの二つは世界最高峰の歩兵兵器だといえる……』

白銀の軌跡を残しながらユリが地上へと舞い降りる。

月はすぐに姿を隠し、再び辺りをぱらぱらと白い雪が舞い始めた。

「……ユリ」

彼女は冷ややかな表情でサトルを見つめる。

「サトルさん……逃げてください」

彼女はそう言つと、ブレードを構えた。

「り、理性が維持できるのも数秒だけ……です」

「俺は逃げない。お前を助け出す。それ以外はない」

サトルは強くそう言つた。瞬間、彼女の表情は寂しげなものになる。

「私は……あなたを殺したくありません……お願いだから……」

「断る」

ユリは涙に表情をくしゃりと歪ませる。

「……えぐっ……ひぐっ……サトルさん……ごめんなさい……さようなら」

そう言い残すと彼女の姿が消える。

その瞬間白銀の軌跡がサトルへと襲いかかる。

寸でのところでサトルは銃を交差させてガードする。

『隊長！ オリハルコンを使っているとはいえ、メッキにしてある

だけっす！ あんまり頼らないようにしてほしいっす！」

「それを先に言え！」

サトルは大きく後方へ後退する。続いて黄金の光が一条伸びる。

ユリは思い切りブレードを叩きつけた。サトルは再び銃で受け止めた。

二人の眼前で火花が飛び散る。

「お前の目は俺が覚ます！ 絶対に、絶対に二人で生き残るんだ！

そして……また共に暮らそう！」

ユリは高く高く飛び上がり、大きく刀を振るった。

サトルは巨獣を放った。空中で数十の爆発が起こり、うねる刃を受け止め止める。

『6時27分34度！』

右方向から突然襲いかかる刃をわずかに身をひねらせて回避し、刃の元へと清羽を乱射する。しかし、黄金のジャケットに身を包んだ彼女に攻撃は通らない。

「巨獣でも大丈夫か……？」

『わからない……でも、使うしかない』

「ちっ！」

サトルは強く舌打ちすると、巨獣のトリガーを引いた。

「あうっ！」

暗闇の向こう側で小さな悲鳴が上がる。死なない程度に有効ではあるようだ。

「サトルの巨獣で死なない人間なんていたのね」

リンも俊足を生かしてユリへの距離を詰める。

両手に光る銀狼を震わせて、リンは思い切りナイフを投擲する。

「ッ！」

ユリは戦帝を引き戻すと、飛び交うナイフを撃墜した。そして、そのままの動きでリンへと刃を振るった。

『1時2分2度』

限りなく真正面からの攻撃。リンは俊敏な動きを生かして迫り来る



斬撃を回避する。

「あたしのナイフは効かない！ サトル、お願い！」

サトルは巨獣のトリガーを引いた。それをユリは戦帝を振るって打ち落とした。

「クソ……あの剣がある限り、こっちの攻撃も通らないな……」

「……」

ユリは黙ったままブレードを振り続ける。もはやその表情に感情はない。

「ッ！ さつきから攻撃が少しづつ正確になってきてるな……」

今まではだいたいの位置を思い切り薙ぎ払うような攻撃が多かったが、気付けばその攻撃は徐々に正確さを増し、回避を行うことは困難になっていた。

「ユリがこっちの動きに付いてきてるのよ！」

「リン！ 同時に攻撃をするぞ！ お前のナイフでユリのガードを誘発して、こっちが本命を叩き込む！」

「了解ッ！」

二人は一度合流すると、再びユリへの距離を詰め始める。

「……」

ユリは相変わらず無表情で刀を振るう。鞭のようにしなる攻撃は白銀の軌跡を残してサトル達を近付けまいとある一定のフィールドを形成する。

だが、それをなんとか侵食しようと、二人はさらに一步、一步と距離を詰めていく。

「いくわよ！」

ユリは懐から三本のナイフを取り出すと、それを思い切り投擲する。それとほぼ同じタイミングで、サトルは戦帝の柄を狙って巨獣を咆哮させる。

完全にタイミングの合った攻撃。一方がフィールドを崩し、そしてもう片方がフィールドを超える攻撃。それは鉄壁かと思えたフィールドを通り抜けると、ユリの刀の柄を吹き飛ばす。

「ああっ！」

さすがに柄への直接攻撃は堪えたのか、ブレードが手から吹き飛ばされる。

「やった！」

『サトル！ ブレスレットを！』

ユリの腕に輝く銀のブレスレット。それが彼女を戦わせている原因だという。

サトルは懐からリンのナイフを取り出すと、ブレスレットの内側へと刃を滑りこませ、一気に切断する。

甲高い金属音が鳴り響く。真ん中のあたりでぷつりと切れたそれは、いくらか降り積もった雪の中へと埋没する。

『やったっす！』

突如、糸が切れたようにユリの体が崩れ落ちる。

サトルはそれを慌てて抱きかかえる。

「ユリ！」

「サトル……さん？」

ユリがうつすらと目を開く。そこにはもう、狂気につき動かされて、狂ったように猛る彼女の姿はなかった。

「ユリ……大丈夫か？」

「……私、サトルさん達に酷いことをしてしまいました」

「いいんだ。あれはお前であってお前じゃない。気にすることはないんだ！」

サトルはユリの体を思い切り抱きしめ、口付けを交わす。ユリもなされるがままに目を瞑る。

「もう……誰かを傷付けなくていいんですか？」

「ああ……。もう、そんな必要はない。誰も殺さなくていいんだ」  
サトルはユリの体を抱き上げる。あたりは彼女の髪と同じ純白の欠片が散っていた。

「サトルさん……ありがとうございます」

「礼を言われる……」

『サトル！ 危ない！』

静寂の中、突如鳴り響く火薬の爆ぜる音。

真っ白なカーペットの上に、数滴の赤い血がこぼれ落ちる。

「……え？」

サトルは自分の体を見下ろす。胸の辺りに赤い穴があった。

「サトル……さん？」

サトルはユリの体を抱きかかえたまま、ゆっくりと後方へ倒れる。

『あ、あれは！？』

ヒロキはその銃を撃った人間を探し出す。

「誰よ！ 誰が……誰がサトルを！」

リンもサトルに駆けよって、必死に傷口の辺りにガーゼを当てる。

だが、そんなことでは傷口から溢れ出す血は止まらない。

ざくり、ざくりと雪の中歩みを進める人がそこにいた。

「久しぶり、皆。そして迎えに来たわ、ユリ」

そこにいたのは……サトルの上司である、ミサトだった。

手には一丁の拳銃。未だ白煙を上げるそれを腰に差し、彼女は一步、

また一步と歩み寄る。

「ミサト……少将……」

「悪いわね。ユリを完成させて昇級したの。今は中将よ」

リンは黙って銀狼を取り出すと、俊足の動きと距離を詰め、首を狙

って攻撃を繰り出す。

「無駄が多すぎるわ。せつかくの早い動きももつたいないわね」

ミサトはリンの速度を上回る速度で足を払うと、そのまま腹部に一

撃を決める。

「うっ！」

そのままリンは数メートル吹き飛び、ごほごほと酷い咳をする。

「ユリは言わずもがな動けないでしょうし、ヒロキの狙撃も無駄ね」

その言葉とほぼ同時にライフル弾が飛翔する。だが、それもミサト

のそばで突如軌道を変えると闇の中へ消えていった。

「最新の電磁波兵器は銃弾にすらも干渉するようになってるのよ。」

「知らなかったかしら？」

「クソっ……！」

そう言うとミサトはユリへ手を差し出した。ユリはしばらくの間その手を取るのをためらっていたが、意を決してミサトへ問い掛ける。「サトルさん達は……どうするんですか？」

「あなたが望むなら、ここで保護してもいいわよ。私としても、子供が死んでいくのは耐えられないしね」

「何……綺麗事言って……ごほっごほっ」

リンはなんとか立ち上がると、ふらふらとぐらつきながらも銀狼を構える。

「今だってサトルをこんな風に撃って……ユリだって、戦場に送り出して……」

「こうした方がいいのよ。結果として、多くの命を救える。それだけよ。ここで私たちがやりあえば、死ぬのは間違いなくあなた達だ。

でも、こうして戦う前に決着を付けければ誰も死なない。ユリだって、ユリ一人が戦えば、他の人は戦わなくても済む。それによって、多くの命が救われる」

「だからといって、わずかな犠牲を出していいはずがない」

サトルは腹を押さえながら上半身を起こす。慌ててリンが駆け寄り、体を支えた。

「なぜユリが犠牲にならなければならないんだ」

「あら、一つの命を犠牲にすれば大勢の命を救えるのよ？」

「それは……間違っている……ごほっごほっ」

雪原に真っ赤な血が吐き散らされる。それを見て、ミサトは痛々しそうに目を細める。

「ここであなた達を殺しておいた方が、この先反乱の芽を摘み取る意味でいいのは間違いはないわ。でも、昔の縁もあるし、殺すのはやめておくわ。私も肉親のように思って育ててきた子を手に掛けるのは少々気が引けるからね」

「俺も肉親のように思って慕ってきたあんたを殺したくはない。け

れども、俺は大事な人のためならそれすらもしてやる」

「自分勝手ね。自分のために他を殺すことを肯定する。その様子は本当に子供っぽいわ」

「それはどうか？ 大事なものを守るために他を犠牲にしなければならぬときもある。俺にとつて……世界の平安だとか、人の生き死にだとか、そんなものに興味はない」

サトルは胸のポケットから黒い小箱を取り出した。

「俺は自らパンドラの箱を開ける。ユリをきっかけに変わった俺がこの先どうなるか、ちよつとした好奇心が湧くのでな」

「何をする気……？」

サトルは自らの手でパンドラの箱を開いた。

「まさか……ッ！」

「さようなら、師匠」

そう言つてサトルは銃を構えると、遠慮することなく引き金を引いた。

## 第十五話 Deciding (後書き)

銃声が 鳴り響く。

放たれた弾丸はミサトの体を貫き、そして決着をつけた。

そう、全てが終わったのだ。終わったのである。

次話、最終話 Finishing

## 最終話 Finishing

### 第十二話

サトルはぼんやりと窓の外を見渡す。

ここはオキシデリボ社専属研究島へヴン。オキシデリボ社が研究のために造り上げた現代技術の結晶ともいえる島である。

彼がいるのはそんな島内にある病院の一室。腹部には包帯が幾重にも巻かれ、腕には点滴の針が刺さっていた。

隣にはユリが椅子に座って本を読んでいた。彼女は毎日のようにサトルの元へと見舞いに来ているのである。

全てに対し決着をつけたあの夜、サトルは瀕死の重傷を受けていた。胸部の傷からは止めどなく血が溢れ出し、止まることを知らなかった。

ヒメとヒロキも駆け付け、どうにか傷の処置をしたが、可能な限り早くある程度施設の整った病院で処置を受けなければ危険な状態にあった。

「ヒメ！ あんた医師免許持ってんだからどうかしなさいよ！」

「麻酔もない、手術道具もない、衛生的にも問題。この状況では大した処置はできない」

「何よ何よ何よ！ こんなときだからこそ必要なんでしょ！」

激昂するリンに対し、ヒメは申し訳なさそうな表情を浮かべて顔を背ける。彼女がどうにかできなければ、この場に誰がいたってどうしようもないことだと、リンも理解してはいたものの、認めることができなかった。

「無理を言うな……リン」

「だってだって！ アンタが死んじゃうかもしれないのよ！」

「俺はユリを取り戻した。それだけで満足だ」

「その後はどうするのよ！ これじゃあユリだって満足しないでしょ！」

その言葉は波紋のように消えていく。ユリは表情を落として肩を震わせる。

「サトルさん……助けに来てくれたのは凄く嬉しかったです。でも、こんなのもって……あんまりです！」

ぼたりぼたりと涙が落ちる。涙は雪を溶かし、そして冷やされ固まっっていく。

「ん……？ 何の音っすか？」

そのとき、強い風が吹きつける。雪を混じったその強風は上空からやってくる。

強い光が一同を包む。それは一機のヘリコプターだった。

「大丈夫か！」

次々と降りてくる数人の青年達。突然の事態にサトル達はぼんやりと見つめる。

「ああああの、ただ大丈夫ですか？」

桃色のかかった金髪の少女が現れる。彼女はゆっくりとサトルに駆け寄ると、傷の様子を窺う。

「これは……酷いですね……。レンさん、ウィルさん！ 担架を用意してください！」

「わかったよ」

「りょうかいっ」

二人の青年が担架を下す。サトルは担架へと乗せられ、ヘリコプターの方へと運ばれていく。

「な、何……？」

「いよ、お嬢ちゃん」

そこに立っていたのはアランだった。何がなんだかわからないという様子でリンはアランに尋ねる。

「一体どうして？」



「お前さんたちが頼んだんだろ？ 逃亡先を用意してくれって」

その言葉で、リンは数日前のやりとりを思い出す。ヒメがアランに頼み込んでいたこと……作戦が成功した後の逃亡先を用意してほしいと頼んだときのことを。

「ウチの会長……そこにいる桜木ユイ会長と協議した結果、ウチで匿うことになった。その代わりに、ちよーっと仕事を頼むことになるかもしれないがな」

「ウチで……って……？」

「株式会社オキシデリボ専属研究島へヴン。そこでしばらくは生活するといいで。お前さん達も仕事が必要だろ？ ウチがそういうのを斡旋する代わりに、こっちは生活場所を提供する。つまりギブアンドテイクってヤツだ」

アランはにっこりと笑って親指を立てる。リンは茫然としたままそんな彼の様子を見つめていた。

「サトルさん……」

「どうした、ユリ」

読んでいた本をぱたりと閉じて、彼女は本を膝の上に置いた。

「私達、もう離れ離れになりませんかよね？」

ユリがとても不安そうにそう尋ねる。

「そうだな」

「サトルさんが戦うというのなら……私はサトルさんと一緒に戦います。いつまでも一緒にいたいんです。だから……」

「いいのか？ お前は……誰も傷付けたくない……」

「私は人も物も殺したり、壊したりしたくありません。でも……サトルさんが進むというのなら……他を犠牲にする道を歩む覚悟はあります」

そう言い放ったユリの表情は力強かった。サトルはその表情を見て安心する。

「そうか」

彼はそう一言だけ呟くと、体を起こしてユリの方へと手を伸ばす。

「ここから先……恐らく厳しい戦いが待ち受けているに違いない。だが、ユリは耐えられるか？」

「はい。耐えます」

ユリはサトルの手を取ると、両手で優しく包み込んだ。

「……ありがとう。ユリがそう言ってくれて、とても心強い」

そのとき、自動ドアの部屋の入り口がスライドする。

「隊長、見舞いに来たっすよ」

「やっぱりユリいたかあ……」

「……」

三人はそれぞれの見舞い品を持ってベッドサイドまでやってくる。

「あら、リンさん。遅いご到着で」

「そういうユリはお早い到着で」

二人の間に力場のようなものが創造される。早くもヒロキは巻き沿いを食わぬようにと一歩下がる。

「サトル。これ」

争っている二人を後目にヒメは小さな袋を差し出す。

「お腹空いたときに食べて」

サトルはその紙袋を開き、中の品物を改める。

「クッキーか」

「手作り」

「美味そうだ。今食べてもいいか？」

ヒメはこくこくと頷いた。サトルは紙袋から綺麗にラッピングされたクッキーの袋を取り出し、中に入っている一つを取り出して食べてみる。

「む……。どうして俺の味の好みがあったんだ？」

「秘密」

そう言うと、さりげなくベッドに腰かけて、サトルのクッキーを一つつまんで食べる。

「え、ヒメ!? あ、あんたそんなもん準備してたの!？」

「あ、甘いものが苦手なサトルさんにクッキーを食べさせるだなんて……」

「ダークホースしゅつげ……ふごあッ!？」

何かを言いかけたヒロキをリンのハイキック(三回転半捻りつき)が襲いかかり、勢い余って頭から窓を突き破って外へと飛び出していく。

「うっ……まさかヒメにしてやられるなんて思ってもみなかったわ!」

「……」

ヒメはちよつと嬉しそうな表情を浮かべてサトルに寄り添うように座り直す。

「ひ、ヒメ!？」

「平和になった。たまには色ぼけてみるのもいいかもしれない」

「な、ちよ、遊びのつもりなら遠慮しなさいよ! ヒロキがいるじゃない! あつちにくつつきなさいよ!」

「ヒロキ……興味ない」

もしも本人がいれば間違いなく落胆するようなセリフをヒメは軽々と吐いてみせた。

「うーん……まさかの強敵出現ね……」

「ここは一時手を組みますか?」

「それも辞さないわねえ……」

そのとき、入り口の方からやけに元気なヒロキが登場する。

「り、リン隊長! ツッコミで殺さないでほしいっす! 死ぬかと思っただっす!」

「あら、無事だったのね」

「無事だったのねじゃないっす! 工事中で足場が組まれてあったから命拾いしたっすけど、もしそうじゃなかったら一階まで急転直下っすよ!？」

「足場があっただんでしょ? ならいいじゃない」

わずか二言でヒロキの文句を一蹴すると、リンはユリと作戦会議を始める。

「た、たいちよあ〜……。そんな女の子はべらしてないで助けてほしいっすよ……」

「だから鍛錬が足りないと言っている。しっかり鍛錬していれば10階から飛び降りても骨折で……」

「済まないっすよ！ てかそれじゃあ大問題じゃないっすか！」

「骨折など一週間で治るだろう」

「痛いっすよ……」

「だから鍛錬が足りない」

「ヒメちゃんは黙っててほしいっす!!」

きゃ、と言つてヒメはサトルに引っ付く。

「サトル……怖い」

「こーなつたら戦争よ！」

「はい！」

こうして病室の一室で大戦争が始まった。

とある人が言った。戦争と恋愛においてはいかなる手段が許される。どちらも手加減無用という点では同じだが、けれども戦争はある一定のルールに基づいている。恋愛は時として卑劣な手段に出ることがあるだろう。

そう考えると、戦争よりも恋愛の方が大変な戦いかもしれない。

人の恋愛、それと国の顛末……一個人から見れば、そのどちらも重要度は同じだろう。

たとえ国が天下を取ろうとも、その人の一生が惨澹たるものならば意味はない。だが、国が傾こうとも二人が幸せならば、それはそれでいいのかもしれない。

今、日本という国から大きな力が失われた。それはこの先戦局を左右する強力な兵器だったのかもしれない。だが、それはある人にとっては大変な想い人なのである。

戦争と恋愛。果たしてどちらが正しいことなのか。

そのお話の顛末は神のみぞ知る、ということなのかもしれないが、  
ともかくサトル達の戦争はサトルの勝利で決着がついたのだ。  
結果として日本も仕事も財産も捨てて想い人と生きる道を選んだわ  
けだが、果たして彼らは幸せになることができるのだろうか。これ  
も神のみが知っていることだろう。

T o b e c o n t i n u e . . . ?

## 最終話 Finishing (後書き)

部品としての俺 『I as parts』 series 2 n  
d story. はいかがだったでしょうか？

長いようで短かったですね・・・。

初回掲載日からおよそ三ヶ月・・・。あっという間の連載でした。  
ですが、『I as parts』シリーズこと、部品シリーズは  
まだ終わりません。

続いてこのシリーズのメであり、そしてついにロベミライアへとお  
話の焦点が当てられる第三部、部品としての私 『I as pa  
rts』 series 3rd story. が始まります。

第三部の主人公はロベミライアで生活するとある少女です。

彼女はロベミライアの中でも比較的高い地位についており、日々国  
から下される命令に従って戦闘をこなしています。

そんな彼女が人とかかわり、そしてどう変わっていくか。

それを描くのが次回作となっております。

さて、ネタバレはここまでにしておいて、残りは来週の楽しみとし  
ましょう。

では、皆さん、また来週を楽しみにしてくださいね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3150j/>

---

部品としての俺 『I as parts』 series 2nd story.

2011年2月6日13時54分発行